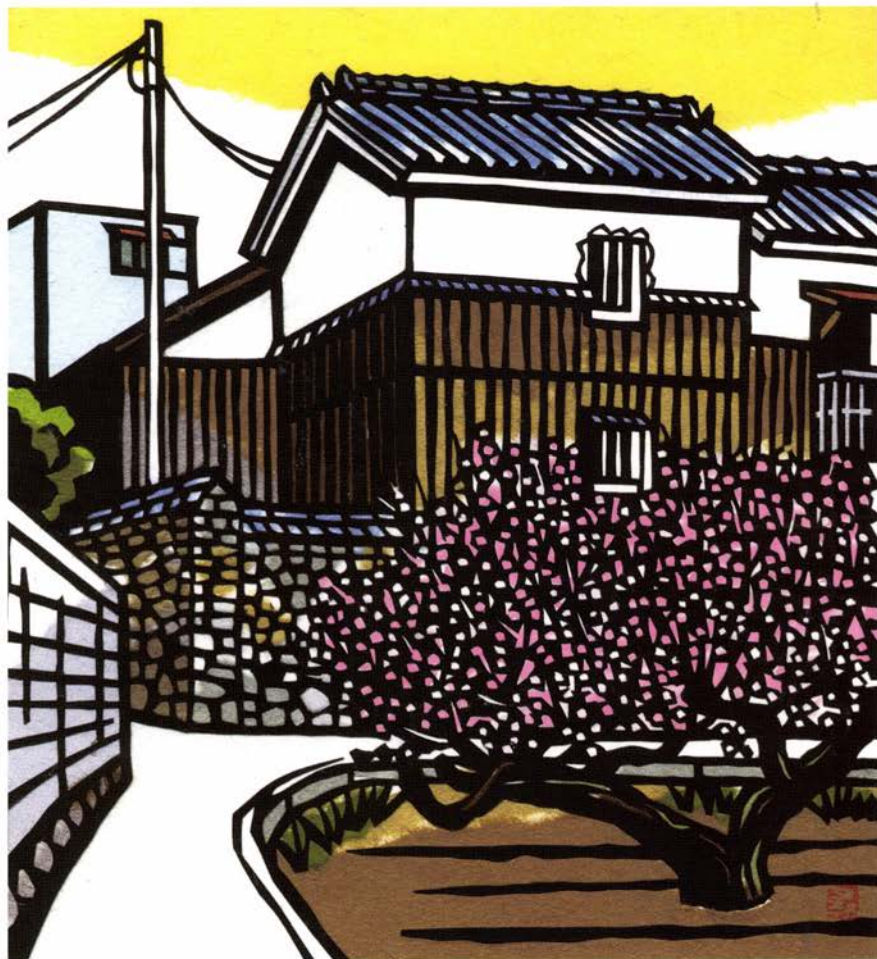


川柳塔

昭和四十一年一月九日
平成二十六年三月一日
創刊大正十三年 通卷一〇四二号



日川協加盟

No.1042

三月号

「川柳塔」は大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成二十六年で九十周年を迎えます。これを記念して合同句集「川柳塔」を発刊致します。合同句集は昭和四十九年以来十年ごとに刊行し、今回は平成十六年に続く第五集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎致します。一人でも多くのお申し込みを心から願います。申し上げます。
川柳塔社

☆刊行 平成二十六年七月一日発行

☆締切 平成二十六年四月十日(木)

☆体裁 B6判・ハードカバー・上製本

八〇〇頁(予定)

☆参加費 五千円(句集一冊呈・送料込み)

☆掲載句 一人 十五句(自選)

☆申込

所定用紙に掲載句(平成十六年以降の発表句、または未発表句)を記入し、左記川柳塔事務所へお申込み下さい。なお、参加費は同封の払込用紙でお願いします。

☆送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル二〇一号

川柳塔社 合同句集係 宛

TEL・FAX (〇六) 六七七九―三四九〇

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>

約 束

小 島 蘭 幸

「蘭幸さん、ちょっとご一緒しませんか」川柳大会の帰りに、やさしく声を掛けて下さった方がいました。その時私は、「今日は、用事がありますのですぐ帰ります」と冷たくお断りしたのでした。今から三十年以上も前の事です。声を掛けて下さったのは石部明さんでした。私はあの時の事をずうっと気にし、後悔していたのですが、明さんは、気にも止められず、どこの大会でお会いしても、やさしく声を掛けて下さっていたのです。竹原の記念大会の選者をお願いした時も、快く引き受けて下さいました。今では懐かしい思い出です。

平成22年春、明さんから突然の電話がありました。それは朝日ひろしま柳壇の選者の件でした。「まだはつきりはしないんだけど、もし依頼があったら引き受けてくれるか」という事でした。私はこの電話を受けた時、すぐに以前、お断りした時の事が頭を過ぎったのです。そして即座に「はい分かりました」

と返事をしたのでした。

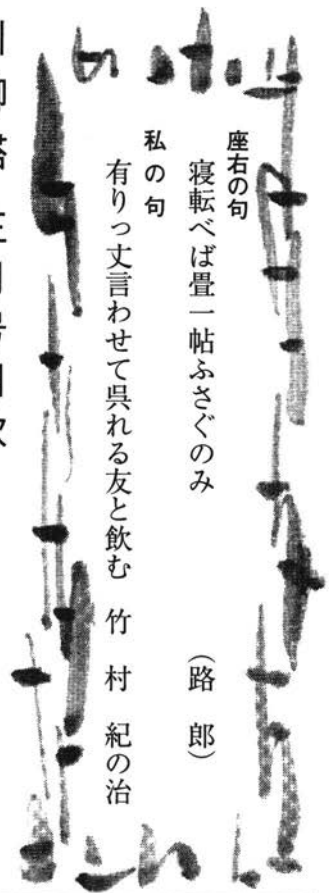
平成23年1月、新春たましま川柳大会に明さんは出席されました。課題「窓口」を私が選をしたのですが、その時の天位にいただいたのが明さんの作品でした。

青空行はどうぞ2番の窓口へ

明

平成23年8月10日、明さんは、自身のブログ「顎のはずれた鯨」に川柳塔を紹介されています。私が主幹になった事、木本朱夏さんが編集長として頑張っている事、バックストローク同人の小池正博さんの評論『麻生路郎読本を読む』が掲載された事に触れられ、「目指すべき川柳の方向性は必ずしも同じではないが友情をもって応援したい」と結ばれています。

平成25年8月、朝日新聞社、広島総局長から電話がありました。朝日ひろしま柳壇の選者を紹介していただけないかという事でした。この時、すぐに明さんの顔が浮かびました。そして後日、「私でよければお引き受けします」と電話をしたのです。明さんがご存命中に約束を果たす事は出来ませんでした。朝日ひろしま柳壇の選句をするたびに、明さんのやさしい笑顔を思い出しています。



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

有りつ丈言わせて呉れる友と飲む 竹村 紀の治

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「小豆島の春」

■巻頭言 約 束

私の値段

川柳塔(同人吟)

自選集

温故知新

川柳塔の川柳讃歌 ⑪

新川柳鑑賞 ②⑤

水煙抄

西尾 栗句抄

俳風柳多留一二篇研究 9

英語 de Senryu ②⑦

江戸を楽しむ ⑮

愛染帖

檸檬抄 「それから」

小島 蘭 幸 …… (1)

仁 部 四 郎 …… (2)

小島 蘭 幸 選 …… (4)

木津 川 計 …… (48)

麻 生 路 郎 …… (49)

川 上 大 輪 選 …… (50)

吉村 侑久代 …… (74)

小 栗 清 吾 …… (75)

新家 完司 選 …… (76)

大内 朝子 共選 …… (80)

竹治 ちかし

大内 朝子 共選

私の値段

仁 部 四 郎

或る歳時記で、「ともかくもあなたたまたかの年の暮」という小林一茶の句を見つけてなるほどと思った。だが、私にも「心に移りゆくよしなし事」(吉田兼好・徒然草)はたくさんあるなど考えながらテレビを点けたら、来年度の国の予算が過去最大の95・9兆円規模になるというニュースが目に入った。国が、それだけの値段の、有形のモノ(財貨)や無形のモノ(用役)を買うということである。

需要と供給のバランスが成り立つところで財貨や用役の価格が決まるわけで、財貨や用役が時代の欲求にどれだけ応ずるかで、例えばプロ野球選手の年俸や東京都知事の椅子のプレミアム価格が決まる。TPPの交渉が終結した段階で、コメの値段がどのような推移を見せるのか大雑把に言えば、それは日本の農業の値段ということになる。95兆円をこえるという国の予算のなかでどれほどのウエ

「探る」

一路集

「ポリシー」

「じわじわ」

初歩教室「コマーシャル」

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

せんりゅう飛行船³⁹

追悼 徳田ひろこさんを悼む

追悼 大石あすなろさんを偲ぶ

津軽発おもしろ景色²⁰

民族の詩歌⁽²¹⁾

二月本社句会

句会燦燦

各地柳壇(佳句地十選／川端一步・山本希久子)

三月各地句会案内

柳界展望

■編集後記

山田耕治選…(83)

福西茶子選…(84)

川崎ひかり選…(85)

山口光久…(86)

黒田能子…(88)

早川遯行…(90)

新家完司…(91)

上田宣子…(92)

小林妻子…(93)

高瀬霜石…(94)

三好専平…(95)

青砥たかこ…(96)

青砥たかこ…(100)

各地柳壇(佳句地十選／川端一步・山本希久子)…(101)

三月各地句会案内…(114)

柳界展望…(116)

朱夏・いさお…(120)

座右の句

夢掴むために両手は空けておく

(楓 楽)

私の句

日に当たり風にも当たり老い磨く 笠嶋 恵美

トをしめることになるのだろうか。

私は、昭和二十六年に高校を卒業して一浪した。県立高校の県費外の職員に月給三千三百円であった。母にはずいぶん喜ばれた記憶がある。昭和三十一年には県立高校の教員になったが、初任給の本俸は九千三百円で、宿直手当が、代直の分までで三千円ぐらいになって大いに助かった。平成五年に校長で定年退職したが、その時の値段は現在も企業秘密である。

「サン・ピン(三兩一分)」は、お江戸の下級サラリーマンであった渡り奉公をするお侍の代名詞だが、「あ、ほしい百両に人だかり」という江戸川柳に共感を覚えた二本差しも多かったであろう。

「ちと金が出来てマルクス止めにする」(井上剣花坊)という句にはつくづく感心しているが、田辺聖子著の「川柳でんでん太鼓」には、「美しく老いるに矢張り金が要り」(小林愛穂)もある。

なるべくしてなったデモシカ教員だったのだから、カネのことをつべこべ言う柄ではないが、さて、私の値段の終わる値はどういうことになるのだろうか。



小島蘭幸選

鳥取県 斉尾くにこ

にんげんの味を哀愁から学ぶ
お正月ポインセチアはまだ朱い
午後十時二時三時四時極楽寺
的になる選者の胸の赤いバラ
しあわせのゆりかご揺らすのは自分
無駄なことしてきたからの味になる

堺市 榎原道夫

学校の冬の廊下の綿埃
自転車置き場に固っている落ち葉
てのひらを葉書のように見ていたり
球根の根気は頼りがいがある
草野球草から闘魂をもらう
学校のそばを流れている小川

鳥取市 福西茶子

逝けませんアナタが料理出来るまで
IQはどれ程なのか新手詐欺
春闘をしても年金減らされる

優しいがビリッとこないから嫌い

円安になって家計は赤になる

仕切屋の居ない会議と伸びた蕎麦

和歌山市 木本朱夏

住吉っさんで猫を拾うてからの縁

父さんを想う銘酒を載いて

光りもんが好き大阪の女やもん

一瞬に花凍りつく男の死

たかじんが死んでところに氷雨降る

九回裏西日は赫く燃えている

豊中市 藤井則彦

喪中ががき出しても呉れた年賀状

自分史を書いた自分が怖くなり

弱点があるほど助け合う職場

消費税上げて張り切る一円玉

鴛鴦は互いに知らんぶりもする

独り言もうかうか言えぬ秘密法

檀原市 居谷 真理子

淋しさを誰かのせいにしたかった
木枯しを洩らすな奥歯噛みしめろ
見つけたす日まで待つてろよ答
咲く花は咲く氷雨の今日だって
外は雨私を煮含める小部屋
お互いを最後の友として生きる

弘前市 高瀬 霜石

なにことも咀嚼いいこときつとある
定年万才 今日から弥次郎兵衛になる
未体験ゾーンへ進む定年後

米櫃はもうすぐ死語になるだろう

松竹梅 梅がわたしにフィットする
バイキングなのに海苔・鮭・目玉焼

八幡市 今井 万紗子

春色の靴を探しにひと回り
幻想からストンと落ちた顔洗う
内緒だがやっぱり妻が勝ちそうだ
ラブストーリー夏のまぼろしだったのか
泣かんとき裏口いつも開けてある
酢でしめて老いの回転確かめる

熊本市 永田 俊子

甘酒屋に負けて一句を得た梅見
人間忙し猫の哲学昼寝する
それぞれの過去伏せ笑うまぜ御飯

髪切つて欲捨ててゆくひとり旅

眠れない心は広い野に遊ぶ

天を指す梅の一と枝晩節の志

京都市 高島 啓子

物事は思ってもない方へ飛ぶ

オルフェーヴルに憧れている木馬

ヘイトスピーチ不毛以上のものを生む

大きな顔で坐っていればいいのです

出たとこ勝負と決めてから楽になる

分水嶺であさつての方を見る

大阪市 谷口 義

ジャズ葬だったと聞く亡母のお医者さん

こわい顔するほどのことはなかった

A型で魚座仮の姿でございます

ビニールの袋に入れておきました

神様は戸別訪問なさらない

おばあさんは平常運転で通す

松江市 石橋 芳山

アイドリングストップ戦意消失す

美しいもののへ男として落ちる

どうぞって言われて進む冬の奥

透き通ったまんなまで冬が立っている

縮こまった背中を冬が転げゆく

屈辱に耐えるしかない重い顎

篠山市 酒井 真由

同期会われら老いゆくため会うか

ほうらこんな家族へのラブレター

どん底で貰った愛のことをふと

たまゆらのいのちホワイトクリスマス

何の虚しさ裸身にしゃはん泡立てて

聖夜餐音なくひらく木の扉

寝屋川市 森

茜

立ち止まる背の美しき初鏡

どんぐりを拾って風の子になった

泣きやんですつと通してくれた路地

朝市で値切った蟹が絶品で

つぶやきの向こうダンボの耳がある

一所懸命だったな十年日記閉じ

吹田市 山本 希久子

七草に命寿ぐ春の抄

蓋少しずらせば春が見えてくる

紙風船紙ヒコキの我が命

御飯よりコーヒーが好きお仏壇

新しい靴さあ終活をはじめよう

おだやかに生きる比べるもの持たず

豊中市 江見 見 清

じわじわと地球蝕む人の知恵

日本酒とワインとジュース三世代

カレンダー妻の予定は楽しそう

おだてだと知ってのつてるのも礼儀
決め科白メモまでしてたのにトチる
変体仮名姉の手紙が読みづらい

橿原市 安土 理恵

生真面目かまだこだわっている黄色

夢はまぼろし追いかけてはならぬ

薬ぬる甘えたこともあった背中

うたた寝の夫へわたし母になる

束の間のほんやり冬日あたたかい

予兆かも知れぬボレロが鳴り止まぬ

鳥取市 倉益 一瑤

甘い水覚え沼から抜けられぬ

保護色になって横着しています

ポストまで赤い心を抱いてゆく

育てたのは可愛いヒナの筈でした

小気味よい毒舌拍手してしまい

見えないところから錆びてゆく気配

松原市 森松 まつお

ラーメンが何とも旨い焼き鳥屋

焼き鳥の皮一串で生二杯

カレンダー妻の予定があふれだす

レシビ通りしたのに腹の立つまずさ

年金が減っても増えている酒量

恐いのは編集長から来るメール

大阪府 米澤 俣子

あれとそれ化石ことばで通じ合う
亡母の歳越えても五欲まだ減らず
スピードの渦に吞まれている老化
問診が過去の秘密に触れたがる
レンコンの穴に詰めとくいい話
雨しとどたかじんさんの死を悼む

香芝市 大内 朝子

春の目覚め希望の種も発芽する
むらさきの心模様は恋かしら
躓いた小石に悟る生きるとは
気が付けば老いには老いのいいお味
それからを語ると熱い涙壺
新色の紅と春待つまだおんな

大阪市 升 成 好

鉛筆と紙一枚の小宇宙
うまかった自分に言うて皿洗う
失敗という神からの荒療治
男らしい男に太い眉がある
檻の虎不味そうだなと僕を見る
妻の皺一本ずつにわが余罪

大阪市 古今堂 蕉子

磨きすぎ子が微粒子になりました
守備範囲広いお方にまかせきり
進歩する医学心は病んだまま

アンパンマン似てないよーと孫が泣く
一杯呑んで忘れろとは人の事
かくし味ですお祖母ちゃんの愛です

川西市 西内 朋月

悲しみを真綿で包むぬいぐるみ
知恵の輪がやつと外れて眠られる
富士の雪ころ豊かにしてくれる
煩惱を捨てきれなくて蹴蹴く
瘡蓋を剥がすと過去が蘇る
まごまごとしているうちにもう八十路

三田市 北野 哲男

ころころと音楽的な女旅
皆去んで影絵の村へあと戻り
労るとすぐ涙ぐむ母になり
消去法最後へ残すのはお酒
終章は桜に学ぶ処世術
悪友の通夜毒舌で盛り上がる

西宮市 西口 いわゑ

一・一七十九年という月日
二人して七種粥を食す幸
えんぴつがとことん本音突いてくる
三世代揃い新春酌み交す
誕生へ祈りも込めている袱紗
みんな忘れて夕日の中に溶けている

松江市 川 本 畔

巢の中に卵がなくてうろたえる
野良猫も私を見る冷たい目
古老がくれた山の彼方の吊し柿
わたくしも少女も独りけんけんば
色褪せた箸は哀しい美しい
幸せは途中の橋にありました

米子市 後 藤 宏 之

旅の荷に読むあてのない本入れる
がっちり好きなケーキは食べている
しまい風呂今日の余韻に目をつぶる
好好爺何もなかったかのように
がっちりとマスコミ向けの握手する
長生きの秘訣とあって好き勝手

島根県 伊 藤 寿 美

亡母の文筥に遺る亡父の候文
捨石が一枚岩になる月日
ゲルニカの絵から聞える反戦歌
よそ見して涙気づかぬ振りをする
一番の味方後ろで裾を踏む
一人では貼れない傷がある背中

犬山市 関 本 かつ子

上向きな景気を見せる松飾り
思い切り走れる足があつて古希
真剣な顔で真冬の予報官

柏手も合わせ二人のお正月
好きだった人とも終る年賀状
米を研ぐリズムに戻る小正月

和歌山市 福 井 菜 摘

夢ひとつ叶い歩幅が広くなる
信じよう背中にやる気満ちている
どの道も耐えた努力の跡がある
まだまだと余白にペンを走らせる
甘言に嵌ってからの不整脈
揺れ動くこころ鎮める写経筆

和歌山市 上 田 紀 子

数独でちよつと頭のリフレッシュ
途轍もない壁待ち受けている老後
謎なぞに負ければ僕が皿洗い
予報士の元氣シベリア寒気団
円安も株も縁なく葱刻む
諸もろの想い沈める冬木立

鳥取県 竹 信 照 彦

初詣でちげの神社へ初歩き
ちげでよし出雲大社は混んでいる
実利だけ求める癖は戦後派だ
転んでもただで起きないのが昭和
酔っ払い出るのは昭和歌ばかり
新年に右肩上げるのはよそう

西宮市 緒方 美津子

燦燦と去年までとは違う富士

小言より手強い妻の無言劇

選んだ漢字は輪 折る自殺ゼロ

凶を引いて一年間は長かった

ぺちゃんこの鼻で主役を張るややこ

お屠蘇酌む猩猩謠う父が居た

神戸市 山口 美穂

下戸なりに新年会を楽しんで

足踏みも足してウフフ万歩計

注連縄に群がる雀の声を聞く

駆け足で今年も過ぎてゆく怖さ

脳からのメールを脚は受信拒否

無い袖は振れないのです詐欺師さま

寝屋川市 平松 かすみ

久し振り娘に頼む耳掃除

大声の方が近頃好きになり

やんちゃした幼い頃が宝です

落ち零れ流されながら来た傘寿

食卓は独りカロリー気にもせず

ママチャリで無事に終った墓掃除

出雲市 竹治 ちかし

年輪を一つ重ねて四季巡る

一日の始め確認する曜日

三食とお茶のリズムのある余生

人間の忘れたことを猿に問う

幸せも変わらぬものの中に棲む

佗しさよ惚れる惚けるも同じ文字

岸和田市 岩佐 ダン吉

影までもひとり真つすぐ立っている

火を継ごう彬の句碑の前にする

言葉数少なく何も飾らない

疲れてはいないと僕に言い聞かす

手を添えるやつぱり通うものがある

誰もいない憎む私がひとりいる

出雲市 石倉 美佐子

彼岸桜は御彼岸さんを知っている

音無しの構えにも似た春の雨

紋白蝶ひらひら何時でも一緒

あやとりをしても寂しい一軒家

川柳に泣いたり笑ったりしています

羽を休めて今日の貴方にありがとう

大洲市 中居 善信

フエミニスト金魚の水を変えている

柏手を打っただけです初詣

私と違う私を飼っている

昨日や今日の話ではない保守回帰

忘れねばならないことが一つある

捨てることが出来るのならば捨てている

宇部市 平田実男

ためして合点出来ない事と出来ること

菜園がオアシスとなる定年後

舌二枚みんな持つてゐる永田町

赤字国債が家計簿にも欲しい

英霊の眠りを浅くした総理

腹話術上手なほうが当選し

富田林市 中井アキ

正面を向いてあなたに有りがとう

リハビリはわたくし流にするお洒落

捨ててきた里にほっこり包まれる

号令をかければや々と動く尻尾

二の腕の辺りにためる忍の文字

残高と命駆けっこしています

和泉市 横山捷也

泣き声もやがて寝息の孫の守

孫からの代りばんこの初電話

元日の朝にまぶしい割烹着

試行錯誤脇道ばかり歩いてる

大あくび夫と孫の同じ顔

同じ頃同じ事して老夫婦

泉佐野市 山本蛙城

午年の駆ける跳ねるの賀状来る

車轍余生の轆馬なつかしむ

浴槽で笑いヨガすりゃ湯も笑う

マンションに工夫それぞれ松飾り
ベランダで仕ります四方拝

戦地還りの足が二センチ縮んでる

西宮市 片山 忠

突き抜けてしまうと楽に生きられる

ノッポビルに背伸びしながら勤務する

生きている内にしなさいラブコール

ほどほどにしときなはれとママは注ぐ

代行を頼んでからのチャンチキおけさ

初めから相手にしない五割引き

藤井寺市 増井ヨシ枝

水仙の開く音する霜の朝

年越は亡夫の好きなニシン蕎麦

女性専用じいちゃん一人迷いこみ

青信号一ツ見送り車椅子

亡母の歳越えて蠟梅香り立つ

障子紙破れ桜が咲きました

和歌山市 武本 碧

善人も時に我慢がほころびる

雑念は遠心力で振り切ろう

ハングリー精神たまに揺り起こす

マンネリヘファイトのシャワー掛けてみる

プライドが心の敷居高くする

三人のかごめの輪にもあるはじめ

さいたま市 星野 育子

やれば出来る人と言われて今がある
デジタルになり遅刻するシンデレラ
夢でもいい逢いたくて早目に寝る
右にアメ左にムチを離さない
住所録今年も二人消えました

東京都 まえで とよこ

追い羽根の音も相手もはやおぼろ
春の野の風と七草バック入り
七草粥すずなすずしろすぐわかる
七草粥「おかわり」の声早いこと
靖國神社 髪しろき遺児頭垂れ

横浜市 小野 句多留

二人して買う事にした節料理
聞く方が早いスマホで探すより
ノナルの妻と波調が合わぬ酒
ボチボチと始め年越す諸事雑多
価値観の違うテレビに見離され

横浜市 菊地 政勝

澄み渡る空へ偽装のない日の出
良き伴侶二部合唱のハーモニ
馬の背に堂々つける消費税
退化する右脳に聴かすわらべ唄
二者択一の運にまで逃げられる

富山市 島 ひかる

雪おんな乱舞へ春はまだ遠い
ぜんざいと塩昆布に似た夫婦仲
直球を投げて戻った変化球
母似だと言われて母はもう居ない
魂を研く結婚親に成る

可児市 板山 まみ子

台所をキッチンと言い煮ころがし
ヤバイとはグッドの時もあるらしい
三食を食べさせる人いて元氣
神仏に頼らず生きてまだ元氣
たそがれてまだ捨てられぬお気に入り

犬山市 金子 美千代

スーパーのはしごママチャリ気合入れ
大晦日満艦飾の客布団
鮎酒を供え一緒にお正月
木曾馬のボディー親近感を抱き
霜柱踏んで七草庭で摘み

愛知県 早川 遡行

煩惱の赴くままに喜寿の春
誰も来ず何処へも行かず三ヶ日
昼間っから飲まねばならぬ訳があり
町が市になってふる里他人めき
DNAまで縫れ込む遺産分け

京都市 藤井文代

へそくりも網の目くぐる額に減り

切り口変え頼み事にも情を着せ

他人なのになかさがさかずき深き縁

大欠伸うかうかすれば記憶消え

出逢う人で景色に空気新鮮に

京都市 榎本宏子

北へ北へ辿りご先祖さまに会う

少年には遠い遠い喜寿の冬

三歳児の邪魔もうれしい祖父母の目

神頼み努力しますもつけ加え

一、二、三朝の体に火をつける

京都市 三宅満子

初夢も見ずに熟睡爺と婆

難題を積んで船出アベノミクス

プロポーズぬらりくらりで逃げた鯉

連名で始めて書いた年賀状

語りつぐ民話で和む冬の夜

亀岡市 井上森生

壮健な馬に肖る^{あや}老い気合

老熟の元気を創るのは馬力

生き甲斐を句作で探る七十路

かつこ良く強く楽しく老いる術

喜寿越えは果たして次のチャレンジへ

長岡京市 山田葉子

払わない医療費用がこんなにも

抽出しの奥の秘密がしゃべりだす

降りしきる雨も私の味方する

きつい服並べ痩せるの待っている

帰りたい思い湛えているこけし

大阪市 阿野壽美子

初参り振袖姿花を添え

クラシック自分の世界目を閉じる

年始め新たな誓い何時までも

年重ね渡す楽しみお年玉

完走してあとで味合う爽やかさ

大阪市 池上清治

料理番組見れば負けじと作る妻

食べさせて喜ぶ妻が側に居り

喜劇見てあとそば食べて誕生日

にこにこ心にな余裕もつ決意

うな重を奢るくらいに余裕ある

大阪市 井丸昌紀

主義主張違ふふたりで馬が合い

もう一度振り返るのを待っている

回らない独楽が一番よく喋る

耳を澄ませば春が扉を叩く音

孤独の群れ仲良さそうに笑ってる

大阪市 岩崎公誠

まだ生きる一日三度めし薬
老化度を測るスマホを持たされた
わからない母空を飛び生きている
難題をはいはいと受け笑われる
反対の声はもみ消す秘密法

大阪市 江島谷勝弘

うどんより牛丼食べる安いから
一歳児ビスケ放さず匍匐する
増税に対処方法思案中
もどるのか富国強兵こわいよな
ああ日本どうなることや想いやる

大阪市 榎本日の出

句作りが長寿社会を作り出す
家計簿をつけたことないケチである
消火器で消せる程度の恋したい
見栄を捨て鎧も脱いですぐ眠る
今晚も宇宙遊泳するつもり

大阪市 榎本舞夢

新年をカウントダウンして迎え
神籤凶倍返しして拝んでる
嬉しくて遊び過ぎたか風邪を引き
自覚してゆっくり今年は楽しもう
サプライズ期待してます誕生日

大阪市 大川桃花

素っぴんのわたし知らないご町内
福袋交換会に見る熱気
宇宙開発第二の地球さがす旅
準備万端あとはその日の運まかせ
人間も古くなったら尻尾出す

大阪市 奥村五月

今年から孫も飲めると仲間入り
当るほど一度食べたいフグ料理
雑魚ですが他人には負けぬでかい夢
小額で絆こわれぬ遺産分け
病む地球捨てて行く当てないヒト科

大阪市 笠嶋恵美

写経の字だんだん下手になってゆく
血液検査食のみだれをポンと出す
ポイント使いひとりほのほのするランチ
ふわふわと生きてほかしの色で咲く
第九聴くころろひとつに花は咲く

大阪市 神夏磯典子

三月の桜は夢をたべている
傘寿です言葉遊びをしています
長電話やつと元気になりました
日の流れ水の流れを見えています
天の句を追いかけいちにちが終る

大阪市 熊代菜月

泣き言は言わぬと決めた冬の朝
血圧のグラフに問うて旅プラン
エンディングノートひろげて冬の夜
恋の絵馬師走の風に音たてる
もう恋は出来ぬと誰が決めたのか

大阪市 小谷集一

文庫本積んでわたしの冬ごもり
訥弁の正攻法を武器とする
歴戦のスーツ最後の一張羅
癖のある文字に人柄にしみ出る
ゆっくりと思い出紡ぐ日向ぼこ

大阪市 近藤正

マンデラは死して世界に名を刻む
フクシマを伝え続けよマスコミは
大地震どうせ逃げ場のない日本
消費税軍事予算に使う腹
無駄骨も折って清清しい気分

大阪市 坂裕之

辛そうな顔して愚痴は聞いてやる
遠慮なく手酌で飲める友と飲む
お祝を届ける方がかたい顔
よく出来た人が近くに居る恐怖
花つけた草踏まれずに生き残る

大阪市 佐藤忠昭

寺の町キャンドルナイトお静かに
スタートは生国魂神社オダサク像
振り返り通天閣の薄化粧
谷町にアベノハルカスでんと建つ
疲れたとジャンジャン横丁串ビール

大阪市 澤田定子

始業式女性校長ひきしめる
高齢で年の用意も簡略に
賀状だけの付き合いになり五十年
脚痛め氏神詣で出来ぬまま
おめでとう侘しいひびき老い二人

大阪市 田浦實

強風を撓って躲す枯薄
自分の中の若い自分が楯を突く
豹変の術もだんだん上手くなり
阿弥陀様名を呼ばないで五輪まで
職人の卒業式はお葬式

大阪市 津村志華子

甘酒ではろりと酔うた梅の庭
梅昆布茶心やさしくしてくれ
無駄口は吐かぬこけしのおちよほ口
あらあらと失敗ばかり悔いばかり
米寿でも母を偲べば兄に戻る

大阪市 津 守 なぎさ

新年の他国語混じる温泉場
旅プラン練る時たのし今元氣
お伊勢さん若い二人も初詣で
寒い部屋出て温泉の有難さ
バイキング腹も身の内セーブする

大阪市 寺 井 弘 子

それぞれの歩幅で闊歩うまの年
金を出す話になると目を伏せる
誉められてダイヤますます煌めかす
光と影出し出してる青春譜
御身拭い光あふれる御開帳

大阪市 原 田 すみ子

やさしさに強弱つけて支え合う
見えぬものが皆が出し合うボランテア
あちこちに去年が残る家の中
大人四人 一歳が空気をませる
中流と思い込んで波静か

大阪市 板 東 倫 子

結局は断捨離何も捨てられず
負けた子が負けるが勝ちと笑ってる
問い詰めた妻の返事は恐ろしい
身から出た錆と言うても応えない
伝統の芸だがどこか錆びている

大阪市 伏 見 雅 明

さかずきを空ける仕草に逆らえず
満ち足りた暮らしに悪魔忍び寄る
自らの弱点をよく弁える
結局は負ける喧嘩が止められず
言い違い聞き間違つて恙なし

大阪市 山 崎 君 子

シクラメン今年も元氣ベランダに
上天気花生き生きとさわやかに
お年玉友遠くからただ涙
お正月すめば年賀の整理から
ベランダの雪のかたまり可愛くて

大阪市 山 本 加お里

親の歳越えてこれから正念場
願わくば呆けず元気で白寿まで
明日もまた朝日を拝むこと願う
近道の路地裏歩きドラマ見る
百歳も夢ではないと腹八分

大阪市 吉 内 タカ子

ハルカスで長い絆の囲み膳
笑い合い感謝と意欲もち帰り
先生の百九歳の糧を真似
戎さんお多福鮎は忘れない
逢いたいね電話してねの賀状抱く

堺市奥 時雄

接待の苦勞料理に生きてくる
外食より高くついているとクレーム
老いたりとしみじみ妻と交す屠蘇
シャッター街年始のピラも見当らず
うとうとと炬燵で見てるテロ騒ぎ

堺市 柿花和夫

躰いた肩に五輪旗ずっしりと
原発に雪では蓋はできません
駄馬なれど走ってみたい古希の春
内視鏡で覗かれている罪と罰
酸欠の街にも串カツの匂

堺市 加島由一

ふる里の方向いて食う恵方巻き
忘れるという幸せの中にいる
節度ある酒になさいと年賀状
朝ドラをつけラーメンにお湯注ぐ
式場を見て結婚を決めるとは

堺市 源田八千代

にこやかに老翁燼屠蘇を酌む
睨み鯛の目を刎り貫いて身を拵る
万歩計つけて住吉さん詣で
魁けて蠟梅香る冬の庭
神技なり剪定の老植木職

堺市 齋藤 さくら

カルチャーを楽しんでいる今が春
炬燵から出るのに気合入れている
寒い冬覚悟してたが愚痴が出る
断捨離の誓いを立てたお正月
子等帰り静かな食事取り戻す

堺市 澤井敏治

赤兎馬をここに抱く喜寿の旦
老人も大樹もげんき話題撒く
虎落笛無性に旅へかき立てる
羽化をして虹を渡った遠き日よ
見えずとて神は全能無のわたし

堺市 遠山唯教

平和という贅沢をして生きている
ふるさとの心は過疎になつてない
子がおくる米を大事に食べている
てつちりの舌にしあわせ舞い降りる
肩の荷が下りて仏の顔になり

堺市 内藤憲彦

プラス思考で命育む術を知り
酒好きのDNAを子に孫に
身代りがほしいと思う再診日
困ったら来いと言うても行くもんか
職引いて僕のドラマは第二幕

堺市村上玄也

懐かしいけれど悲しくなる軍歌

〇戦の悲劇知らずに懂れる

総理殿危ない舵を取りそうだ

居眠りはするがベッドで眠れない

若作りしても席を譲られる

堺市矢倉五月

祝日の旗希有な目を耐えている

額縁を変えて値打ちを上げた氣に

良い仲間飲んで食べたら花丸日

七日分貰うて七日飲み治り

ストレスを溜めぬ程度の願ひ事

大阪狭山市矢野梓

友の訃を添えて寒中見舞受け

鯛大根加え夫の誕生日

お互に歳ねとばかりを笑い合い

長病みはしません様に八十路坂

明日は明日今日を普通に過ごしたい

池田市栗田久子

柏手の響きひとしお宮の森

縁起物そこそ揃え三ヶ日

この寒さだれのせいでもないけれど

ひとまずは暦の上の春を待つ

雛飾る日を待つ桃の小さな芽

茨木市島田誠一

ええ人と言わせボツクリ終わりたい

外注のおせちに妻の高いびき

正月の餅のつかえで知る齡

時々緑に心洗わせる

おふくろの涙の訳を知る軍靴

茨木市藤井正雄

雨予報外れて怒る人はない

挽ぎたての野菜雫に自負がある

爽やかな朝は檸檬のポトリから

句読点裏に隠れている本音

酒出して話短く終わらせる

交野市森本弘風

百均でいつもの手帳買う私

俺様は並の亭主で恙ない

消費税奥の手もう無いと妻が言う

年末にとろろ事故を見て走る

八十路坂自分自身を待て余す

河内長野市植村喜代

私の頭いつになったら晴れが来る

今日もエンジン掛けても私よちよち

免許まだ離したくないのか夫

歩けたらよちよちだっていつか着く

ショートステイ夫に用事増えて来る

河内長野市 梶原弘光

パドックで午が入れ込む年の暮れ
息子待つ妻はワインを抱いている
思い出を友と拡大コピーする

亡父亡母の臭いを消している故郷

あの世での落ち会う場所は決めてある

河内長野市 木見谷孝代

十日戎のだんじり勇姿舞う故郷

また一人愛しい人の逝く故郷

馬が合う仲間と笑い福が来る

予定コース外れ楽しむ趣味の道

五十円の絵手紙で釣るでかい鯛

河内長野市 黒岩靖博

夢心地励む句作り除夜の鐘

甲午天をめざして駆け巡る

七億円当れば震え止まらない

すきま風誤解のとけたお正月

ハネムーンの孫に金庫の鍵はずれ

河内長野市 坂上淳司

読書よりスマホ車中は様変わり

家族葬竹馬の友にまた不義理

並足で行こうと決めた喜寿の春

免許返上乘馬クラブで試乗する

ハイドウドウ亡父の背中には広がった

河内長野市 谷久美子

ことごとく反論夫に凹まされ

仮面付け優しく口を利いてみる

一言が増えて中身が薄っぺら

すったもんだ越えて新年恙無く

年越して始まる娑婆の一里塚

河内長野市 村上直樹

書き初めは十年日記喜寿の初春

人生ゲームみんな勝者でみな敗者

皇寿越えれば俺もギネスの候補生

どうぞ神様明日も旨酒飲めますように

家族みな笑って未迎えたい

河内長野市 松岡篤

プレゼント物より金と正直に

被災の日生まれた子供もう三つ

頂きます牛や豚にも言うて食べ

その理想少し低目にしませんか

私でも褒められそうだ弔辞では

河内長野市 山岡富美子

陽炎の辻で卑弥呼とすれちがう

パスワード私に秘密基地がある

使い捨てのペンが狼煙をあげている

満開のさくら余生は口にせず

仏壇に草餅亡母とお茶にする

河内長野市 山室光弘

八十路坂見はてぬ夢が多過ぎる

猫の手も欲しい双子の育児中

不倫の恋指輪を抜いて逢いに行く

イケメンが役にたたない馬の脚

オアシスに集うアニマル帰省旅

岸和田市 堤 梢代

何事もなく幸せお正月

おせちよりステークが好きお正月

初夢は運転免許の夢を見た

青空を眺めてお誘い待ってます

えべっさん今年は何を頼もうか

岸和田市 雪 本 珠子

雲までが幸せそうな色してる

強がりの仮面外せば唯の人

ネット社会人の温もり感じない

追った夢持ったまんまで天国へ

肩の荷を徐徐におろして黄昏れる

吹田市 太 田 昭

追伸になると言葉が生きて来る

後片付け教えなかったおもちゃ箱

戦争は真面目にノーと言いなさい

九条で千人針は持たせない

あつさりとした挨拶に棘があり

吹田市 大谷篤子

やんわりと伝えていきますありがとう

笑顔よし愚痴もこぼさず春を待つ

前向きな話が進む甘い酒

お茶にして会話が弾む女の輪

ラジオ体操布団離れるきまりです

吹田市 木下敏子

切り替えがうまくいかないペンの先

パソコンもスマホも無いが夢がある

不規則になつて気楽なお正月

美しく老いる夢見て先ず歩く

老化とは嫌なものだと言う眼鏡

吹田市 須磨活恵

がらくたの中に昭和が混つてる

友が来て忘れた記憶を掘り起こす

言いすぎず出しやばりすぎず喉仏

若い日の夢を紡いだ刺繍針

刺繍糸花も枯葉もほしいまま

吹田市 野下之男

東京の空が晴れたよ五千万

オリンピック二度目見たいが鏡見る

八重桜テレビ見ながら妻を見る

あの日から一段綺麗富士の山

王将のギョーザ食べるに手を合わせ

四條巖市 吉岡 修

黒白をはっきりしない手もあるさ

絵馬代もたいへんだったサクラサク

ライバルが心の隅にねばってる

魔性らしいまた古疵にふれてくる

勝ち組のつけがこつちへ回される

高石市 浅野 房子

陋屋も正月ぐらい花を活け

冬ごもり一步も外へ出たくない

亡き人も一緒に唄う歌謡ショー

そこまでのひいきは無いよみな他人

一言が嬉しく思い出し笑い

高槻市 井上 照子

恙無く除夜の鐘聴き蕎麦すする

おめでとう言えぬ喪中のお正月

寂しくて少ない賀状いく度読む

甥姪もよい年になり子の自慢

歳いくつ美容院とは縁切れぬ

高槻市 指宿 千枝子

八十路坂ゆっくり上る初詣

過去未来かすんで見える傘寿なり

ほんやりの一日でしたハープティー

重役の風格をしてベビー椅子

スタミナが湧き出る午後のボレロ聞く

高槻市 片山 かずお

明日の風信じて明日の夢を追う

口下手を補うために肩を抱く

紳士ねと言われ紳士を演じ切る

DNA忘れて子には高望み

毒舌家腹は白いと言うけれど

高槻市 初代 正彦

百歳の命輝く笑い皺

ジャングルの命を守り抜く擬態

黒豆煮小鉢に盛ったプロの粋

ほどほどにヨイショされてる隠居の身

ブライドのネクタイ緩め昼の酒

高槻市 島田 千鶴子

湯たんぽのやさしい温さ母の愛

祝い膳すんで薬の水を出す

湯のたぎる音心地良い冬座敷

世渡りがとても上手な風見鶏

寒椿ぼとりと落ちて日が暮れる

高槻市 左右田 泰雄

ひとくさりしゃべったあとの茶がうまい

一回りして一休みする池の端

電話ベルよいこらしよと腰を上げ

ふところが寒いと背なが丸くなる

ちゃっかりが板についてるつまみ食い

高槻市 杉 本 義 昭

ときめきを隠しゆつたり湯につかる
這つても会いに行くよという返事
妥協して書く筆先が滲み出す
ビー玉を透かすとそこは万華鏡
戦中派終戦耐えた自負があり

高槻市 富 田 美 義

点滴に命の追加乞い願う
ちびた背に田舎を背負い母が来る
趣味を持ち無理ない日々に仕訳する
ご馳走は人目に触れてこそ楽し
言つたよね君の笑顔は運を呼ぶ

高槻市 富 田 保 子

加齢だなあの医者この医者すぐに言う
電車来た乗った座ったまだケータイ
寒椿一輪落ちて明日を知る
家計簿がいつも欲しいと給付金
遠回し若いお医者をする告知

高槻市 安 田 忠 子

産声の命華やぐ朝ぼらけ
まっさらな時間たつぷり欲が涌く
よう食べてよう寝て遊ぶ有難さ
あっち痛いこっち痛いと生きている
キャブテンになつて成長した高二

豊中市 池 田 純 子

元氣だよ明るい声のプレゼント
電線にスズメ見かけぬ寒い朝
御神馬はじつと我慢のお正月
梅の花父さんの忌に香り出す
やんわりが決め手なんだね握りめし

豊中市 松 尾 美智代

三が日やはりいつものおさんどん
皆帰りほつと寂しい二人膳
熱燗がおいしく思うお重箱
今日もまたしつかり歩く一万歩
庭の佗助もらつた人の名をつける

豊中市 松 村 里 江

耳そうじしてハッピーなニュース待つ
風糸の丈だけ天に近くいる
無印が似合う身丈に合う暮し
一寸ジェラシー交じつた拍手しています
目分量ですがきつちり分けている

豊中市 水 野 黒 兎

もう一度花びんに生きる枯すすぎ
つまずいた石さえ温い里の路地
生きている証抛血の出るかすり傷
留守電に他人行儀になる口調
表には出ぬ気配りに匂う汗

富田林市 片岡 智恵子

汚さないでほしい日本の食文化
まだ欲があるアンテナを高くする
環境を変えると心まで変わる
歩道橋利用するのも若いうち
張り替えた椅子は我が家の盛衰記

富田林市 山野 寿之

人と人織りなすドラマ愛と憎
しあわせの方へハンドル切る車
人間の答を探すまわり道
逢う度に成長の孫老いる僕
良し悪しの限界を知る躰糸

寝屋川市 籠島 恵子

一日を大切に作る寒椿
シンプルを目差して本を読んでいる
文明の利器で迷子になっている
武士道の本を息子が読んでいる
黒帯は黒帯らしく干してやる

寝屋川市 富山 ルイ子

厳寒に炎暑無理効かなくなった
一病が三、四になって生き難い
メヌエルかふらふら足元ふらふら
八十路すぎ力をつくすボランティア
新春に心ときめく喫茶店

寝屋川市 森田 麗

小豆雑煮と博多雑煮で五十年
自負してる博多雑煮を召しあがれ
ひとり言つい掌に溜めている
三ヶ日必死でボチのおもてなし
皆帰り飼主の顔やつと見る

寝屋川市 山本 三郎

成程と頷きながら辞書を見る
新聞の死亡記事の歳見つめ
朝夕の新聞配り子を育て
落ち葉踏み今日も元気に万歩計
隠し芸マジック披露する幹事

羽曳野市 安芸田 泰子

生きている証を交す年賀状
幸せが続くとやる気失せてくる
ぬいぐるみお供に連れて孫の旅
若い氣の足を段差に試される
何気ない言葉でついてくる急所

羽曳野市 宇都宮 ちづる

繁盛の笹は可愛い娘から買う
残り福笹にもらった町工場
手帖の空白三分の二が丁度良い
娘にはまだ使い勝手の良いわたし
足付かぬ自転車買って望む春

羽曳野市 徳山みつこ
わたくしも春見るメガネ買いました

蠟梅がひらいた亡母が香り立つ
流行は巡る捨てなかつたドレス
死に急がない断捨離はもつとあと
湧いてくる欲と大事に生きていく

羽曳野市 永田章司
喪に服し手持ち無沙汰なお正月
絶対の自信過信と紙一重

ねじれ無く右へ右へと動いてく
語り部が平和の辛を熱く説く
洗剤を小まめに変える妻の知恵

羽曳野市 三好専平
足裏にやさしい愛の落ち葉掃く
白樫ひいふうみいと禪の寺

キャンセルを待つて夢見る春の旅
宮廷の料理も鯖に勝てまへん
宇宙さえ歪んでいるのになぜ悩む

羽曳野市 吉村久仁雄
しまい湯にほんとの母が浸かつてる
弱点で美点で人にすぐ惚れる

故郷に下着を干したままの僕
病室でゆっくり過去と語り合う
読むつもりの本を増やしてまだ逝かぬ

東大阪市 笠井欣子
八十の春願い事多し
やんわりもしわのおかげか妻八十路

新年の抱負いつ迄続くやら
寝て食べて七草がゆも吾一人
夫逝つて手持ち無沙汰なおさかずき

東大阪市 北村賢子
生き甲斐へ駄馬も翼を生やす春
新調をまつて春へ第一歩

やんわりと世辞を言うてる眼が刺さる
もう七十路いやまだまだと紅をさす
一月のハイビスカスはおもてなし

東大阪市 佐々木満作
ポチ袋嬉しい顔をせぬ子供
新しい靴で一万歩の決意

物怖じはしない今時の新人
陽が昇る今日も感謝の経を読む
衣食住足りて人間欲深い

枚方市 安達忠央
スタートは呉越同舟入社式
初恋はこの図書館で隣り合い

七十七初恋の人まだ綺麗
旧友はその雰囲気ですぐ分かり
子の夢は未来の火星我が住まい

枚方市 海老池 洋

世界遺産のおせちで祝う初春の酒
特上にぎり食べていのちを喜ばす
煽ての風にやすやす乗らぬ風見鶏
左遷はチャンスそう割り切って元氣だす
応変に世の中渡る多面体

枚方市 小林 わこ

生みたての玉子に限る美味しさは
ケチャップライス ハート型したオムライス
弁当のだし巻きたまご外せない
トキの玉子ナンバーワンの注目度
祖父の風邪いつも薬は卵酒

枚方市 伊達 郁夫

夢食べてもっと遠くへ弾む毯
沈むだけ沈んで石になりました
シルバーの自慢話が咲くベンチ
明日を見る息子に脚立足してやる
外は雪男は巢から出て行かぬ

枚方市 丹後屋 肇

窓際の緊張感が懐かしい
頑張ればメリメリ軋む骨粗鬆
人間と異常気象がコラボする
科学力驕って天を畏れない
アンニユイ エンジンからなくてよい

枚方市 寺川 弘一

愛妻と同じ歩幅で同じ道
偏差値の範囲で居れば叩かれぬ
青い鳥お前真実青いのか
余生だと自分で思ったことがない
生きているからあの世のことを考える

枚方市 二宮 紫鳳

年末の疲れ忘れて福袋
ふるさとで羽繕いする三ヶ日
子や孫の笑顔が母のエネルギー
梅一輪ほのかに香る松の内
病む友へ賀状に一句エール添え

枚方市 二宮 山久

もうやめた酒は飲まぬと三ヶ日
初春を祝う庭木に番い鳥
昨年と同じ願いをしてみるか
同級会酔ったふりして君いくつ
散歩道氏神様と語り合う

藤井寺市 伊藤 アヤ子

温もりの余韻を残し孫帰る
予定表今年も生きるつもりです
彩りのいいおせちから減ってゆく
躡くとさっと手を出す友がいる
片付けてすっきりしたい私です

藤井寺市 太田 扶美代

逢う機会なくてプラトニックのまんま
出不精のわたしに生えてきた翼

帯を締めれば女の楽しさなど分る

孫が来る今日のわたしに羽根がある

新婚旅行で買ったこけしも五十歳

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

生きていて年を取るのは隠せない

バスの中人の頭は揺れるもの

よんどころなく言わされたフルネーム

春が来て春の噂に炎をつける

お土産に梅の蕾を見てもらう

藤井寺市 鈴木 いさお

ストレスが湯割り二杯に溶けてゆく

たそがれた母に聴かせるわらべ唄

喜怒もあり哀楽もありやがて喜寿

戦法は押しの一手と決めている

シャンソンが流れるユトリ口の街に

藤井寺市 津田 シルク

節料理亡夫の名書く祝箸

はねつかえりもこの日ばかりはお振袖

過ぎた日の若さが欲しい雪の山

奥深い趣味が浅瀬で難破する

娘の手見て苦労さなかと胸痛む

藤井寺市 俣野 登志子

衣食住遊びも忙し年の暮

小さな炎胸に命の果てるまで

せつがちですがあの世とやはゆつくりと

寝たら治る主治医眩暈にそっけない

夫と鏡わたしの地味にホッとする

藤井寺市 吉田 喜代子

馬の如く駆け続けてた遠い日々

物忘れ誤字空き字あり日記帳

待っている賀状が何故かまだ来ない

一人鍋美味しいですと負け惜しみ

タラップ一步肩から力抜けている

藤井寺市 若松 雅枝

ゆつくりと戴く母の晦日そば

孫曾孫揃い今年の初詣

何故だろう娘の孫がよくなくつく

簡単な夕餉で済ます父の留守

一人旅風と遊んで亡母を恋う

箕面市 酒井 紀華

森深くたましい宿る逢いに行く

急がねば森になるまで植樹する

さかずきが行ったり来たり本音出る

新しい帽子が恋をつれてくる

バラソルを回して君を待っている

箕面市 出口 セツ子

三連休親子バラバラ旅へ出る
温泉でゆったり心遊ばせる
月一は楽しんでゐる夫婦旅
子の負担ならぬために自立する
十三回忌父の言葉にある温み

箕面市 広島 巴子

三姉妹互いの皺を笑いあう
かしましに歳の制限無いらしい
花道を行くよに母が天国へ
雨戸閉めもしやと亡母を呼んでみる
気晴しへ友のジョークがありがたい

八尾市 内海 幸生

補聴器に元氣な頃の友の声
贅沢を言えば花にも好きな彩
無責任曾孫を怒る孫叱る
痛み止め効いて神とも仏とも
寒波にも耐えたごほうび桜咲く

八尾市 高杉 千歩

絆ゆるゆる結び目が見つからぬ
もういいかい返事が欲しい流れ星
あの人もこの人も逝き梅匂う
持ち札のたった一つに黄信号
生きている限り前頭葉を休ませず

八尾市 寺川 はじむ

多過ぎて洗えぬままの核のゴミ
葉漬けにされて長寿という平和
飽食へヒト科も弛む平和ボケ
いななきにアベノミクスが跳ねる夢
でか霜を踏んで午年初歩き

八尾市 宮崎 シマ子

この寒さ負けずに青い芽がちよつと
同級生から手紙が来たよ九十歳
正月の顔で座っている葉牡丹
ゴミ置場のカラスはとでもメタボです
逢う回数だんだん減った老姉妹

八尾市 村上 ミツ子

何はなくても母娘仲よく三が日
少し色あせても切れぬ赤い糸
短日をよけい短くする昼寝
習わなくても上手にできる欠伸
がんばらず急がず諦めない心

八尾市 山根 妙子

春明けてまず見る文のうれしくて
この年も生き長らえて春の盃
本棚の掃除ちよい読み坐りこむ
逆縁のがきもさびし年の暮れ
終活のノート時々書き加え

大阪府 桑田 ゆきの

年玉に格差があつて泣き笑い
列島にチョッカイ掛ける国の響
父と子の絆深める風の空
名苑の落葉の嵩が景となる
百度石平成の苔生えている

大阪府 野田 栄呼

あれ程の苦汁今では懐かしい
お日様と明日を約束する自信
欲と言う味方あるから生きられる
余所行きもないからおろそ普段着へ
愚痴も言い見栄も張つてる同期会

大阪府 初山 隆盛

初日影一天四海和み合う
賀状の数長寿のほどに侘しけり
元日のポストはどてら着たまんま
われ巳年次まで生きる十二年
青春の記憶が詰まる二眼レフ

神戸市 伊勢田 毅

夢持てば喜寿もまだまだ現役だ
さっぱりと昼は茶漬けの老い二人
成人式翔び立つ気配青リンゴ
みどり児が笑うと鬼も笑い出す
引退と決めて疲れがどつと出る

神戸市(木) 村 貴代子

飼えなくて毎年犬のカレンダー
差し上げた犬の写真を待つ賀状
返せない借金無視で気取つてる
似すぎだと他人が笑う兄おとうと
発表会少し気取つた孫をほめ

神戸市 白川 淑子

ひと月は冬眠出来る冷凍庫
彦ニヤンに会えず出発バスツアー
歌よりも檀蜜に沸く紅白戦
スクリーンから消えた煙草のけむり
妖怪にふとすれ違ふ日暮坂

神戸市 山崎 武彦

斎場のけむり真つ直ぐ寒に入る
おもてなし心に少しある打算
引き潮になつて去るひと残る人
いい笑顔じわつと滲むお人柄
愚夫愚妻とろりところける粥の味

明石市 梶谷 和郎

弱る灯を煽り続ける好奇心
独り言までも凍て付く氷点下
長生きへ添える生活費の試算
マネープラン長寿は無理と論される
小出しでもチューブを絞り切る余生

芦屋市 黒田 能子

尼崎市 軸丸 勝巳

子と孫に同じ絵本を読み聞かす
元気だよハガキひと言母は待つ
イクメンの出世するよりマイホーム
ささやきが洩れてしまったすきま風
吊り橋の真ん中へんでする決意

芦屋市 竹山 千賀子

母の祈りいつも周りの事ばかり
十人十色私はやはり白が好き
休日は本を枕に甲羅干し
お互いに必要だから居る二人
ベテランのタクト一つに酔いしれる

尼崎市 市坪 武臣

ありがとう最後にちゃんと言うつもり
遺産分け知らぬ枝葉が生えてくる
退屈へ勧誘電話聴いてやる
ばたばたと廊下を駆けた木の校舎
美しく咲いて散りたいこの余生

尼崎市 加川 靖鬼

サイレン消して来てくださいね救急車
いっそ黙っていて欲しかった取り違い
詠えの靴に合わせる足の裏
縁日で亡母をみつけた和服柄
ずけずけと言う友がいて惚けさせず

香りよい柚子抱きしめる冬至の湯
カーリング見てさてと立ち大掃除
カレンダーいいね毎年若返り
おめでとうマスク取る人取らぬ人
靖国の戦友辛い世の騒ぎ

尼崎市 春城 年代

びっくり箱に驚かぬのめかなしいな
昼下りの睡魔を許す十二月
得心のゆかぬ電車を乗りついで
出会っては困る人などいない町
記念日を話せる人はもういない

尼崎市 藤井 宏造

減速すると増えてきだした笑顔
夢ひとつ握りつぶせば済む話
幸せをしつかり掴むのに両手
呑み薬だんだん増えて減る寿命
愚痴ばかり聞かされかわいそうな耳

尼崎市 藤岡 りこ

結ばれた凶のみくじに朝日さす
年末年始孫の財布はずしりと
エアコンを消して子猫と日なたぼこ
ときどきは一人で居たい共白髪
期待したドラマの最後あつけない

尼崎市 山田耕治

もう忘れましてと逆のことを言う
灯を消せば月の光が射す机
父母にやさしくなったバイトの子
仏の日は水仙剪りましょう
雪だるま園児送ってから崩れ

加西市 金川宣子

物忘れ歩数をかせぐ万歩計
子の荷物ならぬと決めてホーム入り
笑み添えた孫に誘われオママゴト
アルバムの老母の青春笑み盛り
聞き耳を立てど聞こえぬ耳となり

川西市 山口不動

わかつてるわかつていない自分です
孫達の来襲去って寝正月
ヨメハんに秘密保護法効きません
親の歳さらに重ねて我が余生
儲けてもさらにさらにというヒト科

川西市 米原雪子

さあ行こか杖に声かけ散歩する
枯落葉カサカサ元氣踊ってる
休日の長い一日や々と暮れ
出不精に追い打ちかけるみぞれ降る
背番号名前覚えて観て楽し

三田市 石原歳子

去年より淋しさが増す子の帰京
元日に誰よりも先歳をとる
息子らの荷物にだけはなりません
嬉嬉として子たちが遊ぶ冬の田で
冬の田の好きな人の子鳥の子

三田市 上垣キヨミ

老姉妹感謝を語る母の墓
まあまあのお出来で渡ってきた世間
七彩の尾ひれふわふわ噂飛ぶ
やんわりと両手で受ける神の加護
仕来りのおせちの味を繋ぐ嫁

三田市 尾崎一子

息災が何より楽な貯金です
迷い子に神のところが届かない
輪の中で温いところのおすそわけ
横道も越えて大人になる一歩
ありがとう母が最後に書く手紙

三田市 久保田千代

笑てたらいつかいことあるさかい
子を悟すような形の雲を見る
みかん剥くひと指毎にある思案
臆病の証いつでも肩を張る
無言劇さらに疲れる差し向い

三田市 福田 好文

西宮市 足立 茂

負け組になるなと持たす塾かばん

賽銭は五円と決めて半世紀

迷つたら墓に参つて父に問う

こつそりとドアを開ける泌尿器科

妻だけが口臭指摘してくれた

三田市 堀 正和

一枚も名刺使わず秋終る

ほな行こか一人一個へ連れもつて

レジ袋めくれぬ指を愛おしむ

回り道待つていたのはうまい酒

一枚のハガキで届く春の夢

宝塚市 田中 章子

おあつらえむきの風ちようど吹いてきた

やじ馬という馬にでも乗りますか

楽しいな人生日々発見がある

結局は笑いのちから信じてる

根にもたぬ性格母に感謝する

西宮市 秋 元 てる

生きる為に巻かれた管よ媚びる日も(入院)

尊厳死望むが多分むりだろう

生きて来た時代のずれよすきま風

先の先読み過ぎ浮かぬ顔ばかり

蓄えの減り方早くなる寒さ

川柳も腕が上がらぬ五十肩

ニッポンの心伝える時代劇

OB会失敗談が盛り上げる

デカイ夢語る男にあるオーラ

ダメ男かくし芸だけ褒められる

西宮市 亀岡 哲子

春だもの気取りましようよ笑いましょ

ワンメーターでタクシー降りてウオーキング

五年日記年齢表も付いてくる

値引き札貼られてやつと買う和牛

娘の運転晴れて飲みますお正月

西宮市 牧 渕 富喜子

僧の経はつと聞いている年の暮

今年の字わたしは偽の字書いている

山津波価値観がらり変わり出す

靖国参拝とやかく言つて欲しくない

ほつとする日だまりに似た今日の位置

西宮市 山本 義子

お休みなさいゆつくり森は雪のなか

空と睦み森は子を産み慈しむ

碧い森生きたし生けるもの包む

天の恵みニンゲン森で蘇生する

木の精と無防備でする戯けごと

西宮市 吉井 葉々子

クマモンを囲んでみんな弛んでる
厄ひとつカウントダウン待たずくる
わたくしも身体も疲れているんだね
激震の記憶ぼつぼつ甦る

アンパンマンにあげるノーベル平和賞

姫路市 古川 奮水

成人へ春を奏でる琴の爪

ぐい呑みに男の愚痴を沈ませて

疑問符が解けて弾んだ登山靴

相槌の度に主張が枯れてゆく

松取れてまた読み直す年賀状

兵庫県 七反田 順子

本音だけちよつぱり出して事は済み

猫カフェ猫にいやされ小半時

健康のテンポ保ってくれる犬

誉めあつていれば安泰君とボク

羽二重餅食べてはっこり恵方だな

奈良市 阿部 紀子

庭の隅水仙咲いてはんわかと

玉三郎可憐妖艶藤娘

喧嘩する相棒がいてありがたい

療養の夫残して逝った友

近隣にニヨキニヨキ出来るケアハウス

奈良市 岩本 浩二

慰めは言わずにそつと肩を抱く
初夢はペガサスに乗り天翔ける
老い二人ピンコロ折る初詣で
妻の愚痴始まり馬の耳になる
耐えたけど優しくされてぐつとくる

奈良市 大久保 眞澄

肉もエビもおいしかったら許します

飛ぶ鳥を落とした人も要介護

いい人に囲まれ肩が凝ってくる

始めから終わりまでいるバイキング

二枚目の舌は総理に貸してある

奈良市 加門 萌子

声変りした子も欲しいお年玉

最小の孫の未来を見るめがね

野良猫が走る何にもしてやれぬ

年末と年始に知った旧友の計

一年の先は見えない共白髪

奈良市 辻内 げんえい

倍返し子の約束は空手形

知らぬ間に家事と留守番主夫してる

生返事に妻の怒りが飛んでくる

駅前の地価が景気のパロメータ

アンコール僕の予想と違う曲

奈良市 天正千梢

正月の歌を歌つてた頃が華
旅立の荷物いつでも揃つてゐる
傷らしい傷でもないが疼いてる
半分はコルセットに助けられ
寺の鐘秋の夕暮れ淋しくし

奈良市 米田恭昌

悲喜こもごもの山河を越えてきた米寿
人情にへなへなと脆いパパ
人間嫌いの異色作家の書くエロス
神様を味方につけたもみじの手
恙なしと書ける賀状が有り難い

生駒市 飛永ふりこ

おごつたらあかん積もつてくる濁り
とどのつまり諭吉で利けば易いこと
寒牡丹思いの丈が揺らめいて
つべこべを折半というキリトリ線
いななきが天へ新句会の扉

大和郡山市 坊農柳弘

蟻塚を覗けば春の音がする
もてなしの心が通うお水取り
まぼろしを一つ削つて逢いに行く
自惚れの恋は情熱抱いたまま
春は未だノンフィクションの名残り雪

奈良県 渡辺富子

ハッピーエンド願つて妻と寺めぐり
はね上がる株を横目に日向ぼこ
就活へ腕立て伏せをする息子
前かがみの男を叱る冬木立
腕まくりする間にチャンス逃げてゆく

和歌山市 岩本美智子

年女何周目かは言いません
もうちょっと跳ねたかったよじゃ馬は
じゃらじゃらのほうがいいのとおしだま
亡夫の木瓜実と花をつけ年を越す
川柳塔思いがけないお年玉

和歌山市 柏原夕胡

円形になってわたしを守り抜く
友となる鍋と一緒に食べたから
そうだよね夫も他人なんだよね
その辺に転がつていた恋拾う
仏壇を閉じる叱られそうだから

和歌山市 喜田准一

解決は二番煎じに出た答
ケースバイケースで生きてマイベース
揉め事はそこら辺りでティータイム
よく見ればうらの部分が浮いて来る
決断をすれば答が見えて来る

和歌山市 楠見章子

どの色も弾んでいますニュータウン
私の横サツと通ったカタカナ語
お煮染めを平らげ祖母を喜ばす
七草粥やんわり風邪が抜けていく
介護保険たつぷり払い元気です

和歌山市 坂部紀久子

ストープとお湯沸く音とベンの音
何時からの余生目覚し時計鳴る
腰の捻子ゆるんですぐに起きられぬ
昼の間と言う曖昧な約束で
天国行きの賀状のポストありますか

和歌山市 玉置当代

今年こそ遣ると意気込む馬の脚
駆け巡る馬のパワーをもらう初春
古里の面影提げてクラス会
ハネムーン辿りゆつくりフルムーン
巣立ちした後も記念樹実をつける

和歌山市 土屋起世子

姑の顔もふつくら豆煮える
御神籤が凶で歩幅を狭くする
健気にも冬を飾っているパンジー
冬帽子脱ぐとちらほら梅の花
気兼ねする人もいません宵寝する

和歌山市 福本英子

騙されていよう財布の口締めて
朝食べたことを忘れた母の昼
ストローでチクリと傷を突つかれる
お賽銭世界平和と孫のこと
もう競う人いなくなり野良猫と

和歌山市 古久保和子

木守柿君の望みは高すぎる
手の届かぬところへ転がるビンの蓋
深爪へあれこれ思いあたること
玄関の杖も帽子も主待つ
墨を磨る部屋いっぱい墨香る

和歌山市 堀富美子

ファミリィが今年も揃う初春の膳
チャレンジは私の歳を数えない
カラオケを遺影に披露蘇氣分
ボルテージ余生を語る三姉妹
終章へ酸いも甘いも噛み分ける

和歌山市 松尾和香

次の事手に持ちながら忘れてる
何もせず曾孫相手の年の暮れ
主の影踏まぬ人生初日の出
日々感謝暮しのリズム自然体
踏みしめる一歩わたしの自己主張

和歌山市 松原寿子

前向きな姿勢でまるくなる絆
趣味ひとつもつれた脳を解きほぐし
分岐点汐のうねりが背中押す
生れ変わって再起を果たすリサイクル
思い遣りに触れて心を満たされる

岩出市 藤原ほのか

リサイクルされると自分らしくなる
突然の電話に我を見失う
新品になれないけれど味がある
結び目を理解しあつて歩いてる
エンディングノート今年も書き換える

海南市 小谷小雪

街に出て未来に続く風を読む
あべのハルカス スカイツリーを意識
洗濯したてのエプロン張り切るよ
肩書きが粹にはめ込む定年後
どっちでも良いことながら迷いだす

海南市 堂上泰女

水雨へも次々と笑む野水仙
愛のキャッチボールの中ですこし
柚子の香で精気アップをしてる風呂
一月二日に笑顔の花が咲く
頂いた賀状に愛というエキス

紀の川市 宇野幹子

青春が満ちて弾ける齒の白さ
断捨離をして冬木立凜と立つ
木枯しが迎えてくれた無人駅
ヒョウ柄の魔女の背から静電気
着膨れた影と握手をして進む

紀の川市 北山絹子

旅に出る時は童女の顔となる
節くれの指にも自尊心がある
波の音だけは消せない母の海
冬の川雑魚の集まる場所がある
あの頃は時代の風に乗っていた

紀の川市 辻内次根

日が差した部屋は天動説である
絵手紙のひと捌きと好きな色
紙で手を切つて無言のままでいる
即席へいただきますと手を合わす
一月の莖が濡れている糞

田辺市 岡本昇

天翔ける馬にあやかり四股を踏む
苦しみをよき人生のスパイスに
鳥が種落した花も咲き誇る
廃校に日の丸揚げてクラス会
短打では一点取れぬ草野球

橋本市 石田隆彦

四季の移り五感で掴む散歩道
叶うまでねじり鉢巻ゆるめない
やんわりのことばで違反切符切る
身も凍る銃が狙っている世相
快腕を磨きマー君大リーグ

鳥取市 池澤大鯨

体力も気力もみな機械に頼っている
まだ意識少しはあるか握る手動く
気力があるか聞くのは酷かそうか
ステータスではないが杖が欲しい
先に逝くべきだったかも知れりよく

鳥取市 奥谷彩子

臆病に生きて閻魔の喝受ける
冬帽子ほっこり辛を温める
駄馬でよし卒業のない米を研ぐ
お馬の親子みたいに行かぬ人の親子
孫子居て老いの心に厚着する

鳥取市 加藤茶人

死ぬ事で家族に戻れ畳踏み
惚れ上手振られ上手の千鳥足
絶頂期塵も埃も敵に見え
頼りにはならぬが最後数合わせ
妻飛んで俺はオタクの定年後

鳥取市 岸本宏章

三歳で馬はすっかり金稼ぐ
宝くじ七億円は多すぎる
年金で重荷になった家の守り
テロ続くソチが世界の気を揉ます
甘い汁辺野古の海を悩ませる

鳥取市 岸本孝子

太陽が手抜きしている裏日本
日脚伸びたあいないことでもうれし
余り物お色直して膳に乗る
余るほど作った果ての肥満体
表札にはちきれそうな家族の名

鳥取市 鈴木一弘

負傷してつくづくわかる指の先
勲章も戦火くぐったセピア色
大切な約束かわしてにぎり鮎
靴磨き初の出勤ひとりだち
振りむけば空席目立つ指定席

鳥取市 竹口清信

何時か来るあしたの来なくなる今日が
来ぬ人を待つ身も慣れて苦にならぬ
なあんにも考えないで仕舞風呂
仕舞風呂愚痴も小言も皆流す
先々のことまで今は考えぬ

鳥取市 土橋 はるお

鳥取市 西川 和子

スイッチを入れたエンジンかららない

まつ葉蟹一辺食べて飽きたとは

同窓会名簿に男僕だけか

盆栽に孫が靴下干している

スイッチが見当たらず座り込む

鳥取市 中村 金祥

正月は過ぎたが何も変わらない

渡り鳥律儀に姿見せに来る

孫の書く日記何度も爺が出る

雨の日は何故か川柳まで湿る

捻つても妻を唸らす句が出来ぬ

鳥取市 永原 昌鼓

喪の葉書出して迎えた午の歳

生真面目に生きた証の兎小屋

終章へ今日もゆつくり歩み寄る

涙腺も箍も緩んだ八十路坂

ゆつくりと歩こう先はしれている

鳥取市 夏目 一粹

ときどきは啖呵を切つてすぐ消える

真つ白い歯をしてる女美しい

言つていいこと悪いこと考える

真つ赤な夕日に片恋おもいだす

辛いのは母の涙のほかになし

嬉しさも怒りも哀も句に納め

ひとつまみ足して自分の味にする

おいしいと言ってもらえるから作る

都合よく飼ひ馴らされて籠の鳥

悔しさも生きた証と書き記す

鳥取市 春木 圭一郎

いつだって自分は自分見失わぬ

さすがプロ見えぬ努力を惜しまない

楽な道選べば心弱くなる

厳しいが優しいそんな人目指す

辛い時主役となつて演じ切る

鳥取市 平尾 菜美

いきなりの断射利苦戦しいられる

断射利も突如欲へとさいなまれ

思い立つ断射利すでに深深と

降りかかる断射利試練のりこえる

シミュレーション断射利まずは自浄から

鳥取市 前田 楓花

この子には親に無い良いとこがある

投げられた言葉やんわり受けて立つ

宛名書き「様」を書いたら凜とする

縦横斜めどこから見ても丸い腰

美しく老いてゆくのは難しい

鳥取市 森山盛桜

一步とはこれだアシモの歩き方
ふにやふにやと明日へ急ぐ前のめり
まやかしを正すと声が嘎れる
絶妙の矢りといえる爪楊枝
引きずっているカラオケの低い点

鳥取市 山下凱柳

ほどほどに生きて人生古希迎え
山頂で幸せ祈る初日の出
また今年没句の山を作るのか
断捨離の裁き待ってる無駄遣い
川柳で眠ってる脳呼び覚ます

鳥取市 吉田孔美子

呼び方が炭ほど馴染めぬペレット
集金の名簿に残る赤印
飽きるほど着られた緋織モンペ
猫だつてダイエット食飽きている
問題児だった物故者欄名簿

鳥取市 吉田弘子

今年また沢山言おうありがとう
寺の前自然に帽子取っている
老いたと言う夫に安心する時も
健康に感謝絆の家族愛
諭吉さまゆつたりおわすポチ袋

鳥取市 両川無限

知らぬ間に仕事の鬼にされていた
愚かさに気付いた橋のど真ん中
いつまでの風か夫婦のもやい舟
農耕の馬だが夢も意地もある
カクテルの甘さに嘘が見抜けない

倉吉市 猪川由美子

手編みマフラー愛が重くて受け取れぬ
両陛下の慕構想に胸痛む
年賀状数減った分心込め
記憶にないなんて便利な言葉だね
朝刊マンガ脳活の足しなっている

倉吉市 牧野芳光

吐いて吸うだけでもかかる消費税
寂しさが混じった北の風が吹く
暖房があるから勤務先へ行く
諦めた時から恋が愛になる
楽をして金を儲けることばかり

倉吉市 山中康子

まっさらな両面欲しいから眠る
ちようつかいこわさぬようにねじをまく
気兼ねない一人で弾む老いの部屋
巻き戻しもう出来ぬこの世の定め
知らぬ振りしてても母の愛たわわ

米子市 後藤 美恵子

千鳥足アベノミクスに活気づく
御神籤を引く大吉を掴むまで
新成人自覚の重石つけて翔ぶ
受け皿から溢れる若いエネルギー
寒い庭バンジーにずっと笑いかけ

米子市 竹村 紀の治

風邪の夜独りを責める走馬灯
湯豆腐も鍋もいいねと雪が降る
簡単に笑顔にさせる飲む話
独りにも馴れて六度の除夜の鐘
おめでとう自分に聞かせ祝う屠蘇

米子市 中原 章子

生命力古い種から発芽した
沿道の拍手努力のご褒美に
存在を認められたと胸を張る
年賀状会いたい人の名前書く
じっと待つだけでは生きていきません

米子市 成田 雨奇

血圧測定妄想世界ふり払う
東京は憎らしいほど晴れ続き
はったりでいいから卑屈にはなるな
蕎麦を食うほか用のない大晦日
加齢です二日の昼は酒やめる

米子市 吉田 陽子

柳友が増えた賀状の嬉しさよ
街広し風上げる子見なくなり
孫がないくらいで悩むことはない
幾万語小鳥と話し孤独好き
検査値と真剣勝負して生きる

鳥取県 石谷 美恵子

童謡の花は未来へ咲き続け
もう少し混ぜたらオツな味になる
ベアルック婦唱夫随とすぐわかる
最高の喜び泣き顔しかできぬ
人間の底へけものの血も混じる

鳥取県 岩崎 和子

猫二匹三大家族和を保ち
新年が明けても部屋にシャツぶらり
紅白を久々三人明けるまで
八十九・八十六の誕生会
三日目に髪染めスカーフ巻くおしゃれ

鳥取県 西谷 悦子

たましいを磨くわたしの道を掃く
髪を解くきょう一日を問いながら
老木になっても花を咲かせよう
どの花もきれいに咲いてノーマイク
花はいい還ってゆける土がある

鳥取県 細田裕花

淋しさをハグしてくれる趣味ひとつ
ブライドが素知らぬ振り押し通す
未知の旅助走はパンフレットから
引き出しの奥に黙秘の理由など
寝る前は風呂で細胞ゆるめてる

鳥取県 松川行男

押し切られ暦を伏せた古い母
御祝儀が爆発しそう春の音
酒煙草やらないけれど句に食われ
地元名産食わずに送るおつきあい
馬は駄目猫の手が要る編集部

鳥取県 山下節子

うっかりですまされません締切日
花一輪折って地蔵に手向けます
顔浮かぶ名前さっぱり出てこない
マンシヨンのオーナーの顔見たことない
地下起こし老人会が現役だ

鳥取県 山本正光

定年の無い趣味抱いて年明ける
正月は飲んだ今度は花見どき
寒の入り春の出逢いが待ちどおし
カタカナと横文字多く乾く耳
賞状も資格も箱の底でねる

松江市 小川注湖

寿の書床を背に負う喜寿祝い
ダイエット正月無事に越えまして
喜怒哀楽地球は今日も抱いている
町の花植えて新道名所出来
町工場アベノミクスの機械音

松江市 錦織禮子

たてがみも凜々しあなたにアイラブユー
写真に添え書きはみ出しそうな年賀状
陽の当たる場所を歩いて初詣で
オリンピックまで大丈夫大丈夫
直線のゆずり合い行く雪の道

松江市 藤井寿代

偶然に見つけたポリープに感謝
うっかりと拾ったいのち温める
子の想い親の想いがすれちがう
子に持たすおにぎり母がしたように
担がれてたった一人のお立ち台

松江市 松本知恵子

新雪を踏みながら来る元気者
若者の新語なかなかおもしろい
三次会失敗談をきいている
被災地の希望アンパンマンの歌
励ましの声声両の手に余る

松江市 松本文子

カメ虫が多い厳冬のような
どうしようもないでも時々ブーイング
私の心にいつも流れる雪椿
のろろとまだ幸せを探す旅
おじいさんが病氣になつて荒れた土地

松江市 三島 淞丘

深酒のわたしを喰う冬の月
七十路の胸に五欲が絡みつく
錆びついた右脳ペンまで軋みだす
医の力いまは多病も息災に
川柳と酒を味方に老いを生く

出雲市 伊藤 玲子

元朝の空もご機嫌大社^{おやしう}
久しぶりね忘れないよう手をつなぐ
あと少しせめて笑いの種を播く
横顔を見ているうちに恋芽生え
先頭を譲り寿命がまた延びる

出雲市 岸 桂子

頑張つて行かねば山は登れない
以心伝心嫌いな人に嫌われる
一言を呑んで路傍の石になる
観光ムード俄かガイドの国訛り
言い訳をしては自分を甘やかす

出雲市 小白金 房子

参道の小石踏まれて光り出す
急須から新春がこぼれるいいはなし
打ちかえす羽子板新春の陽と遊ぶ
祥月は家族墓参の花手桶
こも巻から松迎春の風を抱く

島根県 多久和 敬子

なにげないあの一言に涙する
五十年探し求めた匙加減
肩書きがやっぱり邪魔をして困る
鈍行で安らぎ求めふる里へ
初詣で神に寿命を問うてみる

広島市 岸本 清

山あいに寒バエ漁の網の音
常識があれば個性も生きてくる
貧富の差あれど変わらぬ寿命の差
老友の約半数はマイペース
たつた今合点したがもう忘れ

竹原市 石原 淑子

こころなし私の雛さま前屈み
ありがとう気にはいらぬが掃除ロポ
大ジャンプ十七歳の夢が翔ぶ
六歳に劳られてる足と腰
こんなはずは大縄跳びに入れない

竹原市 岩本笑子

野菜との対話休みは無いのです
スポーツは見るものコタツ動かない
鉤編みの帽子が待っている里よ
ふとん干すアメリカからの里帰り
十五歳我が家の猫は昼寝中

府中市 藤岡ヒデコ

ゴメンナサイわたし只今上の空
幸先の良い話など探そうか
どうかどうか病む姉の身を神頼み
誤字脱字笑い話ですませたい
ご破算に出来ない過去が夢に出る

東かがわ市 川崎ひかり

目標は今この時を輝かす
痛みから解放された骨拾う
秒針と同じ早さで減る余命
温泉へ行く日は家事を手抜きする
黄色からパワーをもらうゴツホの絵

松山市 古手川光

枯れ野見るふと人生を重ね見る
桂文枝はいいなずっけては稼ぐ
お千代さん歌い尽したプロの意地
三面記事こんな筈ではない日本
断捨離もいいが勿体無いも忘れまい

松山市 宮尾みのり

歳なりに老けて同窓会楽し
まだ未練類なぶるよう風が吹く
絵はがきで済ます本音は吐露しない
ケータイがやつとヘスマホタブレット
ナンバー2波瀾の虫も飼っている

西予市 黒田茂代

今年最後の十五夜雨にたたられる
声だけを毎日聞かすジョウビタキ
キャンドルが棚田の形に揺れている
雪のマントでトドマツの冬ごもり
濃霧注意報わたくしの記憶力

高知市 小川てるみ

渡り鳥群れて水面に花が咲く
金婚の節目絆が深くなる
追い風が止んで実力試される
シンブルに生きよう物がありすぎる
正月を避けた帰省もいいものだ

高知県 小澤幸泉

春風にのせてもらえぬ受験の子
人間をふたつに分けた赤と黒
土佐弁で語れぬ父の胸の内
神に叛きソドムの街がまたひとつ
白い風父よ息子よどこへ行く

唐津市 坂本蜂朗

ボス猿がかねて覚悟の旅に出る
背伸びした脚腰さする喜寿の会
突っ込んだ首が抜けずにまだ仲間
面白い人と言いつつ距離をおく
欠点がなくて似顔が描きにくい

唐津市 山口高明

篝火に修羅まう舞台嬪面
札東でジュゴンの海を埋め立てる
口笛を吹く少年の背が孤独
どの表示見ても疑念の雲がわく
踏み出した一步が明日の灯を点す

熊本県 岩切康子

天才の絵筆たつぷり浸る展
リホームの鞆見せたら笑われた
元彼の遺作展見て惚ぶもの
書き初めは賀状書きねと夫が言う
初詣で共に喜寿なり記念塔

札幌市 小沢淳

お品書きのれん矜持のそば屋さん
葉は幹を幹は根っ子を頼ってる
人間の品格問えばしれたこと
成熟のあとは萎んでいく定め
ふる郷を原風景の中に置く

札幌市 三浦強一

元朝の第一声もどっこいしょ
本音ぶっちゃける無記名アンケート
よく喋る女史だ肉食系だろう
明日はわが身か八百万の認知症
パソコンの反乱孫へヘルプミー

黒石市 相馬一花

この胸は私のフェロモン製造器
眼科医は嵌めてくれないコンタクト
買い主の方がポチより地味な服
色即是空笑みを浮かべる石仏
飲み屋からタクシーで行く着払い

弘前市 浅田隆樹

師走くらい静かに過せないものか
金箔が盃にある大晦日
新年の雪は新年らしい白
食べ物を落して泣いたことがある
孫置いて妻と娘が外出す

弘前市 稲見則彦

春便り五寒二温の中にある
生姜味噌おでん熱燗離せない
廃校を余儀無くされて昇る煙
里山の暮しが変わる廃校後
春一番福寿草とのご対面

弘前市 今 愁 女

ルノアールいよいよ外す古曆
床の軸仕舞い春待つ雪最中
七草をセツトで買つて便利さよ
フクシマを迂回してきた渡り鳥
いつの日か神の使いの寿命札

弘前市 岡 本 花 匠

拘りの命みつめて今日を生き
昭和一粒夢叶いダイヤ婚
埒もないラッパ吹いてる炬燵の輪
ヒヨの来て絆呼ぶ声疳高い
見直され日本茶売れる外国地

弘前市 高 橋 洋 子

終の駅ひとつ近づく年始め
人伝の訃報に迷う賀状書き
錆びていく脳へ発破をかける趣味
足の裏押して五体を元気づけ
おいしくて困ると孫の褒め上手

弘前市 福 士 慕 情

紀州からミカンが届く好い日和
挨拶は不要とビール栓を抜く
自分史の苦勞話につく尾鰭
何時までも若い亡父の夢まくら
土に還る方程式がまだ解けぬ

青森県 松 山 芳 生

子等の夢乗せて乳母車が軋む
欲望を次々消していくバズル
高望みは絶対しない蟻である
頂上の風を信じてから迷う
賞味期限すぎて食欲湧いてくる

水煙草

(つづき)

弘前市 高 森 一 吞

事も無げ心静かに送り人
映りゆく時のながれに帯をとく
繰あげの合図で櫂ああ無情
四コマのマンガしばらくして笑い

塩竈市 木 田 比呂朗

ジョギングの頬にそーと春の風
七十路のバーの高さが惑いだす
自惚れと過大評価が手を握る
誕生日だとしてもカウントダウン

(前月分) 神戸市 山 根 弘 子

化粧して鏡に若さ問うている
ライバルが鏡の中にまた写る
じわじわとあの一言が身を攻める
沙羅ちゃんが金を目指して飛ぶジャンプ

自選集

小島蘭幸

書き初めの色紙一枚 あたたかし
花マルが嬉しい歳になって来た
花マルは孫からもうものなるか
ななつ星孫のプレゼントを待つか
耐美し美し江戸切子の朱よ

斉藤 岳

受け皿をいくつも持っている方だ
ドレミの音符駆けのぼるエレベーター
子と夢を語り合ってる蜜りんご
雪国のハウス苺は話好き
絵手紙にすすく育つ子のお花

新家 完司

半年も経って届いた恩師の計
眼力が失せてきたのも酒のせい
カラオケの師匠カラスの勘太郎
どっこいしょやっとなの世が見える丘
ケンケンパ明日はすぐに過去になる

恒松 町紅

リハビリに老いの文芸離されぬ
腰曲げていても晩酌忘れない
外は雪老いの手仕事考える
節くれた手に盃はまだ元氣
よたよたの姿が句には出て来ない

津守 柳伸

初旅は想定外のハプニング
バイキング七種粥のおもてなし
2連泊する表札にSの文字
メントイコ好きとのたまう紅い口
大マグロいつまで凍る戎さん

遠山 可住

老いひとり留守電にして冬の風呂
砂時計の刻みにゆれる女坂
北国は雪ビルから熱燗に
毎日が勝負惚けまい転ぶまい
気に入った派手で出歩く癖がつき

都倉求芽

味方にも敵にも同じ年賀状

あとになってみれば不思議でない不思議

銀杏の殻剥く爪がよく喋る

注射針いくつになっても痛いもの

背に腹を代えてコンビ二のにぎりめし

土橋螢

丸描いて四角を書いて介護され

年金を貰い徘徊癖がつき

美しくあり虚しくあり二月去る

長生きの薬玉露を飲んでいる

小説の女と恋に落ちてゆく

西出楓楽

酒とバラの日々は一度もないままに

堪忍袋ときどき洗ひ陽に当てる

二千円札どこにどうしているのやら

七十五夢の在庫はあと少し

擦過傷日にち薬がまだ効かぬ

仁部四郎

例により記者会見後の真意

カタカナ語で述べた真意が横道へ

顔色で真意が判ることもある

質問に耐えて真意は認められ

社会的地位に真意は鍛えられ

波多野五楽庵

人知れず咲く野の花で地図にない

美しい錯覚でした紙の花

ライバルを蹴落す靴はほろほろに

一枚のシヨールで残り火を庇う

ひっそりと逢うて花酔い花疲れ

林瑞枝

山の幸摘んでストレス吹っ飛ばす

綺羅星と並んだなかで深呼吸吸

白壁のくずれを映すひと雫

よんどころなく風に絮毛の旅つづく

春愁や椅子あたたためて順を待つ

前たもつ

新成人へアベノミクスの仁王立ち

余生のんびり貧乏揺り止まり出す

辛口の助言は後で効いてくる

うつ伏せ寝三つ枕を抱え込み

一言の制御できない舌を持ち

政岡未延子

身の丈に合ったファイトでいいとする

床柱拭仕事だけしてもらう

継ぎ足したことは喋らぬ床柱

月の夜はファイトを鎮め月という

男むすび とうとう出来ぬ或る日です

三宅保州

外交が騒がしい変口長調

大騒ぎすることですかおもてなし

毎度お騒がせニュースと猿の群れ

活気ある村だ たいま選挙中

星の中でいちばん騒がしい地球

宮西弥生

それからの作りばなしに誰か泣く

奈良町に春を呼び込む薪能

小吉のみくじに明日のひびく音

生きてなお人の蔭にもある温さ

美しい言葉を汚す棘数多

自動ドア

八木千代

鍵開けるいつもは開けぬ戸もひらく

朝の窓 わたくし事は考えぬ

雲ばかり ワタシ招かれてるみたい

自動ドア 未知の世界を見るのかも

パン焼けばすぐにいつもに戻るなり

八十田洞庵

毎日のドラマは朝のラッシュユから

シナリオへ湖一つ入れている

屑籠に昨日の仮面捨ててある

森に来てふる里捨てたことと思う

好きだった冬山登る髭男

両川洋々

温暖化防ぐ方程式がない

カーナビも孫もすねると手に負えぬ

活きのいい鯛を捌いた手で祈り

東電の毒はマリファナより恐い

助け舟来ぬと己に言い聞かす

板尾岳人

今世紀中に死ねたらいいのだが

黄泉へ逝くとき持つていく乳房

キリストに妻を預けて雛祭

立春へ寒がりがだった父の骨

ひな段に東条英機と戎軒と

奥田みつ子

振り返る余裕残して明日を向く

ロマン追う男の眉の清々し

やんわりの友の言葉が胸を刺す

初心にかえれ春風が頬撫でる

八十年生きてこの世も悪くない

河井庸佑

仲直りの機会互いに模索する

逆境にも怯まぬ度量見込まれる

解説を聞き鑑賞の抽象画

子に目線合わせじっくり説き諭す

難題を持ち掛け打開策探る

川 上 大 輪

鉛筆を削ると春が目覚ます
錠剤のその先にあるシャングリラ
大丈夫まだ私にも影はある
眠らんだ蕾そろそろ反抗期
ずるい人無かった事にするなんて

小 西 雄 々

私には何時も笑顔で神がくる
家系図は別にないけど七代目
燃えるような手で愛情をこねている
出し昆布のようには何時も知恵は出ぬ
遠花火あれは大売出し合図



青谷小学校 川柳クラブ

「友だち」



友だちは何があっても友だちだ
泣きあった友との別れ花も舞う
競い合う戦う友が必要だ
友心 近くにいるがわからない
友だちとけんかするけど仲直り
友だちに伝えるときはしゃべろうね
わたしたちだけが知ってるナイショだよ

(六年 相見 秀仁)
(六年 黄金 咲希)
(五年 田中 そら)
(五年 長谷川奈緒)
(五年 村上 舞)
(五年 谷尻つかさ)
(四年 吉村 茉佑)

温故知新

『谷垣史好句集』より

飛行船に乗る夢だけは捨てまいぞ
昼の月誰か尾行したくなる
口笛を吹いて人生拗ねている
小さな乳房好もし秋のひと
素うどんとめしでニヒルな昼にする
春になると文房具屋になりたくて
田吾作も与太郎さえも嫁がいる
兄弟の無口がつづく花曇り
抱かれて猫のしっぽは醒めている
爪をとぐ女の敵は女なの
牛丼の肉もおいらも落ちこぼれ
男ひとりちりめんじゃこで飯を食う
雀まんまる厳冬に耐えている
八十の母と五十の子の暮らし
沈丁花恋うてはならぬ人を恋い
人妻の恋は視線が定まらぬ
哲学書あの頃いつも空きつ腹
お人好し四季折々の風邪を引き

川柳塔の

川柳讃歌 ⑩

木津川 計

ぶらぶらとぶらぶらが会う元気がい

小 沢 淳

七十代は年毎に歳をとることが僕も体験でわかった。すると八十代は月毎に老化した九十代は日一日衰弱するということも。

ぶらぶらとぶらぶらはぶらぶら歩きできるだけまだ元気だ。元気な内は淳さん、再三会うのがいい。数年ぶりの出会いとなると怖い。格段に老い、萎んでいる。過日、十年ぶりの麗人に会い、息を呑んだ。「生きていく悲しみいよ深からんみえうるわしく生まれしひとは」の嘆きを察した。美貌は残酷である。

衰えた脚に老後を責められる

高 野 宵 草

責められるのは僕でもある。今年からスツッキを突き始めた。四年前の軽い脳梗塞がフラつきを後遺症とした。加えての加齢である。「あんさんの上半身はよろしおすが、下半身があきまへんなあ」と下世話なものの言い

をする女人に参ったが、さる日、講演の壇上からステッキを支えに降りていると妙齢の、奥様が「お手をどうぞ」。そら僕の言うセリフですが、とついに言えなくなつた無念を宵草さんはわかつてくださる筈だ。

一つづつ諦め生きるこれも老い

西 村 益 子

人間はみんな生きるさすがのストックを一杯持つている。体力、知力、財産、学歴、家族、友人、経験、肩書、技術、趣味……。老いはいこうしたストックをなくし、離れたたり、別れたり、しだいに軽量になつていくことだ。僕も相当量を失い、処分もし、諦めもした。

だが、二つだけ後生大事なものがある。星を見つめること、朝起きて机に向かう習慣は諦めない。さて益子さんは何を残されるか。

欲のない言葉は柔らかに響く

伏 見 雅 明

まことに「巧言令色すくなし仁」で、欲のある言葉はいかにつくろおうと耳障りだ。

比叡山の学僧・源真の『往生要集』を必要もあつて読み直した。地獄・極楽論の白眉だ。天台宗は白寿で逝かれた山田恵諦座主など今も偉い僧を生み出す。座主最後の弟子・森田源真師から臨終の様子を聞いた。「ああ、沢山の仏様がお迎えにいらつしやつた」。無欲

な高僧の最後の「柔らかに響く」声だった。時に二時五三分。実に二五三世だった。

コスモスが揺れる女の子が走る

坂 部 紀久子

富士に月見草が似合うように女の子にはコスモスが。「コスモスの原っぱいつもの女の子が」と酒井真由さんも。そんな女の子をテレビカメラが捉える。彼女は花びらをちぎる、「六つ、五つ、四つ」と数えると重い男の声に変わり、彼女の顔がアップになる。「三、二、一、ゼロ」。画面一杯に広がった彼女の瞳孔に水爆のキノコ雲が。「相手候補が通ると人類は絶滅です。あなたの一票をジョンソンへ」。一九六四年、米の大統領選。劣勢のジョンソンが圧勝した歴史的CMだった。

わたくしの中の1万本のネジ

高 瀬 霜 石

霜石さんのタフさは一萬本のネジ故であつた。僕は恥ずかしい。百本にも足りない。

いつかの桂米朝さんのマクラだった。用事を百足に言いつけ、「早行つてこい」がなかなか戻らん。様子を見に表へ出ようと玄関へ行くときまだ百足がいる。「何をしてるんや」「すんまへん、草履履いてまんねん」。さて、霜石さん、ネジ1万本、大仕事ですねえ。

〔上方芸能〕誌発行人

新川柳鑑賞

(25)

麻生 路郎

孫抱いて足は夕月出た方へ

(古 方)

孫は子よりも可愛いそうである。それは子どもがおもちゃを愛する感情に通じるものがあるように思える。おもちゃは飽きたらボイと投げ出されてかえりみられない。赤ン坊を抱いたおじいさんも「オイ、おしっこをしたよ」と云うて嫁の手へ渡してしまふ。

この句おじいさんらしい愛情も出ているし、詩情も豊かである。

春眠の顔へ赤ン坊這い上り

(旭 童)

春眠の顔という表現は非常に面白いと思う。戸外は既にあかあかと太陽が輝いているのに、まだ眼が醒めないのである。その顔へ赤ン坊が這い上るさまを詠んだのに過ぎないのであるが、いかにも光景が躍動してはおえない句である。

少年のやくざ口調にとどきりし

(牧 人)

すべての少年が、そう言う訳ではないが、近ごろの少年の中には、やくざ口調の者がかなりいるようだ。作者はそれに胸を衝かれたのである。

こんな風潮を産んだ直接の原因は映画の影響であることは云うまでもないが、少年の前途に希望が持てず、利那主義や悪い意味の自由主義を育てて来た政治の罪だと云えるであろう。

女の子手毬を足でつく時代

(藤 波)

街路で女の子等が手毬をついているのを、よく見かけるが、従来は手でついていたのが、近ごろでは足でついている。ジャンケンなども足でやっている。時代の変遷だと云ってしまえば、それまでであるが、変れば変わるものだとは作者の観察である。こんな句から見ても、川柳が風俗詩だと云われる一面があるように思われる。

俺と寝たことにしとけと帰らさず

(千里)

遊里華やかなりし頃には、この句に詠まれたような場面はザラにあった。「今から去んだところで、寝るだけじゃないか」と、巧みに誘惑されると、「じゃあ泊っていいから」

と立ちかけた腰をおろすのである。

妻の待ち呆けを思わないのではないが、

こんな時の悪友の言葉を一蹴し得ないのが、男としての弱さである。

この句 柳樽を思わすうまみを持つっている。

オイと云う友に工学博士あり

(いわを)

親しい友だちと云うものは、お互いの環境がどんなに違つて来ても、オイと呼べるところにいいところがある。

この句はオイと呼べる友達に工学博士があることを、ほこりとしていることを詠んだものである。環境が違つたり、地位に隔たりが出来たためにそんな人は知らないと言ふ出世主義の男もいるがそう云う人間は友情とはどんなものであるかを知らないものである。この句はオイと云うが畏敬していることを感じさせるところに妙味がある。

妙齡が隣へ坐る程に老け

(どんたく)

電車の中でもいいし、座敷の中であつてもいい。自分はそれほど老いこんでいるとは思つていないのに、妙齡の婦人が平気で隣へ座つたので、心がときめくと言ふよりも、老人扱いされていることをハッキリ示されたような気がして一種のさみしさを感じたのである。

老人の心境をズバリと詠んだ穿ちの句。



川 上 大 輪 選

横浜市 川 島 良 子

神さまも笑い止まらぬ初詣で
流暢にまとめて響くものがない
自由と孤独君が遺してくれたもの
サーブ権移してからの下り坂
優しさは同情ですか否ですか
ブレないで生きるわたしの自尊心

瀬戸内市 東 横 ますみ

暖かい言葉でうめる処方箋
一回転すると非常口が見える
手の届く場所ので鱗を光らせる
好き好きと言われた頃が花でした
来る春へ夢育んでいるサクラ
捨てるもの捨ててふわりと風に乗る

岡山市 藤 成 操 江

七草は過ぎた背骨を立て直す
老眼鏡まだまだ夢を見るつもり
ありのまま伝える雨になろうとも

傾いた柱の杖として生きる

ハツとして猫背を直すウインドウ
四Bを買い足し指に喝いれる

三田市 上 田 ひとみ

これでいいそういう私なんだから
嘘ひとつうまくつけても淋しいよ
いつまでも流されているつもりかい
見極めるあなたの愛の重さなど
立ち止まる勇気はめてはくれないか
しばらくは忘れないでねこの私

岡山市 永 見 心 咲

昔日の実は紅いままラミネート
水天一碧赤いインクをしたたらす
鉛灰色わたしの海はまだ明けぬ
「命」自由尻尾を切ったトカゲです
化粧塩過ぎて素顔の味が
色メガネとれば人情家とわかる

貝塚市 吉道 あかね

頼らない寄り掛からない第二章

バスポート六十路の毬がよく弾む

そこそこのことは叶うという神籤

感謝する心でいれば吉となり

甘えと風はするりと裏返る

本年もよろしくと言う夫婦箸

山口市 中前 幸子

日傘くるくる季節はずれの夢を見る

満月へ自分の影を置き忘れ

受け売りの正論を吐くカリカチュア

オブジェの街で変身するわたし

テトラポッドの影が虚勢を張っている

天井桟敷で叶わぬ夢を持ち続け

佐賀県 真島 久美子

炭酸はすっかり抜けました背中

どこへ出す私でしょうかアイライン

インク切れですか心が読めません

何人の私ができるヨーグルト

謙遜の集大成という自慢

泣くことを期待しているような空

竹原市 土井 輝恵

母と娘にあったボタンの掛け違い

卵割る産む苦しみをふと思う

終章はきつとプラマイゼロになる

鈍感になった分だけ人赦す

妻句会留守に包丁研いでいる

ピーポーで行った日のまま日めくりは

竹原市 國實 力

日課には背伸びひとつをいれてある

行ったネエ良かったネエと大晦日

長生きを昨日よろこび今日は悔い

日向ぼこまだ竹槍がでて困る

ふる里は徒歩で一周できる島

葬儀屋のポイント制はムリだろう

富田林市 中村 恵

立ち話 気楽に時間停めたまま

母ひとり父にもなつて腕まくり

突き詰めて答の出ないことばかり

仕来りを上手に泳ぐ妻がいる

約束が日に日に軽くなっていく

躓いて秋の深さに落ちていく

鳥取市 谷口 回春子

嘘泣きに財布の紐が弛められ

顔の皺孫が来るたび増えてゆき

さりげない言葉がハート鷲掴み

飲むほどに苦くなつてく甘い汁

失恋にさっぱりしたと見栄を張り

金と欲心の中でタッグ組む

佐渡市 高野 不二

年金の身に銀行のアンケート
肩書きの今日は名刺を入れかえる
鏡では笑顔の方が馬鹿に見える
妻も子も呑むから酒がうまくなる
三途の川迄の税金また上る

豊橋市 藤田 千休

クレームの嵐に耐えている受話器
かりそめの景気に踊りだす論吉
カミさんの気圧配置を読み違う
健脚がつい唆すまわり道
触られて悦ぶキウイ怒る桃

愛知県 樺 嶺 志

強い痛思い上がりを教えられ
写真見てまさかの思い癌転移
厳しさの予感が過ぎる医師の顔
優し医者写真の傷もあり得ると
まだまだよ励ます友が先に逝き

大阪市 浅井 公平

下手でいい仲間に感謝例句会
女装者の隣に座る勇氣なし
ゲーム負け孫悔しがりアンコール
寝不足で眠いが寝れない年の性
羽生の金癒しと元氣東北に

大阪市 大治 重信

何見ても偽装でないかと首傾げ
もういくつ寝ると開くや福寿草
ほろくそに言わはるけれど好きやねん
ない袖は振れまっかいなコップ酒
生きててと願いて喪服持つて行き

大阪市 柴本 ばつは

薄利多売それが受けてる縄のれん
板さんもネクタイ締めて寿司にぎる
あいまいなお味エンジン止まりそう
オクサマキレイなんてオウムがおっしゃった
ええ仕事する人でした今日の通夜

大阪市 高杉 力

塾ピアノ鬼が残った鬼ごっこ
応接の熊と一緒に家人待つ
ご主人を初めて知った投票日
奥様の話題ランチの美味しい店
題を見てそして絵を観る抽象画

大阪市 寺本 実

楽にして無理を言われて歯を抜かれ
あせるほど薄くかすれる針の穴
クリスマス異国の神に祈る夜
いさかいもねたみも忘れ月を見る
やかましい言ってみたいわ過疎の村

堺市 近藤 治子

高槻市 原 洋志

貧しさが家族の絆を温める
鬼が住む心の底へ陽を当てる
にらまれてほほ笑み返すへそ曲がり
長く生き鬼も仏も会いました
好きな事鬼になってもやり通す

堺市 高田 智子

銀杏の葉散る潔さ鮮やかさ
人波に温められている聖夜
捨てられぬものに囲まれ大晦日
旅先のテレビに消える非日常
冬日落つただ振り返ることもなく

堺市 羽田野 洋介

うつとりと出来る時間を大切に
カラオケも調子外れが人気者
足元に火がつくまでは動かない
心配ないなんて言うなよ簡単に
歳重ねがまん重ねて実を結ぶ

河内長野市 大島 友子

向かう敵無しと踏んだがこてんぱん
おいお茶叫ぶ夫を煙に巻く
エンディングノート仕上げて風邪を引く
愛嬌を売りに人生丸儲け
顔パスがまかり通った頃もある

じゃんけんに負けてばかりで寒くなる
石段を春一番が登ってる
末席が性に合ってる生欠伸
飲まなけりややつてられない人と添い
ゴミ袋下げて退屈捨てに行く

豊中市 荒木 郁子

穏やかな性格誰に似たのやら
春風が閉ざした心ノックする
カーテンで心の窓も模様替え
公園に春がひしめくブランター
お互いに歯痒く思うことが増え

羽曳野市 藤原 大子

雑草は根っこに強い意地を持つ
した覚えのないに済んでいる不思議
リセットをしても私は元のまま
人も字も跳ねる跳ねないその差だけ
頑になつてきたなと仰ぐ月

箕面市 寺井 柳童

顔見世の墨あざやかに京の暮
冬休み束の間孫は来て帰る
照れくさいハグはおあずけハイタッチ
お手伝い嫌ってた娘が看護師に
被災地に明るさ戻る大漁旗

大阪府 神野 千恵子

川西市 大坪 一徳

カレンダーだけはともかく年が明け

お賽銭一番似合う五円玉

相方の色で本日恙無し

喧嘩したあとは鏡を避けている

上と下いて真ん中が遅しい

神戸市 木村 忠義

篠山市 藤井 美智子

僕のしたどじが我が家の初笑い

よいことをかんがえきもちよくいきる

仲のいい夫婦でも喧嘩はします

言葉数減らそう墓穴掘らぬよう

最善を尽くせば悔いのないその日

神戸市 玄 番美恵子

三田市 足立 つな子

ところと夢織っている老夫婦

情報がいきなり世界惑わせる

突然に備えて写真撮って置く

軽はずみ言った言葉に荷が重い

軽い日と重い日のあるベン先の

神戸市 松井 文香

三田市 木村 マユミ

何気なく暮せる日々にあるがとう

忠告は菩薩の声と受け止める

暖かなメールが病魔追い払う

とんどの火燃やして良いか許可をとる

三代で作るおせちは味を継ぐ

二人故こここまで来れた九合目

夫婦茶碗欠けないように気を配る

年賀状届かぬ友にメールする

家族葬ばかり礼服出番減る

勝手読み碁も人生も同じこと

人情味厚い句会の輪の中に

前向きの心に霧はかからない

母親の笑顔が栄養子は育つ

年金へちと無理ですね衣食住

断捨離が過ぎて後悔戻せない

酒なしで会話が弾む女の輪

年越しの準備万端金が必要

まあまあで心配かけずよしとする

旬の物並べて感謝おさんどん

日記書き今日の自分を残すため

時時は夫婦げんかも風通し

わが夫定年すぎて花ひらく

約束を今もはたせず苦笑い

一〇五さい眠りの森の美女のよう

意地はらず肩を並べて弥次喜多で

三田市 多田 雅尚

手の皴で苦勞したかは直ぐ分かる

一円も4月が来たら主役の座

見なくても受信料だけ払わされ

背丈だけ親を越えても臍かじり

安倍政權我が家の支持はゼロのまま

三田市 辻 開子

何事も中途半端な自分責め

新年が笑って過ごせ若返り

三が日過ぎてゆっくり老いの食

七草を忘れいつものパンを焼く

今してる介護がいつかされる身に

三田市 野口 晶子

懐メロに重ねた夢の影を見る

人徳があつても嫁が来ぬ息子

遺言の豪華な葬儀誰も来ず

僕だってエビスを飲めばセレブ風

税金を盾に肉質おとす妻

宝塚市 丸山 孔一

お静かにあとひと押しで句が出来る

言いそびれ言葉ちらつく帰り道

空の青吸って消したい胸の雲

生きねばと思えるうちは死が怖い

焦らずに歩幅五センチ狭くする

西宮市 福島 弘子

脳細胞満場一致で良しと言う

喪中葉書なくて安堵の除夜の鐘

久し振り百人一首の美女に会う

古希過ぎてまだまだまごの人の森

これからは三猿になる事に決め

和歌山市 磯部 義雄

焼き芋にアドレナリンを出す娘

傘寿でも裸眼で通す針の糸

褒め過ぎた料理一週間続く

青春の傷引き摺ってやつと喜寿

石頭に特効薬はないのです

和歌山市 さかた きく

造花でも水を入れたくなる花瓶

あのころから大黒柱私です

のみ込みの悪い人だが良くもてる

売り言葉陳列棚に置いている

はしご酒はしごはずれて午前様

紀の川市 楠原 富香

失敗を重ねて見えた打開策

降り立った駅に覚悟が待っている

夫婦箸あらい我が家の灯を守る

晩学の辞書からヒントこぼれ出す

不器用に生きた男の影法師

田辺市 小川 イセ

倉吉市 岡崎 美知江

逆風を素直に受けて登る坂

頑張ろうガッツポーズが出来るまで

六十年敷いて敷かれていい夫婦

いつの日も私のそばに父の辞書

老いにねじ巻いて望みは捨てられぬ

和歌山県 森下 よりこ

お正月旅番組を見てくらす

肩の荷がおりて一人の寝正月

自分のためだけに働く家事その他

恐れずに向き合う老いの道遙か

妹に兄ちゃん初のお年玉

鳥取市 近藤 秋星

正月は例の如しで寝正月

生きている限り何とかなるだろう

川柳は俺の恋人女房だ

わが運は天に任せて髭を剃り

ポーナスの「ポ」の字も出ない社に勤め

鳥取市 高原 かおる

温度差を確かめあっている夫婦

七十路恋の微熱を知りました

腹で飼うぜいたく虫が金を食う

偉大な父の足跡を追ってゆく

ありがとう一言添えて丸くなり

地に落ちて人の情けを知った羽
パチンコで伸ばした羽がむしられる
愚痴言わぬ母が黙って泣いている
うつむいたままでは善意とどかない
特上の肉を横目に胃がさわぐ

倉吉市 田中 紀美恵

巻き舌で喋る友にはくたくただ

金木犀あまい香りに足とられ

くつきりと十年後でもメスの跡

旅の宿やはり我が家は安らぐな

母の字をなぞって思うやさしい目

米子市 湯浅 俊久

転ぶ度角をなくして踏ん張れぬ

いい人になってみせます死んでから

血糖値おでんの種を指図する

カタログに諦めきれぬ星印

明日と言う言葉で今日を早仕舞い

松江市 武島 千代枝

春を待ち花もわたしも充電中

ひび割れの踵が知らず寒の入り

意地捨てて可愛く老いる修業中

リーダーの大雑把さが頼もしい

じっとして居ても食事がきてくれる

松江市 山根 邦代

来る年の幸せ願う年賀書き
比べない振り返らない前へ行く
電線も化粧している今朝の雪
親友が笑い袋を提げて来る
大勢の嘶きを聞く年賀状

雲南市 菅田 かつ子

気がつけば笑い袋を置き忘れ
念入りの化粧も待たされる
うれしくて着たり脱いだりまた着たり
閉め忘れ呆けたと蛇口喧しい
うとうとと眠り慌てるロスタイム

岡山県 池田 たか子

通院日旅行のように書く曆
おーい酒言ってみたいな割烹着
よろよろと生きてぶれない独楽の芯
開く日のトキメキ欲しい福寿草
酒飲みの玄関酒の句を飾る

岡山県 田中 恵

ふるさとの風は昔をよく喋る
耳飾り揺れて小鳥に狙われる
うたた寝の猫もあわてる灰神楽
焼芋の内緒話はすぐばれる
皺一つ眉間に増えた初鏡

岡山市 前田 恵美子

毎日が思い出作り前を向く
駄馬だつて疲れも出るよ冬休み
平凡な毎日が好き人が好き
おでん鍋交響曲の味がする
第六感信じ今年も歩き出す

広島県 日谷 寛

にんげんも鬼も煩惱抱いて生き
にんげんも鬼も楽しい花見酒
にんげんも鬼も遊んで終電車
にんげんも鬼も恋では大火傷
にんげんも鬼もまだまだアナログ派

防府市 坂本 加代

掛け軸を替えて気合いも新たななり
しばらくは鳴かず飛ばずの低飛行
来てくれぬ近くにいても遠い人
赤信号見ても信じぬ信者たち
着信を拒否して切れる男女間

南あわじ市 萩原 狸月

奉加金僧も食わねば経読めぬ
俺の背子が学ぶもの何もない
褒賞の謝辞は決まって身に余り
巧言に投票をして四年悔い
見舞拒否やつれた顔は見せとない

松山市 栗田忠士

唐津市 吉富節子

いざの時切れる尻尾は持つてゐる

決心はもうつきました冬の月

私の影を冬日が引き伸ばす

その先をぐっと呑み込む喉仏

啓蟄に蛙も四股を踏んでいる

松山市 神野きつこ

海峡に水天門の朱が揺れる

元旦も傘寿の母は休みなし

三世代午で嘶き聞こえそう

馬の子は産まれてすぐに正座する

年重ね性善説を信じてる

今治市 渡邊伊津志

それとなく波紋残して去った人

仮面にも血が迸る物価高

鳴らし得ぬ鬼灯が生む闇なり

或る日ふと女自虐の手を憎み

表情の違い楽しむ書道展

大洲市 花岡順子

ロボットのバニック同じミス続く

養殖の魚でエサは貰うもの

美人だと言わぬ鏡を持つてゐる

磨いたら光ると母は信じてた

信号を渡る授業もある田舎

病して人生観も変化した

穴ぐらの強さ知ってる昭和です

年賀状書いて無沙汰がよく解る

戦中の苦勞実って今がある

顔はA心はBの選挙戦

弘前市 須郷井蛙

ドクターにほめられに行く血糖値

古米でもいいよ上手につくるから

カラオケで今日のストレス吐き出させ

新品の下着でゴムがきつすぎる

心はひとつ夫婦で同じ買い物し

弘前市 肥後和香子

会える夜の雪の熱さを確かめる

雪どんどこもかしこも白すぎて

あつそうか塩分ひかえめ愛濃いめ

マグロより津軽海峡冬景色

なまこ裂くこのわたつるつる一人占め

弘前市 吉川ひとし

老母を呼ぶ健気に咲いた雪の華

空き家にも陽は当ります梅が咲く

錆びた釘抜いて日差しを当ててやる

鳩尾にラップを掛けて隠す嘘

無言劇修理効かない割れた皿

つくば市 嶋本 喬

当り歳神馬の像もおめかしを
パトカーもコンビニへ来るお昼前
納豆とチーズトースト元旦も
よく来たな近況手書きの年賀状

東京都 井上 つよし

パママと呼ぶ父さん母さんだ
ほどほどにしとけと父の目が笑い
入院ひと月人生観が覆り
健康診断自信あるので受けに行く

東京都 大竹 一良

知っていて知らぬ振りする難しさ
本棚は売るに売れない本ばかり
カニ料理黙々と食ひ爛冷める
意地を出す女の強さ恐れ入る

東京都 高岡 弥生

あと何度祝えるのかなお正月
怒らずに口で伝えるだけでいい
年賀状大忙しで日本舞う
まだ続く修業終わりにしたいです

横浜市 長島 亜希子

はまってることあり作句の暇がない
もつと肉食べろカロリー減らせとは
言うことを孫のようにはきかぬじじ
初詣歩数増やしにはしごする

富山市 有澤 嘉晃

ポケットに言い訳だけを貯めている
魂のときめく方へ走り出す
ゼロだけどついとねじれば無限大
マイナスをゼロにするのに骨を折る

岐阜市 平野 あずま

ままごとの彼女と遇った老いの会
反省を一気飲みするコップ酒
投函をした後誤字に責められる
古き友逝って昭和が遠ざかる

静岡市 渡辺 芳子

心待ちした人からの年賀状
八十路すぎかすかに残る女です
手ばなしで喜べぬ齡誕生日
天国よ私一人の八畳間

熱海市 三谷 圭角

転ぶなと踵を浮かす散歩道
川柳に追われてアツと過ぎて行く
虎の威を借りて平和が嗤ってる
辞世の句ちと早過ぎと叱られる

江南市 脇田 雅美

金次郎タブレット手に調べ物
建前より本心写すレントゲン
ジェラシーにグループの輪が崩れだす
留守電に深呼吸してメッセージ

京都市 清水英旺

年だから恋は禁忌というなかれ
弥陀おわす如金色に光る雲
また同じ日が始まるか箸をとる
初春を喜ぶごとし寒雀

奈良市 前田弘恵

新島は日本国へのお年玉
年頭に変わぬ日日と祈り込め
言葉尻批判をしつつ親娘旅
尖閣も日本の月を見たかろう

長岡京市 日置みどり

願わくは旅とグルメと川柳で
ドックから加齢のあかし教えられ
立ち位置が違つて話囁み合わず
愛読書川柳塔になりました

大阪市 宇都満知子

孫の目が絵本の続き待っている
玄関の出はいりの度香る梅
感動で脳が生き生き目覚め出す
孫の歌子育ての頃よみがえる

大阪市 内田志津子

初詣で寺と神社と教会へ
子等つとい皿いっぱい春を盛る
年明けてアベノミクスが試される
いつからかおせちも鍋と焼肉に

大阪市 梅里南天

何びとを刺しに出でしや冬の月
携帯と傘がいいのは折り畳み
お年玉あげる子とうとういなくなり
チャルメラを救急車だと大騒ぎ

大阪市 太田としお

記録以上に記憶に残る大投手
人間の性を見付けた競馬場
除夜の鐘腹にピンピン響き出す
補強策さて今シーズンのお手並は

大阪市 栃尾奏子

落わらびお弁当から春になる
羽のある男ばかりを好きになる
新婚を保温するのは至難なり
手を抜けば私が見えてくる雛

大阪市 藤田武人

引出しの奥にタゲ付き服がある
定年後リニア乗るまで生きてやる
てにをはが飾り具合を気にしてる
平凡な自分に一を足していく

大阪市 前川善之

自分の意志言わねば解る筈がない
この寒さ午年だからなんのその
引き際は自分で決めるアスリート
新年は過ち悔いる神参り

大阪市 松田 聰

クリスマスから初詣でへと宗旨がえ
もう一度憲法の良さを考える
なつかしいにおいの記憶手繰り寄せ
元旦の新聞みんな読めないよ

大阪市 吉田 知之

年寄りに席譲られて気を遣う
花作り通行人と友になる
下心見透かされる照れ臭い
だんだんと昼行灯になれてゆく

堺市 増田 わこう

少子化は先進国の泣きどころ
八十路越し人生けじめ付ける歳
五七五頭の体操没もよし
五千万それはみんなの保険料

堺市 山崎 早苗

映画観て感想違う人がいい
夕方の店のガラスに老けた女
図々しい穴があつても飛び越える
また来たよ父に今日も言えました

堺市 大和 峯二

夢希望いっぱい積んで老いを生き
年金と福祉削られ春はいっつ
自然には勝てないことを覚る日々
いつかきた戦の道へ身が縮む

池田市 上山 堅坊

残り火にそよ風送る趣味の道
濡れ衣を無理矢理着せる取り調べ
明日の夢見ながら歩く八十路坂
にこにこと語り抜ける仲間の輪

泉大津市 助川 和美

登校の子らと挨拶落葉掃く
なんとまあこれも百円無駄も買う
レシビ本見てもいつものメニューする
できもせん減量誓う妻の乱

泉佐野市 稲葉 洋

どの護符が利いたのだろか寺神社
教科書も無い世渡りヘタイを締め
八十の老いにも照れがある意気地
追う鳥も逃げる獲物も見ぬ枯れ野

貝塚市 石田 ひろ子

公園の鳩あんの靴の露払い
百八つわたしを染めた年も終え
新旧の味しつくりとお重箱
元日の杯下戸も持たされる

河内長野市 辻村 ヒロ

のら猫も相手見極め甘い声
ワンサイズ大きめを買う癖が付く
安眠に本を積んでる枕もと
老いたとてたまには欲しい腕枕

河内長野市 藤塚克三

豊中市 荒巻夢

未完成だから生きるぞまだ元氣
まだまだと学ぶ意欲が溢れ出す
病氣かな年を取っても浮気虫
腕時計俺に似たのか狂いがち

河内長野市 穂口正子

豊中市 源田啓生

我先に老いを嘆いて進む酒
なんべんも脚色されて聞かされる
修業不足悲哀が顔に満ちている
走馬灯追えば悲しきことばかり

河内長野市 渡邊修

富田林市 関よしみ

支払いがジジと分かればオーダー増え
半沢のその後の行方気にかかる
ダイエットとんと忘れた三が日
水門が故郷民意二分する

岸和田市 中岡香代

富田林市 肥山一文

あたたかい風に誘われ花の里
漂白でいつも明日は新しい
ロボットは残業しても文句ない
海外で日本の良さを思い出す

高槻市 三谷白黒

寝屋川市 荒川鈍甲

年末は何もないのに忙しいぞ
どれにする決めているのに聞かないで
おしゃべりが一対十の夫婦です
どの国もエゴ丸出しの有権者

風邪ひいて一人を選ぶお正月
改めて生きる意味問う寝正月
目をつぶり独りの雑煮たべている
金儲け目の色変えてまだやるの
パソコンに待ったを告げて酒を飲む
人の世は待ったが効かぬから悲し
始めから丸い石などあるものか
川柳で灰汁を取りつつ生きている
歩の意地で金の歩幅をねらつて
鍋奉行その瞬間を見逃さず
芽を残す愛の証に伸びる枝
手の内を晒して明日呼び寄せる

立ち話見られて噂とんでいく
老いてなお机一つがわが支え
ふるさとの街を歩けば遠い恋
胸の内打ち明けられず年を越す
アベノミクスで僕ら貧しくなるばかり
内部留保のおこぼれ誰か見ましたか
顔や頭と折り合いつけて来て八十路
逝くときは祭囃子を聞きながら

寝屋川市 岡本 勲

気がつけばもう傘寿ですと皺がいい
贈りものタダでもあとが高くつき
鬼門にお尻向けて巻き寿司丸かじり
おもてなしを小包にして宅急便

羽曳野市 磯本 洋一

雑巾も運針いらず百均で
七五三同じ写真が何枚も
三日間カレー付き合う孫帰省
旅終り矢張り実家が一番や

羽曳野市 安本 美喜

挨拶の着ぶくれ同士首竦め
葉牡丹の紫の渦白の渦
祖父母にも優しい帽子手編みして
昼夜逆転孫に囲まれくたくたに

枚方市 河田 洋子

消費税老いの暮しに倍に効く
好きな事許す夫に感謝状
喜寿過ぎてまだまだ夢を持ち続け
趣味多忙鏡を見ない日が続く

枚方市 坂本 ミヨノ

新春の富士の映像日本一
夢の中旅券の詰る福袋
禁煙のコマーシャル見てふかす夫
悪友と発泡酒で旅一夜

枚方市 松原 保

あんなにも騒いだボールもう忘れ
式上げた自慢のホテル格が落ち
この紙面反対ごとで埋つてる
紅白は歌を競うか踊りもか

藤井寺市 田付 絹枝

氷上に立った去年は若かった
じわじわと日増しに募る亡夫の愛
痴話喧嘩孫の電話で氷解け
八十近し中庸の良さ解りかけ

松原市 市川 雄太

新年は良くも悪くも始まった
思い込みで心の疲れ広がった
一人でも頑張る心強く持つ
カラオケで心を癒す休みの日

八尾市 赤木 妙子

鶉鳥も山雀もきたお正月
友からの賀状届かぬ空しい日
古い日記から辿る私の今日
病院の廊下人生と擦れ違ふ

八尾市 田邊 浩三

絶対に死語にはするな愛のムチ
還暦から喜寿の祝いの早いこと
孫は何故こんなに早く歳をとる
散歩路変えて迷って倍歩く

八尾市 前田 紀雄

古希過ぎてサブリとウォーク欠かせない

再稼働新しいゴミは要りません

成人式祝辞やんわりおもてなし

晩学の人生学ぶ事多い

大阪府 小栢 こずえ

泣いても笑っていても二十四時

朝日さす無償の恵み元氣湧く

没句でも呆けの予防にはげんでる

煤けてる障子も明るい春が来た

大阪府 高木 道子

元朝にぬつと空バス顔を出す

山頂の仏もほっこり初明かり

この指へ寄ってたかっておもてなし

どこまでも絆で絡む熨斗袋

大阪府 畑中 節子

柚子刻み一人の食事も手を抜かず

すき焼きに一家全員輪が弾む

移りゆく四季の流れを詩に詠み

懐メロで昭和の色になる集い

神戸市 井上 忠貞

夫婦仲鈍いぐらいがちようど良い

初孫の写メールみては顔ゆるむ

在りし日を思い浮べて読経聴く

青春の思い出深い秋の京

神戸市 奥水 弘

悲しいことさらさら言える恐ろしさ

挫けずに鏡くるりで別世界

去り際はいいことだけを言っておく

これしきのテレビドラマで初泣きす

神戸市 富永 恭子

片づけは過去の自分と出合う時

口喧嘩しながら出雲へ夫婦旅

明日を生く忘却という力借り

すべり止め靴下はいてさあ受験

神戸市 能勢 利子

駅前の鳩エサくれる人知っている

昔話しだと老母の目が光る

来世でも女がいいと思う古希

妹が欲しがらるおもちゃ惜しくなる

神戸市 山根 弘子

迂闊にもあの一言で友が去り

七たびの馬を追かけ早や傘寿

卒寿まで八十路の坂を一歩ずつ

少女の恋姫鏡台に置き忘れ

加東市 岩本 美緒子

出入り口赤鬼さんにもおめでとう

離れ部屋だあれも来ない絵を描こう

ぼつぼつでも何とか用足す米寿足

ケアー族にも新年のご挨拶

川西市 日野岡 和之
ちよつびりの不運もいいよ前後賞

古希過ぎて未だ煩惱の渦の中

幸せはやつてはこない気付くこと

景色よりトイレ優先通路側

篠山市 石田 久子

幸せになれて気付かぬ気ままなり

同乗はご遠慮します初免許

平凡な日々だが笑える有難さ

独り身は辛い背中への貼り薬

篠山市 北澤 稠民

没の会あったら直ぐに参加する

お正月スマホは置いて話しよう

年ごとにちよつぱけになる願ひ事

人生にナビがないから生きられる

篠山市 酒井 健二

鈍感な聞こえぬふりで場をしのぐ

欲が九分残す一分で人の顔

核心は話せぬぼろぼろ体験記

風変わる一駅ごとの北帰行

篠山市 佐々木 勇

恙なく一日を仕切る割烹着

夫婦箸築いた砦恙なく

ほのぼのと絆が結ぶちゃんこ鍋

へんてこな夢が私を攻めてくる

篠山市 永井 かほる

お正月御馳走あきてパン作る

動かずに食べる御馳走胸やけす

菜園に今年は何を植えようか

今肥やし水瓜蒔く床かくほする

三田市 今西 廣子

今日もまた妻はエステで僕は家事

欲しい物買ったつもりで自分褒め

六割は眠っていますこの頭

アレルギー相手によつて変わるかも

三田市 雑賀 一泉

歳ふるに妻にべこべこ増える日々

お荷物と言われぬように生きている

白髪に飛び出る腹も自然体

目くばせで心通わす深い仲

西宮市 株元 玲子

遂に来たか お手柔らかに認知症

ゆつくり行きましょう薬と一緒に

あんたどなたはんね わて知りまへんわ

一日一日が勝負ありきです

西宮市 藤本 直

一段が一日となる八十路坂

愛という解らぬ文字に悩まされ

風揚げをゲームでしてる平成っ子

どんな句が出来ましたかと猫が寄る

三木市 山口 久子

米寿でもひ孫相手に歩競走
正直に米寿まで生き感謝する
ああ言えばこういう孫にがまんする
行く末がわからぬままの幸せで

奈良市 尾 畑 なを江

みどり亀夜店抜け出し草の中
来し方を辿ればそこに父と母
陽だまりを猫も私もねらってた
かみ合わぬ話に返事保留する

奈良県 安^あ 福^{ふく} 和 夫

ご近所さんの名前犬見て思い出す
謎解きが好きな家内に嘘つけず
下世話だがにっこり聞き耳立てている
男なら妻に言えない事もある

奈良県 谷 川 憲

張りつめた会議に水をさすクシヤミ
花園の負けたチームの背に誇り
道端の小石にもある自尊心
グーグルで思い出の地の今を知る

和歌山市 北 原 昭 枝

捨て切れぬロマン男が挑む夢
静けさに洗われ深い森を出る
思い出の箱に詰まった私小説
ジャンプ傘たためば青い空がある

和歌山市 平 田 元 三

偽食って食通振った舌も偽
リラックスせよとは無理な歯の治療
考えてから名前呼ぶ子沢山
元気でと言って別れて半世紀

和歌山市 福 呂 秀 子

静寂を破って師走火の用心
一言がサブリの代り身が軽い
金木犀ここよここよと香を流す
厚着して静かな冬になって行く

岩出市 村 中 悦 男

マフラーをくれたお人の前で巻く
年新たな歳相応の幸さがず
たくわえの目べり急がす息子いる
バーゲンのチラシは念を入れて見る

田辺市 大 峠 可 動

年金で暮らす枯木が陽だまりに
煩惱を抱いて八十路の春うらら
人命は軽く噂に乗りたがり
積年の素顔この世に生かされて

鳥取市 大 前 安 子

初詣目礼だけのご挨拶
ウォーキング正月二日紐を締め
参道は樹木に真珠初詣
石段で自主トレ開始初詣

鳥取市 坂本 とも湖

核捨てて世界平和へ手を結べ
妻の手を逃れ一人のモーニング
一人旅クスリ袋が手離せぬ
もてなしの代り漁り火見て貰い

鳥取市 津村 律子

お年玉目当て可愛いストーカー
婆さんをまたも呼んでる探し物
あれこれと口は出すまい手がきかぬ
イルミネーション節電の倍返し

倉吉市 中村 毅

没の山をそつと火の中とんどさん
道草を食った分だけ知恵をつけ
お年玉丸より四角いいと孫
川柳の課題に跪くのも楽し

倉吉市 堀 かずこ

生きた金買ひ物上手貯めておく
老いという魔物を箱にカギかける
思い出を大事に仕舞うこの胸に
いつまでもきれいでいたい鏡見る

境港市 中井 虎尾

咲いたけどやっぱ寒いと冬桜
虎落笛今なら吹けと虎ファン
人間は電波の海で生きている
同窓会個性自慢の顔そろろう

安来市 原 煩悩児

水鳥は寒くないのか嬉嬉として
白鳥が田圃に群れている平和
生きている今を疑う去年今年
淋しさに寒さを覚ゆ冬の月

米子市 生田 和之

景気なお安近短の年金者
パソコンのストに引き抜くコンセント
更新に時計の針を書かされる
それなりに生きていますと電話する

米子市 池岡 たけし

息災に暮らせた年に頭たれ
元朝は拒めない歳持つて来る
老いた身が寄れば昔に花が咲き
年あけて宙に浮いてる三が日

米子市 小野 鶴子

年賀状添え書き一句に夢もらう
節料理和から洋風嫁の味
年明けね延ばした付けが今ピンチ
たっぷりの愛引出しの奥にある

米子市 加藤 正二

川柳に一言ぶつけほつとする
物忘れ茶話にして笑い合い
年明けていつまで続く独り旅
寝た子供ゆすり起して騒がせる

米子市 田村 周子

鳥取の砂像はなんとすばらしい
孫どもは正月三日さつと散る
除夜の鐘煩惱去らず明日を生く
年とつて音が聞こえぬもどかしさ

米子市 野川 宣子

玉砂利の向こうに神のいる気配
三が日過ぎてようやく酒が抜け
三が日やっと女の寝正月
お雑煮の中身で採める新所帯

米子市 見山 温子

古い二人おせちの残り日日続く
スイートテン期待ばかりの五十年
里帰り娘との会話は風呂の中
ボーナス日子に誘われて焼肉へ

鳥取県 飯野 菖子

へこむより人生晴れで生きている
赤い羽根胸でひらひら募金する
天国へ返事を出そうまだ逝かぬ
まるまるとした大根が逞しい

鳥取県 大塚 美代子

お年玉あけてにやにや策を練り
家の戸をまたげば影も息を吐く
渋皮の取れた娘のお振袖
傘持たぬ旅でかけ込む道の駅

鳥取県 岡村 孝明

綱引きの尻餅勝った方がつき
小売店買物弱者の村回る
大笑いする度体活気づく
弱点を検診受けて確かめる

鳥取県 下田 茂登子

寝正月出来ぬ相棒食べさせる
頑固さは死ぬ迄続く強い腰
息子にも相棒一人見つけた
悪口を吐いて何んとか身を守る

鳥取県 田中 幹啓

この世の花涙がにじむひとり部屋
DNA繋ぎ繋いで今がある
ジゲ興し文化が町に響きます
ごめんなさい俺いつまでも渋柿だ

鳥取県 橋谷 静江

外は雪部屋中水仙香りだす
晩酌で無口な夫が喋りだす
出会っても別れが辛い孫帰る
友からの長い電話に風邪をひく

松江市 相見 柳歩

悪者にしないで塾は人助け
君となら法定速度超える恋
振り返る何度この世に生まれたか
仕舞う場所ないほど明日を買ってくる

松江市 中 筋 弘 充

居酒屋へ小走りで行く癖がある
新年のうちはぎっしり書く日記
新米の僧侶の固いお説教
試着室に入った妻が出てこない

出雲市 黒 目 英 男

雑音が耳に残って離れない
マイウェイアクセル踏んだたかに
前へ前へ自分を信じ歩きたい
空元気出して今年も頑張るぞ

岡山市 丹 下 凱 夫

かくれんぼ上手な柚子が一ついる
オーバーのポケットにあるワンコイン
惜命のしずかに除夜の湯をつかう
貰ったら送り返せと言っただろ

倉敷市 安 東 モ モ

今日の顔休みの顔になっている
会う人を思いうかべて化粧する
冬將軍寒い寒いと動けない
のほほんと休み過ごして暮れて行く

玉野市 片 岡 富 子

適当な加減で家事をこなす日々
川柳に愚痴突っ込んで句が出来る
水溜り明日の自分が輝いて
感情を押さえ切れずに進む

竹原市 若 年 幸 子

お話はそこで終らす酒の席
政治家は白特捜は黒と言う
冥土の母へ電話のかかるミステリー
イメージは桜咲く頃君と逢う

府中市 馬 場 利 子

研ぎたての包丁柿を剥いてみる
二度咲きの木犀の香頼もしい
直送の信州リングに手を合わす
ゆっくりと杖にしたがう冬帽子

宇部市 高 山 清 子

前向きと言いつ心は後向く
生き上手時に悪役買って出る
勝ち取った椅子で味わう孤独感
メールより絆深める里帰り

香川県 田 口 彦 六

正面を向くフクロウの強情な
糸車死ぬまで廻すつもりだな
横に来て怒涛のような小便よ
弔辞よむ老優しばし素のこえで

高知市 三 谷 待 太 郎

アバウトにさらに輪をかけ年の明け
年明けて花咲かそうかつぽもうか
お・も・て・な・し五千万円ご馳走様
国技だぜはたく引くなど見たくなし

香南市 桑名孝雄

熊本市 杉野羅天

忘年会松の廊下でしめくくる
じり貧は哀れこころが勝負どこ
胃も腸もカメラの保証付きである
どんと来い後れはとらぬ酒でなら

健康を折り酒好きさらに飲み
あの方の詩には音が流れてる
はんやりと気ままに浸かっている露天
掘れば出る政治利権の山多く

北九州市 小松紀子

山鹿市 前田幸子

そのアナタ咳をするならマस्कして
あら嬉しときめく気持まだあった
事前指定書延命はなしと書く
無理しない頑張らないわ七十路

被災地のこの字が消える日は何時か
朝新聞先ずお悔みらんをのぞき見る
深夜でも私の友はラジオです
一年を喜怒哀楽でまた年始

福岡県 本田さくら

山鹿市 三谷たん吉

さあ仕事先ずは化粧で活入れる
ケースの中五人のこけしひそひそと
たくましい賀状の馬がにぎやかに
年賀状自筆に浮かぶ友の顔

一銭も使わせないぞ兵器には
景気じゃない心に豊かさ与えてみる
悪さして辞任ですまぬ逮捕せよ
新聞屋具合の悪い事も書け

佐賀市 清水園實

山鹿市 米加田恭代

幸せはおいしいものを食べる時
布団から軽く起きたいダイエット
塩分は生きるおいらの羅針盤
母ゆずり血圧だけがままならず

私と同じ体験ポケ自慢
本当に空気になった君がいる
生き甲斐とやり甲斐求め新車乗る
人生は迷路の中でわめくだけ

唐津市 岩崎實

札幌市 富永恵子

夢に見た穴場へ急ぐ軍資金
終わらざる予定新たに庭仕事
模様替え心新たに本を読む
もてなしと思いやりとの両輪で

牛の歩で一句を捻り青い空
放送で隣の訃報届けられ
コンサート聴いて今年の締めくくり
きつちりと麻酔体験副作用

(高森一吞さん・木田比呂朗さん・山根弘子さんの句は43頁にあります)

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

男ごころ

ベレー帽どうですという冠りよう

本気にするぜと男の嬉しそう

友遠方より来たるまた保険なり

借りに來た友とは妻にきかすまじ

七光りですと養子如才なし

養子会作る話もそれつきり

総辞職男をたてたつもりなり

女ごころ

女もう暴君でないが氣に入らず

あの晩の風邪よと女嬉しそう

ハンドバッグ迷える心パチつかせ

伊達巻の後ろ姿へ湖は暮れ

化粧なおす後ろ姿へ喫う煙草

ヨヨと泣いておいて他人さんへ嫁ぎ

自信ある顔で三面鏡を閉じ

OKと派手に別れた戎橋

誘惑をせよと口紅アイシャドー

チト低い鼻でサービスゆきとどき

待ち呆けさすには惜しい美人居る

ネックレス修験者程に巻きつける

剃刀沙汰の女が通る春の雨

占いにわてもわてもと女連れ

挨拶は指のダイヤを見のがさず

誹風柳多留一二篇研究 9

ろう。

つき合て行深川は箸やすめ
ずつと来たなりでふか川もてる也

初 28

安六宮 1

深川へ行ッて来る程長湯なり

一一 26

小栗 賛。この句、佐藤要人先生が『江戸深川遊里志』で解説しておられ、成程と思うので引用しておく。

(略)ここに遊ぶ客の多くが、時間にゆとりでない連中なので、短時間にぱっと騒いで女をころばせて、鬱屈したものを一気に発散すれば、それで明日からの生活に張りを持たせる、といった商家の奉公人たちの生活環境が、この遊里の性格を形作っていたのかも知れない。

深川ハさつさとおしてかへるとこ 一二五
の句は、深川遊びの実態を端的に表現したものであるが、「押す」は、囃し詞の「さつさおせく」を踏えていることはもちろんだが、同時に交会を意味する隠語でもあった。

清 過日、「新川の跡」を見に行つて来ました。番頭が大川を横切つて深川へ遊びに行く姿が彷彿しました。

67 一ツたいは地ものきらいのみだも有

64 北国のかたうでになるしやうとうじ

石川 北国とは江戸の北方に当たる吉原。その近くに紅葉の名所である正灯寺がある。吉原に行くにあたって、正灯寺へ紅葉狩りに、というのはいかにもよい口実である。この季節、遊治郎にとって正灯寺は心強い助っ人である。

かこつけも花の外にハ奈とう寺 安三仁一
せうとう寺うれ口のよいもみちなり

二三 34

拙寺をうるハめいわくとしやうとうじ
天五梅 2

清 賛。「片腕になる」が川柳らしき表現。

65 むこい事もめんもようで土手を行

石川 道子・小栗 清 吾
細井 龍夫・伊吹 和 男
山田 昭 夫
清 博 美

石川 土手は日本堤、吉原への土手である。

客であれば上等な黒羽二重などを着て行くの
であろうが、ここを木綿の粗末な衣類で行く
のは女衞に買われて身売りする娘であろう。

木めんふり袖土手を行むこひ事 安四鶴 3
人じんてすくつた娘むこい事 安元信 2
ほえるなよかなはぬ事とぜげんいひ

一四 25

小栗 賛。木綿模様は模様の入った木綿物。
清 賛。

66 深川ハさつさとおしてかへるとこ

石川 深川での遊びは、情緒の何のとゆつたりした風情を楽しむ客より、もつとすばやく、さつと押し倒して、さつと引き上げたのであ

石川 「五番目は同じ作でも江戸産れ」(初二)にある上野広小路常楽院の阿弥陀仏。江戸周辺の六阿弥陀の内あとの五体は江府外に安置されていた。

五番目の弥陀ハ麦めしきらい也 一三二九
五番目の外カハ米でもおがまれる

五ばん目の外ハひゑぐそ寺斗り 安六梅三
小栗 少々悩ましい句。「地もの」をどう解

するか。礎稿は、「地物」とされて、おそらく「地方の産物」「田舎の物」というようなニュアンスでとらえておられると思うが、辞書には「その土地の産物」「(日国)」とある

のみで、直接的には「田舎」の意味はなさそう。理屈だけからいえば、「江戸の地物」もある。ただ、そうはいっても、「地物」の響きから、「田舎の物」と感じられていたという可能性は充分あり、とすれば、六阿弥陀で正解ということになるかもしれない。しかし、先人の解を見ると、柳雨氏は「地者」(素人女)として「吉原志」と「年中行事」にとつてとられる。ただし、「吉原志」では、吉原丸屋の「朝日如来」とされるのに、「年中行事」では六阿弥陀として、「娼売人好、五番目の側にけころという売女が住んでいた」

と頭註される。

よくわからぬがね川柳で「ジモノ」は圧倒的に「地者」だから、主題句もひとまず「地者」でかんがえるべきかもしれない。とすれば、朝日如来か。

伊吹 礎稿のように考えていたが、「地もの」にこだわれば、小栗氏説に賛。

山田 「年中行事」の頭註のように、常楽院のある一帯にはケコロが多かつた。

五ばん目のミタハ式百中に居る 安八礼二
それはあたかも、地者つまり素人女が嫌いでもあるかのようにだ、というようなことでしよう。

清 「一体」を六阿弥陀の内の一体とするか、多くある弥陀の内の一体とするかで、句解が分かれよう。今、にわかに判断しかねる。

68 旅四ツ手おもかちといふ音で出る

石川 旅先で乗る四ツ手駕籠は、船首の向きを変えるときの掛け声のごとく重々しく、江戸の軽い運びの四ツ手籠とは違う。または行き先に到着し籠を出るとき、くどくどしい挨拶を受けるのであろうか、いずれにしても、江戸の軽快な四ツ手籠とは違い田舎の籠は野暮ったいというのであろう。

まつさをな生キつえをつく旅四ツ手 安四礼6

あまじやれた四ツ手でかへる根津の客 明三礼6

小栗 不明。なぜ「面舵」で「取舵」ではないのかわかりません。また、その「音」というのもわからない。

山田 船首の方向を変えるときギイっという音が出るが、旅四ツ手の場合は、荷物も加わるから、重量が大きくなる。その為。ギイっという音を立てて出発する、というような事と思いますが……。なお面舵は取舵どちらでもよく、たまたま面舵とただで他意は無いと思います。また「野暮ったい」も関係ないでしょう。

清 旅での駕籠の雰囲気を舟の用語で表現したまでの句か？

69 乳母がちゑてうしへさゆを入れて出る

石川 花嫁について来た乳母か、お酒を飲んでみたが子供の乳母か、酒の飲めない息子の乳母か。いずれにしろ、乳母が氣を利かせて銚子へ白湯を入れ、かたはばかりは調べて持ってきた。

清 賛。

英語 de Senryu ②7

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

(岐阜保健短期大学)

薄情な男 眼鏡を 拭くばかり

*unkind man he is!
only keep wiping
his eyeglasses*

あのダイヤ もう藝人の指になし

*huge diamond ring
has disappeared
from the entertainer's finger*

～リバーウィローのため息～(短詩形文学の国際化3:川柳英訳がペンギン本に掲載)

昭和39年(1964)に英国の日本文学研究者、Geoffrey Bownas と Anthony Thwaite によって *The Penguin Book of Japanese Verse* が出版されました。この著書の副題は、*From the Earliest Times to the Present* で古事記から現代詩まで網羅されていますので「日本詩歌史」と云ったものです。私が使用しているのは2009年度版ですが、応神天皇の祝婚歌「このかにや」から伊藤比呂美の「良いおっばい悪いおっばい」(1985)まで掲載されています。そして古川柳60句と現代川柳33句の紹介があります。かつて川柳英訳に多大な功績のあった宮森麻太郎やこの著書の出版と同じ年に亡くなった R.H.Blyth の英訳が海外の川柳英訳に影響を与え、さらに最新版では現代川柳も入ったことで、川柳の海外普及を夢見ていた阿部佐保蘭の姿が蘇ってきます。*The Penguin Book* では「町内で知らぬは亭主ばかりなり」は次のように英訳されています。

*In the whole village
The husband alone
Does not know of it.*

Geoffrey Bownas, Anthony Thwaite: *The Penguin Book of Japanese Verse* (Penguin 1964)

以下、参考までに宮森と Blyth の英訳を記しておきましょう。

*All the town is aware
Except her own husband.* 宮森麻太郎『英訳古今俳句集 *An Anthology of Haiku Ancient and Modern*』(丸善 1932)

*All the town
Knows about it,
Except the husband.* R.H.Blyth: *Senryu* (北星堂 1949)

33句の現代川柳には *So hard to fall for--/The female/English-language typist* の英訳が入っていますが、日本語の川柳と作者名が記載されていないのは残念です。

樽拾い活躍す

小栗清吾

男の子が一〇歳過ぎくらいになると、商家などへ奉公に上がります。こういう子を一般に関西では「丁稚」、関東では「小僧」と言いますが、特に酒屋の小僧は、「御用聞き」(略して「御用」あるいは「樽拾い」と呼びます。酒の空き樽を得意先から集めて回るので「樽拾い」です。

樽拾いといえは、すぐ思ひ出す有名な俳諧があります。

雪の日やあれも人の子樽拾ひ 冠里

雪の降る寒い日に、樽拾いを見かけたときの感慨でしょうか。あれも人の子なのに可哀なことだと思ひやった句です。

こういう名句に、たちまち下世話に反応するのが川柳作者です。

句にならぬ御用主人の慈悲ぶかき 八一5

名句になったのは、無慈悲な主人が雪の日でも御用聞きに行かせたからで、慈悲深

い主人だったら句にはならないねと。理屈であります。

酒恋し人の子も来ず雪の夕 一四五12

寒い雪の晩。酒が飲みたいのだが、御用聞きもやって来ないというのです。今ならコンビニに頼るところですが。

さて、外回りの客商売は、いつの世も辛いものです。

唐犬が居るで御用は回りかね 宝三松4

唐犬は、非常に大形で力の強い舶来犬です。そんな犬の居るところは、恐ろしくて行きたくないですね。

鯉口を鳴らせば御用置いて行き 五31

こちらは犬より怖い人間ども。武家屋敷の長屋か、浪人の家でしょうか。酒樽を屈けて「溜まっているお勘定を下さい」などと請求したら、刀の鯉口を鳴らして脅されたのです。酒樽を置いて退散です。

長くした首で御用は叱られる 安四番5

脅されないまでも、叱られるのは日常茶飯事です。「遅いじゃないか。首を長くして待っていたんだ」などと叱られます。

しかし、辛いことばかりでもありません。

御用には仏様のを下げてやり 一九5

仏様にお供えてあったお菓子などをく

れる人もいます。

雪隠で葡萄一房御食用い 九11

主人に見付からないように、トイレに隠れて葡萄を食べている御用聞き。だれかがくれたのでしょうか。

そんな余禄があるのは、毎日町内を駆け回るついでに、ちょっとした用足しをしてあげたりするせいかもしれません。

ええ子だと御用八百屋へ頼まれる 六7

長屋の女房に「いい子だから、八百屋さんまでお使いに行つて来て」と頼まれたり、

安い色文樽拾いを頼み 玉17

たまにはラブレターの配達を頼まれたり。「安い」ですから、ふだん仲良くしている下男・下女あたりの依頼でしょうか。

藪入りの注進に来る樽拾い 三26

お得意先の娘が藪入りで帰ってくるのを目ざとく見つけて、「もう、その角まで来ていますよ」などと、走つて報告に来る。実家の人は喜びますよね。

やはりみんなに可愛がられるのが一番。

振袖でぶたれる御用気さく者 四6

明るくまじめに勤めていれば、やがて手代・番頭と出世して、自分の店を持つことも可能になります。頑張りました。

愛染帖

新家 完司 選

松山市 神野きつこ

アルバムに悲しい顔は貼つてない

(評) 悲しい顔の写真を見れば、悲しかったことを思い出す。記憶の部屋に残しておくのは、楽しかったことばかりでいい。

無駄買いの最たるものに宝くじ

京都市 都倉 求芽

(評) 年末ジャンボなら10枚で三千元。外れたらすべてバー「夢を買っている」とは言うが、欲が絡むと損することが多いのは当然。

羽子板も凧も飾りで遊べない

高槻市 島田千鶴子

(評) ゲーム機に負けたのか正月でもあまり見かけない追い羽根や凧上げ。豪華に飾られた羽子板も凧もインテリアとして残るだけ。

古稀の意は八十歳にしませんか

河内長野市 松岡 篤

(評) 「人生七十古来稀なり」に由来する「古稀」は七十歳のこと。平均寿命が延びた現在、九十歳になっても古来稀とは思えない。

和歌山市 福井 菜摘

内緒だが会えばときどきしてしまふ

(評) ほんわか片想いから少し熱が出てきたのだ。相手はもちろん周囲の誰にも内緒とはいじらしい。恋のおかけで乙女に戻った。

池田市 上山 堅坊

まずまずと言われればそかく自信作

(評) 残念ではあるが「親の欲目」だったのか? しかし、作品には厳しい先生の「まずまず」は、かなりの高評価かもしれない。

宇都市 平田 実男

もう少し早く歩けと万歩計

(評) 健康に良い歩き方は、少し脈拍が速くなる程度の「速歩」とのこと。だが、無理をせずマイペースでぶらぶらがラクチンだ。

大阪市 古今堂蕉子

ピンゴゲームいつもおくられてくるあなた

(評) 同番号は一度しか出てこないピンゴ。途中から参加してもつまらない。遅刻常習者は仲間を白けさせていることを知るべし。

紀の川市 辻内 次根

孤独死はこんなものかと風邪の床

(評) 高熱が出て何をやる気力もなくグッタリ床に臥せている図。そのような状況で死んでいった独居老人も多いことだろう。

加西市 中川 修

病院のベッドで聞いた除夜の鐘

(評) 甚だ不本意な病院での年越し。「寒い間

はゆっくり休め」という神さまの思し召しだと思つて養生に努め、春にはカムバックだ。

高槻市 原 洋志

ポケットを持たぬ気楽な冬木立

神戸市 山崎 武彦

はぐれないようにとベアールック着る

和歌山市 武本 碧

お年賀を出せばいきなり喪のハガキ

ラブソングハミングしつつかレー煮る

和歌山市 三浦 強一

水溜まりやる気試しているんだな

反論をすれば妻から倍返し

西宮市 吉井菜々子

遺言書のところどころにユーモア句

ハイヒール転んだままで酔い潰れ

吉井菜々子

子守歌ささやきながら眠ります

明石市 梶谷 和郎

せかせかと分秒煮込む街の鍋

藤井寺市 太田扶美代

禁煙は何度やつても難度G

くどくどホロホロわたしが老いてゆく

立ちくらみこんな所で死ねないな

大阪市 伏見 雅明

ああ夫婦おんなじような軒かく

敗因をつねに他人の所為にする

難題はちゃんとクリック先送り

満ち足りてボンと浮かばぬ欲しいもの

大阪市 梶尾 奏子

霜降りの馬刺しは足の遅い馬
佐賀県 真島久美子

識別圏ケセラセラだと渡る鳥
弘前市 稲見 則彦

試みにかあさんと書く筆の先
岡山県 田中 恵

短足と言ふなよ腰が低いだけ
豊橋市 藤田 千休

生きるのはまるで大きなあみだくじ
今治市 渡邊伊津志

亡き人の話題次々除夜の鐘
大阪市 板東 倫子

家内中が七草刻む母囲む
堺市 遠山 唯教

蟹喰いに蒜山を一気に下る
鳥取県 齊尾くにこ

しあわせの予約してあるカレンダー
はたん雪この世あの世を舞ってくる
豊中市 水野 黒兎

囚われの気分で通う歯科医院
八尾市 宮崎シマ子

忙しい人はいつでも忙しい
河内長野市 梶原 弘光

今日も汚れた小さい嘘を一つ持つ
コンパスで測れば丸い人はない
梶原 弘光

僕だって対話の窓は開けている
どっこいしょ椅子が大好き足と腰

初恋は相思相愛だったのに
堺市 奥 時雄

軽い恋などない事を知りました
神戸市 松井 文香

隅っこが好き父母もそうだった
鳥取市 夏目 一粹

願ひ事多すぎ消えた流れ星
神戸市 能勢 利子

散骨希望悪友の合言葉
弘前市 高瀬 霜石

人間が嫌いで向かうバチンコ屋
和歌山市 柏原 夕胡

人形と話して心傷つかず
鳥取市 岸本 孝子

書き初めに命と一字だけを書く
難煮餅二つ食べると昼は抜き
大阪府 坂 裕之

相談に結論持つてやって来る
失敗は自分の所為とやって知る
堺市 矢倉 五月

旅の本亡夫と折り目つけたまま
ドンドンヒヤラ元氣良いのは灯油売り
河内長野市 藤塚 克三

昔の駄菓子老人会は盛り上がり
お盛んなメールやりとりみな猫背
和歌山市 古久保和子

腰痛はいかがと風邪引きからメール
キャベツ半分こが前頭葉ですか

お金より一途に願う不老不死
豊中市 松尾美智代

私から小言を取ればすぐ惚ける
橋原市 居谷真理子

完敗だともに勝負してくれた
隠してるうちになくなつてた力
吹田市 木下 敏子

かさぶたも取れてすっきりお正月
あたらまのとしのはじめの救急車
篠山市 酒井 真由

正月は全国的に難煮の日
西宮市 藤本 直

故郷を偲ぶ難煮は母譲り
河内長野市 村上 直樹

そういえば新しい年だったのだ
三田市 上田ひとみ

年賀状途切れる頃にえべっさん
貝塚市 石田ひろ子

淋しさにめくり直している昨日
松江市 石橋 芳山

サヨナラを包んだ毛布抱きしめる
青森市 守田 啓子

周囲見て多数の方に挙手をする
吹田市 太田 昭

階段の同じ所で休んでる
貝塚市 吉道あかね

家系図のとこどころに独り者
三田市 堀 正和

遷宮のまねごと障子張り替える
鳥取市 岸本 宏章

気づいてねずつと貴男を見つめてる
河内長野市 穂口 正子

加齢とや背中ばかりが痒くなる
大洲市 中居 善信

老齡のボチの襟巻赤にする
藤井寺市 増井ヨシ枝

いっばいに花を咲かせているハート
香芝市 大内 朝子

お手本は石垣だらう相互扶助
田辺市 岡本 昇

オーナーのはつきりしない里の山
鳥取県 山下 節子

悪友に合わせ過ぎると妻怒る
大阪府 奥村 五月

夢が楽しみで冬の夜が短い
八尾市 高杉 千歩

問診票酒の量のみ虚偽記載
広島市 岸本 清

人並みが厳しいパソコンにスマホ
河内長野市 山岡富美子

T P P老農夫婦パチンコに
安来市 原 煩惱児

ゆったりの所作に育ちの見え隠れ
芦屋市 黒田 能子

讚美歌を教えてくれた姉が逝く
鳥取県 岩崎 和子

感情が進んでいてる当て字
堺市 村上 玄也

晴れてきたので口実がなくなつた
藤井寺市 鴨谷瑠美子

これ以上欲が抜けたら生きたらぬ
大阪市 笠嶋 惠美

おしゃれる欲がまだある大丈夫
東大阪市 北村 賢子

不眠症友はラジオの深夜便
高槻市 片山かずお

ルールから外れて不眠症治る
鳥取県 細田 裕花

適当にモテていて欲し好きな人
大阪市 高杉 力

防ぎたい肥満血圧認知症
京都市 榎本 宏子

表には出ないと老いの反抗期
松江市 三島 淞丘

手芸内職老眼不可と書いてある
京都市 高島 啓子

極上は手塩にかけてきた野菜
富田林市 山野 寿之

診療は安い美容院は高い
倉吉市 山中 康子

P U L Lとある扉も一度押してみる
大阪市 井丸 昌紀

豊かさも貧しさも慣れると怖い
鳥取市 前田 楓花

老朽化の僕に補助金まだ出ない
弘前市 吉川ひとし

いつの間にか小柄になっていたわたし
大阪市 大川 桃花

イデオロギーそこらに置いて酒を注ぐ
米子市 生田 和之

酔うまではしつかりとしておりました
岡山市 丹下 凱夫

カラオケは酔った時だけ好きとする
枚方市 松原 保

父忌日相思相愛母死亡
箕面市 広島 巴子

今年こそ今年こそはとまた今年
倉吉市 中村 毅

カラフルな錠剤並べ冬を越す
奈良県 渡辺 富子

スクワット鏡の中は誰でしょう
熊本市 杉野 羅天

新聞を括るネクタイたんと有り
寝屋川市 平松かずみ

思い出がねむる孤老の飾り棚
高知県 小澤 幸泉

正月に増えた二キロが臍あたり
羽曳野市 宇都宮ちづる

スイッチを探す間にシッコ漏れ
鳥取市 土橋はるお

楽しみの尻尾つかまえひとりゆく
防府市 坂本 加代

堺市 澤井 敏治
生きてゐるうちに聞きたい好き素敵

寝屋川市 籠島 恵子
とりあえず話相手のボランティア

枚方市 伊達 郁夫
段ボールハウスの下は高い土地

三田市 上垣キヨミ
おもてなし先ずは正しい箸使い

瀬戸内市 東横ますみ
巢を出るとおひとりさまの貌になる

弘前市 福士 慕情
検診の結果禁酒の封を切る

大阪市 佐藤 忠昭
正月も三日過ぎれば茶碗酒

鳥取市 倉益 一瑤
黒は黒きつぱり言えてよく眠れ

唐津市 坂本 蜂朗
海に空覚悟の程が試される

大阪市 柴本ばつは
自由行動しているような書道展

和歌山市 平田 元三
空洞化してる事さえ知らぬ脳

倉吉市 岡崎美知江
エンディングノート書き終え背を伸ばす

三田市 雑賀 一泉
寒いのに洗髪させる恋ごころ

大阪府 桑田ゆきの
髪アップうなじ艶めく初鏡

奈良市 辻内げんい
今でしよと娘の婚活に喝入れる

神戸市 富永 恭子
ただ一人だけでいいです婿に来て

羽曳野市 永田 章司
朝ドラの無い日曜日朝寝する

和歌山市 土屋起世子
初夢に亡夫といっしょ旅の宿

鳥取市 近藤 秋星
勢いよく小便が出るうれしさよ

西予市 黒田 茂代
長靴と言つてブーツに叱られる

塩竈市 木田比呂朗
返上をそろそろ視野に免許証

紀の川市 楠原 富香
良い姑予告してからやつて来る

和泉市 横山 捷也
薄氷つま先で割る待ち合わせ

三田市 今西 廣子
暮らし質素とブータンの母になる

三田市 多田 雅尚
汚染には孔子も怒る儒教の地

鳥取市 福西 茶子
テレビの部屋で夫のお尻に根が生えた

吹田市 野下 之男
王将を歌えば元氣大阪だ

大阪市 津守 柳伸
挨拶はそこそこにして先ず黙祷

海南市 堂上 泰女
散歩路に運動場を借りる冬

岡山市 藤成 操江
一万歩達成あすは休養日

鳥取市 吉田 弘子
老いふたりケンカが出来る大丈夫

大阪市 太田としお
偉い人には偉い母親偉い妻

加西市 金川 宣子
ゴム紐のズボンが招く肥満症

多摩市 大竹 良一
あちこちに壁があるから面白い

京都市 三宅 満子
ハネ駒も六まわり目はしとやかに

富田林市 肥山 一文
仏壇に供えたご飯夜食べる

奈良市 尾畑なを江
たんたんと進むかけがえない時間

つくば市 嶋本 喬
オバタリアン今やスタバが集会所

鳥取県 西谷 悦子
冬の陽が昇るそれだけで仕合わせ

高槻市 富田 美義
平坦な道に慣れすぎ息が切れ

西脇市 七反田順子
ピリケンさんタカジンさんは逝きはった

和歌山市 喜田 准一
鼻唄が消えて寂しい台所

共選欄

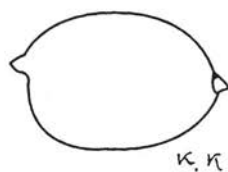
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 754句)



「それから」

竹 治

ちかし

選

それからを知るのは風とジョニーだけ
それからがあるから今が頑張れる
それからが戦いでした自分との
傘寿すぎそれから命神まかせ
七転びそれから運がつき始め
旧姓に戻り綺麗になりはった
それからはお昼寝しない兎さん
それからにはポリシー曲げぬ私です
八十路坂こえてやる気の捻子を巻く
安全をただ繰り返す机上論
十万年経って無罪となる魔炉
雨宿り暖簾の椅子に根が生える
満ち足りてそれから余白埋めるとす
ひと区ぎりつけてあしたの策を練る
果たした状ポストに入れてから勝負

大阪市 榎尾 奏子
鳥取市 西川 和子
吹田市 須磨 活恵
神戸市 山根 弘子
松江市 三島 淑丘
榎原市 居谷真理子
和歌山市 上田 紀子
和歌山市 堀 富美子
寝屋川市 岡本 勲
弘前市 高瀬 霜石
札幌市 小沢 淳
弘前市 富士 慕情
三田市 久保田千代
出雲市 小白金房子
和歌山市 柏原 夕胡

「それから」

大 内

朝 子

選

それからのがくらし彩る五七五
それからがあるから面白いこの世
乾杯のあとで挨拶してほしい
春からは少し節約しなくっちゃ
それからはお昼寝しない兎さん
言い足りぬことが背中に書いてある
それからのことを見ていたお月さん
蟹が出たそれから皆の会話消え
それからと言われてつまる一夜漬け
まず飲んでそれから先を考える
それから一人で生きる時刻表
ローン済みそれから金が貯まらない
それから記憶に無いと酒に罪
選ばれてそれから重い荷を背負う
百均で憂さ晴らしして米を研ぐ

大阪市 内田志津子
高槻市 片山かずお
堺市 奥 時雄
三田市 堀 正和
和歌山市 上田 紀子
枚方市 伊達 郁夫
札幌市 三浦 強一
河内長野市 藤塚 克三
つくば市 嶋本 喬
川西市 西内 朋月
鳥根県 伊藤 寿美
鳥取市 中村 金祥
八尾市 内海 幸生
高槻市 初代 正彦
犬山市 金子美千代

お開きとなつてそれから出る本音
 殻を脱ぐそれから仲間寄つてくる
 それからのわたしに向い風ばかり
 それからは少し緩めて妥協する
 褒められてそれからあとのブレッシヤ
 それからは金の話になり無口
 足ることを知つてそれから日が温い
 それからは笑ひばなしにして夫婦
 それからの話が酒でもり上る
 行き違いそれからずつと工事中
 それからの答見つけに旅に出る
 それからのことは忘れた振りをする
 それからの風はふたりに風いでくる
 それからは年越そばをひとり膳
 二者択一それから迷ひ深くなり
 汗流しそれから先は神任せ
 まず飲んでそれから先を考える
 それからの話になつて肩が凝る
 特秘法喋りたいけど喋れない
 それからの話は知らない事にする
 二人からひとりそれから強くなる
 褒められはしたがそれから敵も増え
 亡きあとも梅ほころんでます貴方

高槻市	初代	正彦
和歌山市	土屋起世子	
藤井寺市	太田扶美代	
今治市	渡邊伊津志	
藤井寺市	鴨谷瑠美子	
八尾市	内海	幸生
堺市	澤井	敏治
貝塚市	吉道あかね	
佐渡市	高野	不二
鳥取県	斉尾くにこ	
和歌山市	喜田	准一
大阪市	井丸	昌紀
大阪府	初山	隆盛
松江市	小川	注湖
堺市	遠山	唯教
三田市	北野	哲男
川西市	西内	朋月
府中市	藤岡ヒデコ	
豊橋市	藤田	千休
大阪市	板東	倫子
倉吉市	岡崎美知江	
茨木市	藤井	正雄
羽曳野市	徳山みつこ	

値札見てから失恋をした気分
 ひと区ぎりつけてあしたの策を練る
 検診の結果にジャンプする家族
 それからは言わぬ聞かぬで和む海
 真実を知つてそれから失語症
 それからは神様だけが知る伏せ字
 還暦を過ぎて自分の色で咲く
 それからが大変だった鬼瓦
 厄払いそれから妙に身が軽い
 争つてその後本音のおつき合い
 父母が逝きそれから故郷遠くなる
 のれん捨てネットで稼ぐ三代目
 結婚のそれから他人めく息子
 卒業の日までは親がみるからね
 それからを聴きたい耳にある火照り
 雨宿り暖簾の椅子に根が生える
 背信を許してからも無言劇
 倍返ししたそれからの無力感
 亡きあとも梅ほころんでます貴方
 一言の本音を吐いてから孤独
 それからを忘れたい忘れたくない
 踏み出せばそれからそれへ続くもの
 それからを見て欲しかった花の種

堺市	矢倉	五月
出雲市	小白金房子	
富田林市	関	よしみ
東かがわ市	川崎ひかり	
鳥取市	倉益	一搖
和歌山市	武本	碧
箕面市	出口セツ子	
松江市	松本	文子
広島市	岸本	清
富田林市	中井	アキ
藤井寺市	若松	雅枝
高槻市	原	洋志
宇部市	平田	実男
大阪市	坂	裕之
和歌山市	福井	菜摘
弘前市	福士	慕情
奈良県	渡辺	富子
茨木市	島田	誠一
羽曳野市	徳山みつこ	
和泉市	横山	捷也
大阪市	谷口	義
四條畷市	吉岡	修
出雲市	岸	桂子

恥をかきそれからまわり見えだした

一言の本音を吐いてから孤独

それから片目つぶってきた夫婦

それからことは聞かずにおく情け

それからと言つて聞かせて迷わせる

ひと目惚れそれから好きが一走り

それから時計の針は指したまま

それから語れば長い夜になる

それからことは神様しか知らず

それから笛に合わせて踊ってる

それからが大変だった鬼瓦

恋文のそれから先は迷い道

それからのは便りは風が持つてくる

雨止んでそれから老いが加速する

さようならそれからわたし立ち直る

一抜けてそれから長い雨期つづく

還暦を過ぎて自分の色で咲く

それからを見て欲しかった花の種

それから信用しない晴れた空

秀句

それからを待つてお地藏様になる

それから飛べない鳥になりました

それから一人で生きる時刻表

神戸市 井上 忠貞

和泉市 横山 捷也

和歌山市 北原 昭枝

堺市 村上 玄也

鳥取市 谷口回春子

米子市 池岡たけし

姫路市 古川 奮水

鳥取市 岸本 孝子

堺市 加島 由一

長岡京市 山田 葉子

松江市 松本 文子

玉野市 片岡 富子

京都市 清水 英旺

瀬戸内市 東横ますみ

京都市 都倉 求芽

和歌山市 福井 菜摘

箕面市 出口セツ子

出雲市 岸 桂子

京都市 高島 啓子

佐賀県 真島久美子

藤山市 酒井 真由

鳥根県 伊藤 寿美

終活のそれから長い老介護

無事廃炉出来て始末に五十年

安全をただ繰り返す机上論

果し状ポストに入れてから勝負

お話の森それから終わらない

褒められはしたがそれから敵も増え

袈裟斬りの一言今も後をひく

散つてから口説かれてる百合の花

その後は黙つて強く抱きしめる

七転びそれから運がつき始め

それからのはなんにも言わぬ母

それからを笑いはなしにして夫婦

そして今折りに似る恋ごころ

それからをうすむらさきにして綴る

足ることを知つてそれから日が温い

それから信用しない晴れた空

断捨離のそれから迷い無い暮らし

それから過去を吸い取る紙おむつ

それから騒ぎは知らぬ遺言書

秀句

陣痛の長い闇から呱呱の声

最善を尽くしそれから神頼み

八十路坂こえてやる気の捻子を巻く

寝屋川市 平松かすみ

三田市 北野 哲男

弘前市 高瀬 霜石

和歌山市 柏原 夕胡

樺原市 安土 理恵

茨木市 藤井 正雄

紀の川市 宇野 幹子

青森県 松山 芳生

大阪市 若本 安代

松江市 三島 淞丘

和歌山市 玉置 当代

貝塚市 吉道あかね

大阪府 初山 隆盛

寝屋川市 森 茜

堺市 澤井 敏治

京都市 高島 啓子

大阪市 小谷 集一

藤山市 石田 久子

松山市 宮尾みのり

河内長野市 木見谷孝代

鳥取市 春木圭一郎

寝屋川市 岡本 勲

「探る」

山田耕治選



探らずに訊いてくれたら答えます
月探さかぐや姫には会えたかな
心配の種を検査のMRI
そろそろかいつもの場所を路の臺
人間を探索る眼で見えるサルのボス
頻繁に茶を出し部屋の様子見に
宇宙探査機宇宙にゴミを置いてくる
人間の正義と情を探索る神
暖味に答え相手の肚探索る
古都の春探れば梅の香に出あい
鈍行であの頃探索る老いの旅
掘り当てて時代を探索る刷毛の先
探索るより話すのを待つ母だから
ご機嫌で帰ればポッケチエツクされ
思い出を探索る故郷のひとり旅
宝石展懐探る目が迎え
探索るより暖かい目のおもいやり
問い詰める今日はノンアルコールです
手探りの人生ほんま阿弥陀籤
車間距離適度探っている親子

櫻原市 居谷真理子
西宮市 福島 弘子
唐津市 山口 高明
鳥取市 吉田 弘子
弘前市 福士 慕情
河内長野市 松岡 篤
大阪市 古今堂蕉子
三田市 尾崎 一子
堺市 奥 時雄
吹田市 木下 敏子
和泉市 横山 捷也
大山市 関本かつ子
堺市 矢倉 五月
三田市 福田 好文
松江市 三島 淑江
米子市 後藤美恵子
神戸市 松井 文香
佐賀県 真島久美子
河内長野市 穂口 正子
箕面市 出口セツ子

五感より第六感で探り出す
ポケットから名刺出て来て「これは何」
なぜなぜと親困らせる子の疑問
やめなはれ小石を投げて探るクセ
ポケットを探ってみたが穴がある
やんわりと肚を探りにきたお酌
一病のもとを探って出た余病
裏探る癖が治らぬ痛い傷
事故起きてそれから非常口探る
良い天気ですなと腹を探り合い
内視鏡悩み事など探れまい
恋人も居そうにないな帰省の子

佳

同窓会若い秘訣を探りあて
石投げて池の波紋を読んでいる
天国行き列の尻尾はどこですか
夫婦です探る物など有りません
探り合う愛へすねたり甘えたり

人

一人では駄目ねと探り入れてみる
泣けば何故笑えば何故と探られる

天

三十分歩いて春を五つ六つ

軸

逆らってほんとの気持知りました

大阪府 高木 道子
西宮市 足立 茂
松山市 栗田 忠士
神戸市 富永 恭子
大阪府 羽山 隆盛
藤井寺市 太田扶美代
大阪市 岩崎 公誠
大山市 金子美千代
鳥取市 夏目 一粋
大阪府 高杉 力
大阪府 津村志華子
三田市 堀 正和

神戸市 山口 美穂
札幌市 小沢 淳
高槻市 原 洋志
弘前市 吉川ひとし
香芝市 大内 朝子
米子市 吉田 陽子
大阪市 板東 倫子

羽曳野市 徳山みつこ

「ポリシー」

福 西 茶 子 選



結局は何でもノーのへそ曲り
ポリシーは不動時刻は流れても
カタカナに社名を変えて生き残る
うす汚れたポリシー洗う空の青
少子化のポリシー変えな国滅ぶ
ポリシーを言うてられない紙おむつ
ボトル一本空けてポリシー狂い出す
ポリシーの底に流れる反戦歌
テーブカットの人の数だけあるポリシー
ポリシーのないコマースヤル嘘寒い
私であるため振れぬ首がある
ポリシーが空回りする野次り合い
ポリシーを曲げない肩が重くなり
一番に出社し一番に帰る
ポリシーを捨てた老舗の食偽装
ポリシーは無効になって金の前
主張はないならぬことはならぬだけ
ポリシーもやさしく包む紙オムツ
舌の根が乾けばポリシーは変わる
ポリシーを賀状に書いて支援乞い

西宮市 足立 茂
三田市 上垣キヨミ
大阪市 柴本ばつは
奈良県 渡辺 富子
大阪市 奥村 五月
香芝市 大内 朝子
松江市 三島 淞丘
鳥取県 細田 裕花
四條畷市 吉岡 修
今治市 渡邊伊津志
大阪市 板尾 奏子
弘前市 福士 慕情
西宮市 福島 弘子
可見市 板山まみ子
米子市 生田 和之
松江市 石橋 芳山
河内長野市 大島 友子
鳥取市 大前 安子
堺市 澤井 敏治
河内長野市 松岡 篤

ポリシーもお金と票ですぐ変り
ポリシーのない政治家が離党する
あきらめちゃ駄目と楽天手本見せ
ポリシーを持たず末席温める
貧富の差アベノミクスでより開く
ポリシーを持てば軍靴の音がする
身の程を生きて他人には媚びぬ自負
人生の縮図を見せる青テント
ポリシーが欲しい猫背になってきた
隣国に負けぬポリシー持つ総理
アルミ缶ポイツポリシーは持たぬ主義
鼻濁音聞いてポリシー崩れ落ち
佳
政策は不得手金策なら特技
方針も手立てもあるが資金難
ポリシーが合ってジョッキを追加する
平和ボケしてる間に兵になる
朝採りの野菜だけ売る露天商
人
ポリシーは問わず神様仏様
地
ポリシーが邪魔で笑顔がつかれない
天
国会でポリシー捨ててボクシング
軸
梃でさえ動かぬ芯を抜く笑顔
西宮市 藤本 直
鳥取市 岸本 宏章
三田市 堀 正和
和歌山市 磯部 義雄
三田市 福田 好文
札幌市 小沢 淳
東大阪市 北村 賢子
大阪市 榎本日の出
橿原市 居谷真理子
東大阪市 佐々木満作
紀の川市 宇野 幹子
堺市 奥 時雄
豊橋市 藤田 千休
塩竈市 木田比呂朗
岐阜市 平野あずま
鳥取県 竹信 照彦
高槻市 初代 正彦
出雲市 竹治かし
藤井寺市 太田扶美代
倉吉市 牧野 芳光

「じわじわ」

川 崎 ひかり 選



アベノミクスじわりとも来ぬありがた味
薄紙を剥がすじわじわ回復期
じわじわと言葉失ってくる上司
じわじわと点いた火だからまだ冷めず
意固地さがじわじわ世間遠ざける
涙腺を愛がじわじわ攻めてくる
じわじわと効いてくるのが妻の愚痴
じわじわと歩幅小さくなっている
聞き上手ボクの本心あぶり出す
気が付けば包囲されてた我が陣地
毒のある言葉じわじわ効いてくる
ライバルの近づく音が聞こえ出す
後悔がじわじわとくる二日酔い
じわじわと妻の領土は広くなる
アラフォーの目尻こうしちやいられない
知らぬ間にじわり年金減っている
外堀をじっくり埋めた下心
あの時の拳じわじわ効いてくる
無駄な抵抗らしいじわじわ朱に染まる
じわじわと覆いかぶさる放射能

四條畷市 吉岡 修
香芝市 大内 朝子
鳥取市 夏目 一粹
羽曳野市 吉村久仁雄
羽曳野市 藤原 太子
鳥取県 齊尾くにこ
鳥取市 谷口回春子
熊本市 岩切 康子
高槻市 富田 美義
神戸市 白川 淑子
箕面市 出口セツ子
鳥取市 吉田 弘子
堺市 澤井 敏治
唐津市 坂本 蜂朗
佐賀県 真島久美子
三田市 北野 哲男
豊橋市 藤田 千休
和歌山市 柏原 夕胡
和歌山市 武本 碧
豊中市 松尾美智代

褒められてじわじわ湧いてくる自信
じわじわと姑と嫁のよい勝負
物言えぬ国にじわじわなる日本
国民を秘密保護法追いつめる
盗み酒じわじわ効いて回る舌
じわじわと膝を崩した下心
じわじわと母が童女になってゆく
じわじわとわたしの彩が褪せてくる
二次会の酒で聞きたい事がある
じわじわと効いてきました袖の下
じわじわと夢が膨らむ母子手帳
じわじわと陣地をふやす嫁の地図

佳

人

地

天

軸

池田市 上山 堅坊
大阪市 板東 倫子
可見市 板山まみ子
奈良市 渡辺 富子
香南市 桑名 孝雄
高槻市 富田 保子
茨木市 藤井 正雄
藤井寺市 太田扶美代
佐渡市 高野 不二
和歌山市 上田 紀子
和歌山市 福井 菜摘
大阪市 伏見 雅明
京都市 榎本 宏子
鳥取市 福西 茶子
弘前市 高瀬 霜石
河内長野市 山岡富美子
鳥取市 岸本 孝子
鳥取市 岸本 宏章
大阪市 古今堂蕉子
橿原市 居谷真理子

初級教書

題一 コマーシャル

山口 光久

説明句・報告句は「駄目だ」と言われている。それは句が単なる説明・報告ですと、「ああ、そうですか」で終わってしまい何の感動も与えないからです。

しかし、川柳はある意味で「何」かの説明や報告であるのも事実です。でも、単なる説明・報告ではありません。

ある事実を平明に説明・報告すること、何らかの意図をもって一つの事実を切り取り、敢えてそのままを提示する技法とは異なるものです。

「十本の指がたしかに今日もある」

言葉も上で当たり前の事実過ぎませんが、単に指を説明・報告しただけではない事は「たしかに」で感じ取れると思います。

素直に事実の説明・報告ではなく、事実に対する作者の心の動きを表現するようにしたものなのです。

題が「コマーシャル」ということで範囲が狭かったのか、句が片寄ったのか同想句が多かったように思います。同想句は相打ちで共に没になります。

【添削】

次の五句は説明句、報告句の域を出ません。「ああ、そうですか」「そうですね」で終わってしまいます。作者の心、気持を詠みましよう。

原 コマーシャル聞いて豚骨買いました 紀雄

添 コマーシャルに釣られ豚骨買い過ぎた

原 チャンネルを変えてもCM流してる 亜希子

添 キッチンでCMソング口ずさむ 武人

原 キッチンでCM聞いてリズムカル

原 コマーシャル誘われ買った高いもの 回春子

添 コマーシャルに釣られて買った高価品

原 肌のシミ広告のようといません (石)久子

添 コマーシャルのように取れぬ肌のシミ

次に同想句を挙げてみます。句としては纏まっても相打ちとなり共に没です。

原 知らぬ間に口遊んでたコマーシャル 満知子

原 知らぬ間に口ずさんでるコマーシャル 恵

原 無意識に口ずさんでるコマーシャル 克三

原 コマーシャルソングついつい口ずさむ 友子

原 トイレ立つ合間流れるコマーシャル 義雄
添 トイレちゅうずつと流れるコマーシャル
原 コマーシャルトイレ行くなり今でしょ 一泉
下四字になつています。

添 コマーシャルトイレ行くのは今でしょう

原 コマーシャルお茶の入替え丁度いい 安子

添 コマーシャルちよとお茶でも入れましよう

原 コマーシャル始まり台所に立つ きつこ

添 コマーシャル始まりちよと台所

原 CMで夢を買ったが夢やぶれ モモ

「夢」「夢」とタぶるのは十七音字の短い

文の中でもつたないです。

添 CMで夢を買ったが当てはずれ

原 しつこいとコマーシャル見て腹立てる 治子

添 コマーシャルのしつこさついに腹が立つ

原 コマーシャルに侵略される我が家計(燭)節子

「侵略」が適当かどうか、ほかに言葉を探してみましよう。「我が」は不要。

添 コマーシャルにいつも踊っている家計

原 コマーシャル化粧の上手い品ばかり 心咲

下五が適当かどうか考えましよう。句は

下五で決まると言われています。

添 コマーシャル化粧の上手い人に酔う

原 禁煙のコマーシャル見てふかしてる ミヨノ

添 禁煙のコマーシャルでは止められぬ

原その薬気休めならと医者が言う 和之
題のCOMマシヤルが読み取れません。

添COMマシヤル信じ込むなと医者が言う
原COMマシヤル分つちやるけどつい手にし 喬

添COMマシヤルは半信半疑それでいい
原大家族テレビCOMマシヤルでてみたい(山)久子

添COMマシヤルでテレビに出たい大家族
原民放の大事大事なCOMマシヤル 松風

添民放の金蔓ですよCOMマシヤル
原自信有りだからしないとCOMマシヤル 孔一

添売れ筋はCOMマシヤルなど出しません
原いい場面COMマシヤルでて夢折れる 勝治

添いい場面で邪魔をしましたCOMマシヤル
原ドラマ佳境さあCMの独壇場(高)道子

添ドラマは佳境さあCMの出番です
原新年に急かせる雛のCOMマシヤル(前)洋子

添正月に雛人形のCOMマシヤル
原CMで長所了解リスク謎 絹枝

添CMで長所を並べリスク伏せ
原新聞の一面真っ赤蟹と肉 洋一

添広告の真っ赤な蟹が呼んでいる
原COMマシヤル熱中の場に水をさし こそえ

添COMマシヤル佳境に入ると水をさす
原土曜日の朝刊チラシ抱かされる 狸月

添朝刊にチラシ一杯はち切れる

原値引中親子でくり出す牛どん屋 晶子
中八です。「牛どん屋」？牛井屋では。
添広告に惹かれくり出す牛井屋
【少しの修正で良くなる句】

原ドラマ佳境宣伝早く止めてくれ 孝明
添ドラマは佳境宣伝早く止めてくれ

原COMマシヤルこそとばかりはめている 英男
添COMマシヤルこそとばかり執拗に

原いいところどこで何でやCOMマシヤル 文香
添いい場面どこで何でやCOMマシヤル

原CMにほれてサブリを申し込む 開子
添CMを信じてサブリ申し込む

原COMマシヤルどうりであれば医者いらぬ 律子
添COMマシヤル嘘でなければ医者いらぬ

原サブリメントCOMマシヤルほど効果なし 忠貞
添サブリメントCOMマシヤルほど効き目ない

原サブリメント効き目あるなら医者要らず(中)修
添サブリメント効き目信じて医者行かず

原COMマシヤル手が込んでいていいほろり(徳)正子
添COMマシヤルの巧妙さにはいいほろり

原COMマシヤル信じて飲んで効く人も 加代
添COMマシヤル信じて飲めば効く人も

【入選句】

COMマシヤル丁度トイレのタイミング 利子
今でしようCOMマシヤルの間茶を入れる 恭子

COMマシヤルあいだあいだに家事こなす 一文
CMの合間にドラマ見せられる 洋志
ほんとかな疑つてみるCOMマシヤル(株)玲子
ぼつねんと見てるテレビのCOMマシヤル 凱柳

音静かそんなCMあつていい(高)弥生
神の座すお伊勢参りもCOMマシヤルのり子

COMマシヤルに乗って健康器具溜まるひろ子
COMマシヤルその気になって美肌液(富)恵子

ビデオではCOMマシヤル消し快適だ 紀美恵
COMマシヤル料も含んでこの値段 元三

COMマシヤルないから払う視聴料 ひとし
【佳句】

CMソング師走の風に乗ってくる(見)温子
ゼッケンを占領してるCOMマシヤル 富香

COMマシヤルソング聴いてる冬の窓 昭枝
その先が知りたい時にCOMマシヤル(渡)修

ドラマより面白かったCOMマシヤル 国和
【今月の推せん句】

ひとり一個本日限り急がせる 足立つな子
COMマシヤルは買気を起させ急かせますね。

佳境ですも少し待つてCOMマシヤル 内田志津子
ドラマが佳境に入る寸前、はつとCOMマシヤル

ルが流れます。少し待つての気持分ります。

【私の句】

わたくしの情報源はCOMマシヤル

川柳塔鑑賞

同人吟 黒田能子

— 2月号から

秋が好き淋しいけれど秋が好き

春城年代

私も秋が好きです。旅をするのも、ちよつと詩的になるのも、あのひんやりとした風を感じてこそのことです。

世界遺産になったかあさんのお煮しめ

古久保 和子

和食が無形文化遺産になりました。日本の誇りです。母のお煮しめはそれにも勝る美味しさです。

またひとつ赤い錠剤増えて 冬

木本 朱夏

今までも飲んでゐる薬のうえにまた、一錠増えてしまった。赤い錠剤……。体の厳しさ、冬の厳しさを感じます。

忙中の閑それが見付からないのです

安土理恵

忙しい忙しい日常にも閑を見つけて、好きなことをして自分を取り戻したいのに、その閑を見付けられない焦り。

早春の風にハートの丸洗

大内 朝子

ハートの丸洗いができれば最高！それも爽やかな早春の風で、こころの中をすっきり洗えるなんてなおさらです。

喜びを伝えたいのにひとりの日

牛尾 緑良

この嬉しさを家に帰ってすぐ聞いてほしいのに、今日はひとりっきり。淋しくてつまらない。同感です。

古着売り古着を買ってリサイクル

竹村 紀の治

古い服をせっかく引き取ってもらったのに売られている古着が気に入って、つい買ってしまった。それもリサイクルかな？

とりあえず今日は遊んでおきました

谷口 義

思うことやする事も色々あるが、まあいか今日は楽しく遊ぶことにしよう。ケセラセラ、明日のことにしよう。

休んだらそのまま老けてしまいそう

鈴木 いさお

何もすることが無くなったらきつと老け込んでしまうでしょう。ずっと続けて何時までも若々しくいて下さいね。

一人旅してます窓いっぱい開けて

松山 芳生

のびのびとひとり旅をしています。心の窓も全開にして解き放ちます。さぞリフレッシュすることでしょう。

豊かさが私をなまけものにする

堤 檀代

今の世は豊かすぎ、掃除、洗濯、料理みなスイッチポンとチンで済みます。昔に比べればとつても楽になりました。

忘れましたと正直な顔が言う

山本 希久子

歳と共に物忘れが多くなってきました。正直な顔が忘れたと言っているのですから信じることにしましょう。

忙しくても新聞だけは目を通す

初代 正彦

忙しい時でも新聞だけは読みます。特に朝刊は読まないで、忘れものしたよう一日落ち着きません。

ありのままの自分を出せば気が軽い

松尾 美智代

家族の前ではありのままの私。ありのままの私を外でも出そう。そうすれば、気持ちが軽くなるでしょう。

十歳ほど歳を値切つてみたくなる

海老池 洋

歳はとりたくない。何時までも若くありたいものです。値切れるものなら五歳でも十歳でも値切りたいですね。

昨日という過去にやつぱり縛られる

小林 小

昨日のことは一晩眠り忘れてしまいたいのに、そうはいかない。今日もそれを引きずって考えてしまうわたし。

終章は誰にでもくるピーヒャララ

太田 扶美代

終章は何時かは誰にでも訪れます。それまで取り越し苦労などせずに、楽しくピーヒャララと暮らしましょうか。

今はもう飛べないけれど自由の身

鴨谷 瑠美子

子育ても終え自由な時間が持てるようになった。でももう若くはない。元気に今は飛べないのです。

ゆつくりでいいよと催促されている

堀 正和

返してくれるのはゆつくりと、何時でもいいよと言ってくれている。でも本当はすぐ返してほしいのでは？

ごはんですよ誰かに呼んで貰いたい

土屋 起世子

毎日の食事作りは主婦にとつて大変です。男性も料理をする時代、たまにはごはんですよ！呼んでくれませんか？

物忘れ笑いころげるうちはよし

福井 菜摘

物忘れも深刻になってくると困りますが、なあんだ忘れてた、と笑つてすまされる内は大丈夫でしょう。

ぬるま湯に慣れて決定打が打てぬ

石谷 美恵子

毎日をなんとなくぬくぬくと暮らし、これといった冒険も新しいことにも挑戦できないが、平凡を良しとしよう。

お元気ですか遠い青春振り返る

細田 裕花

お元気ですかと、懐かしい友に聞いているのか、今の私は元気だろうかと自問しながら、青春を振り返っています。

苦も楽もたつぷり食べたい笑顔

伊藤 玲子

苦しいことも楽しいことも経験してきたからこそ笑顔です。温かく私のこころも包みこんで欲しいものです。

裏切らぬ朝の鏡を拭いている

岸 桂子

鏡は正直に素の私を写します。決して私を裏切りません。だから今日も恥ずかしい暮らしましょう。

決着は無口な人のひと言で

岸 清

何時もは口出しせずに黙つて聞いているだけ。その人がここぞという時のひと言で、やつと決着がつかしました。

心まで素つびんにする里の風

平田 実男

ふる里は素直な自分になれる処。飾らない昔の私に戻る処。ここらまで素つびんになれる里の風は清々しい。

夕焼けと握手あしたは晴だろう

小川 てるみ

平穏に今日一日を終え夕焼けが美しい、明日もきっと晴れ晴れと、素敵な一日に。夕日と約束の握手したのでしよう。

水煙抄鑑賞

—2月号から

早川 遡行

ひらめかぬ時は歩幅を変えてみる

栗田 忠士

そう、行き詰った時は歩幅を変えて見るのも手である。同じことを繰り返していつは何時までも前へは進まない。窮地は自分で切り開いていくものである。

母はいつ起きて寝るのか謎である

東 楨 ますみ

朝目が覚めると母がいてご飯ができてゐる。そして家族が寝るまで母さんにはやるのがいっぱいある。いつ起きていつ寝るのか、家族には謎である。

引き潮がむき出しにする傷の痕

神 野 千恵子

潮がひいて、今まで見えていなかった崩れた岸壁や養殖いかだの残骸が、津波の凄まじさをまざまざとむき出しにしてくれる。人間の驕りを戒めるかのように。

住みにくい世でも頼りは両隣

有 澤 嘉 晃

遠い親戚より近くの他人、と言うことわざがあるように、いざという時、頼りになるのは両隣や親しくしている近所の人たちである。

—遠水は近火を救い難く、遠親は近隣に如かず—(明心宝鑑)

ふだんの近所付き合いがいかに大切であることかの戒め。

瘡蓋がやさしくふさぐ僕の過去

藤 田 武 人

過去を許せるになるまでには、長い年月が必要である。

禁酒より僅酒の方が難しい

田 邊 浩 三

そりゃそうだ。禁煙も禁酒も挑戦したものにしかその苦しさは解らない。それだったら量を少なくすれば、と他人は言うけれどそんな簡単なものじゃない。

ふくしまに白いきれいな雪が降る

助 川 和 美

フクシマだからこそ白い雪も句になる。痛ましい事故を思えば、そこに降る雪はことさらに白くきれいにも見える。

年始め笑顔で開く一ページ

近 藤 治 子

笑う門には福来たる。子や孫に囲まれて過ぐす三が日。みんな健康で、笑顔で迎えられたことが何より嬉しい。

買物物は親の財布について行く

辻 村 ヒ ロ

次の世は無口な妻をめとりたい

岡 本 勲

恨みなし夫に貰った風邪だから

安 本 美 喜

思わず笑ってしまうユーモアには何んの説明もいらぬ。近江砂人に、—佳句佳吟一読明快いつの世も—という句があり、まさにその通りである。

湯たんぼのお陰気持も暖かい

小 松 紀 子

湯たんぼの暖かさは電気製品のそれとは違って、心まで豊かにしてくれるほのほのとした暖かさである。

信念が無いので何時も振りかえる

吉 野 いさお

疑心暗鬼で生きてきた自分への、自嘲の句なのだろうか。男たるもの、前を向いて威風堂々と歩いていけたらとも思う。



貴重な記録「合同句集」(2)

前号では10年ごとに川柳塔社が発刊している合同句集の重要性について記しました。そして、平成6年の第3集に参加していたながら、平成16年の第4集には参加できなかった先輩たちとその作品をご紹介します。

今回は、その平成16年の合同句集を読み直しながら、今年発刊する第5集「九十周年記念合同句集」には参加できない方々とその作品を振り返ってみます。

まだ成れぬ本の匂いのする人に
ゴミ出してしばし鳥とにらめっこ
生きざまを裁かれながら生きている
同じとこ回る自分に気がつかず

鍋奉行与力同心従えて

蜘蛛が巣をはる高からず低からず

十年日記いくたり人と別れしか

のんびりと明日の事は考えず

変なこと言うてる内はまだ死なん

薫風先生の作品は16頁に掲載されています。先生は多くの句集を上梓されていますが、このように自選された15句を見

直しますと、また違った趣があります。

紫香先生の句を拝見していますと、塔まつりの帰路、土橋

さんと尼崎市のデューサービスにお邪魔して、ご一緒にお茶

を頂戴したことを懐かしく思い出しました。

尚士さんは平成19年の「路郎賞」を受賞され、平成20年の

橘高 薫風

黒川 紫香

穴吹 尚士

阿萬 萬的

石森 利昭

小池しげお

田中 正坊

寺井 東雲

西田柳宏子

全日川鳥取大会の宿で斃れたこと。萬的さんの温厚ではにかんだような笑顔、利昭さんのダンディーな姿、しげおさんの朗らかな声と親しみやすい笑顔などを思い出します。

また、正坊さんには或る漢字の遣い方についてご指摘いただいたこと。堺川柳大会の度にお世話になった東雲さん。頑固親父のイメージでありながら人情深く、手作り細工を下さった柳宏子さん等々、皆さんと語り合ったのが、まるで数日前のように懐かしく思い出されます。

まだたくさんおられるのですが、このように振り返りますと、男性ばかりでちよつと驚いています。これは、私が見知りするため、親しくお話しさせていただいたのが男性が多かったということ、そして、女性に比べると男性の平均寿命が短いということもあるでしょう。もしも、私が10年後の第6集に参加できなかった場合、女性の皆さんから思い出していたくためにも、今後は勇気を出してご婦人とも親しくさせていただかなければ、と思っているところです。

ともあれ、今年は第5集となる「川柳雑誌・川柳塔創刊九十周年記念合同句集」を発刊することになっています。多くの皆さんが川柳に取り組んできた証しとして、この記念誌に15句を記してくださいますようお願い申し上げます。

・ 締切 平成26年4月10日(木)

・ 体裁 B6判・上製本・八〇〇頁(予定)

・ 参加費 五千円・掲載一人15句(自選)

案内書(申込書)をお持ちでない方は、本誌奥付けの「川柳塔社」にご連絡ください。振替用紙と共に送ります。



追悼

徳田ひろこさんを悼む

上田 宣子

九月に肺の検査で入院され、そのまま入院治療をされていた徳田ひろこさんが急逝されました。

お見舞いに伺った折にはお元気で、熱も落ち着いてきたと話されて、退院も遠からずと安心して居ましたので、訃報を受けた時には耳を疑いました。

ひろこさんは、うぶみ川柳会創立の時から会員で、平成十年から平成二十年まで副会長として会報の編集、会の運営への心配りとともに、近隣の大会や他川柳会への交流も熱心で、自分も行くからとアッシー君をしてくださいました。

川柳塔の同人になられたのは、私と同じような時期だったと思います。

中途半端な私と違ってきちんと投句されていましたが、何時の頃からか投句を休んで居られたようです。

ひろこさんは、日常の暮しの中で見たこと感じたことを、誰にでも解る言葉で表現されて、一見平凡なようですがとても味わい深い句になっています。

また、ご家族を大切にされ、しっかり家庭を守りながら生け花の先生をして居られました。

表札の三代いつも東向き
派手な音たてて陽気な台所
劳いの台詞がこだまする館
秒針をしばし忘れる花鉢
大輪の菊も野菊も同じ秋

詩と華に凝ってお庭の草繁る

そして、好奇心も強く川柳も旅行も地域活動も人一倍努力を惜しまない頑張り屋さんで、眩しく頼りになる存在でした。

誘い出す友あり旅も賑やか
エッフェルと太郎を天秤にかける

三・五ユーロの水でする食事

こざっぱり生きる雑巾縫っている

外は雨目を覚まさない文机

やわらかな骨です風のふくまに

平成二十年の夏に脑梗塞をされて、右手、右足が不自由になりましたが、頑張り屋さんを発揮され川柳はパソコンを、歩行には杖と、リハビリに励まれながら会への心遣いを忘れないで佳吟を発表されました。

脳回路寸断ししばし冬ごもり

病院の窓に潤んだお月さま

姥捨て山にも敬老会がある

九死超えさあてこれから恩返し

響きあう友ありいのち深みどり

失敗はブルンと拭うことにする

笑わないポストに春の種を蒔く

ご不自由になられても前向きに生きられたひろこさんを、けっして私達は忘れません。

これまで、言葉では言い尽くせない程お世話になりました。

本当に、ほんとうにありがとうございます。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌



追悼

大石あすなろさんを偲ぶ

小林 妻子^{つまこ}

下さる先生、よき先輩よき柳友に恵まれた賜物と感謝しております。これからも人間陶冶の詩として精神の向上に心がけたいと願っております。

川柳大原に発表された最近の句を少し紹介してみます。

言い訳を重ねて霧を深くする

ジェラシーという感情をそのかす

核心に迫る空気がピンと張る

生臭い噂に風もさわぎ出す

背伸びした本はそのまま積んである

黙々と明日に向かって這うて行く

天高しからりと揚がるカキフライ

新聞のチラシ見ながらベダル踏む

書き溜めた川柳のメモ底をつき

病床で寝たまま作ったあすなろさん最後の句です。兼題も最後まで投句してくれました。大石家は高野山真言宗で霊園もありますから、いずれ川柳塔碑にも合祀されるでしょう。

鏡静院貞潔麗雅大師
平成二六年一月三日 没 享年八二

あすなろさんさようなら。 合掌

大原川柳社は、本田恵二郎師や白岩文衛師、土居耕花師たちの華やかな時代が続き、女性たちも次々と参画してくれました。川柳塔の岡山県唯一の柳社となり、矢内寿恵子・山本玉恵・大石あすなろ、福原悦子そして私、妻子も加わり平成八年頃には、全員同人となり、毎年のおめでとう会にも出席していました。

また四国をはじめ各地の大会にも精力的に参加。女性陣は各地で受賞を重ね、「大原川柳社」の名も有名になった頃から、文衛師、耕花師、近いところでは矢内さんとも亡くなり、段々と淋しくなってきました。過疎地の後継者もなく、存亡の時を少人数で支えていましたが、今また肝臓癌に斃れた大石あすなろさんを見送ることになり、途方に暮れているところです。

あすなろさんは町内の老人たちを集めて「万年青川柳」のお世話や、生花教室などもひらき、また文衛師の作った「だるま川柳会」にも出席してくれました。

平成十二年度・路郎賞を受賞。

四面楚歌壁にもあった非常口

ストレスの音で折れてるシャープペン

まだ女絵になりたくて拗ねてみる

あの時を静止画像にしてみたい

いつからか私の真似をしない影

虚と実を混ぜて流れは渦になる

朱の絵の具女きれいに過去うめる

策士家にもなれずこつこつ石を積む

受賞の言葉は「驚き!!驚き!!……二千年という節目の年にこんな大きな賞が戴けるなんて感無量です。いつも温かく指導して



色景色もむお津軽の石霜瀬高

奇数月の連載になります。

「ウマ年にトラ年の話」の巻 ②〇

東京オリンピック決定に、浮かれてはいられない。

まずは、4月からの消費税アップ。そして、TPP。韓国との確執。中国の横槍。沖縄の基地移転問題などなど。まさに「前門の虎、後門の狼」状態だ。

僕がこの言葉を知ったのは、小学生の頃だった。

この世で一番強く美しい動物は虎だと確信していた僕は、この格言にいたく感動したのだった。

虎が相手では勝ち目がない。こういう状況になったらひとまず引き、搦め手へ回り、狼と闘いながら活路を開き、隙を見て脱出をここらみる。これが正しい戦略だろうと、子ども心に——今年のNHKの大河ドラマの主人公・黒田官兵衛のような——軍師になったつもりで考えた。

中学生になって、これは比喩なのだとハタと気づいた。なにも素手で闘うわけではない。こっちは武器を持っているわけだ。ここは、一か八かだ。虎をできるだけ引き付け、至近距離から眉間を狙う。危険だがそれに賭けるしかない。冷静に考えると——戦いやすそうな狼こそ、実はやつかい。狼を鉄砲や刀で2、3頭やつつけたところで、敵は群。大群だ。必ずこちらが負ける。

こういう危機に際しては《前門の虎》に真つ直ぐ向かって行つてこそ勝機がある。川中島の上杉謙信のように、関ヶ原での薩摩・島津の中央突破の時のように——活路が開けるのだと、中学生の僕は悟った（らしい）。

以来、僕は今日まで、決してトラブルから逃げずに生き

てきた（ような気がする）。この格言のお陰で。

小学校の高学年の時。帰り道、突然、3人組に襲われた。いきなり眼鏡をふっとばされた。その時は、僕を囲んだ左右の手下2人には目もくれず——なにせ眼鏡がないので——正面のボス（らしき奴）に、猪突猛進、持っていたスツク袋をグルグル振り回し、突っ込んで行った。

僕の素早い動き（？）に、ボスは突っ立ったまま、まともに顎でスツク袋を受けた。結構勢いがついていたら、手ごたえは十分。彼は、まるで東映時代劇に出てくる悪党の親玉みたいに「退け！ 退け！」と引き上げて行った。何を言いたいのか、もうお分かりですね。

僕は、弱虫で泣き虫だったけれど、ちゃんと《前門の虎（ボス）》《向かって行つたからよかったのだ、きつと》。もし、左右のどちらかの子分に向かつて行つていたら、すぐに挟み撃ちに合い、いためつけられていただろうと、今にして思う。それから40年ほど過ぎた。

とある二次会でのこと。前々からあんまり好きではない男が、僕の真向かいに座った。いきなり彼がこう言った。「高瀬さん。アンタ、昔、小学生の頃、襲われたことがあったろう？。実は、アレ、俺がやったことなんだ」と告白し、謝罪するではないか。僕は思い出すまで少し時間がかったが、思わず、大声で叫んでいた。

「エッ？ あの子キョーな奴がお前か」と。

彼は、それから1年ほどしてから（50歳を少し過ぎた頃）がんで死んだ。死ぬ前に懺悔しておきたかったのだろうか。2014年。新年を迎えて、さあ、どう生きようか。

民族の詩歌 (21)

―内田百閒のユーモア

三好 専平

漱石の弟子は、芥川龍之介をはじめ多士
濟々で、阿部次郎・阿部能成・久米正雄・
寺田寅彦・中勘助・野上豊一郎・和辻哲郎・
内田百閒など。百閒は、『漱石全集』のた
めの『漱石文法』で知られる。

もともとドイツ語の教師で、謹厳実直、
コワイ先生であった。ところがその実、酒
の好きな粹人で、いたって物のわかる御仁
であった。それを知った弟子たちはこのコ
ワイ先生が好きになり、卒業してから死ぬ
までお付き合ひすることになる。『摩阿陀
陀会』というのは、マダシナンノカとい
うモジリである。

鉄道ファンとしても有名で、『阿呆列車』
は、現代日本文学ユーモア小説の白眉であ
る。また『贗作・吾輩は猫である』は、原

作に劣らぬ傑作である。

その彼は、正岡子規の影響を受けて漱石
が俳句をたしなんだように、俳句もまた
多く残している。「毒にも薬にもならない」
と自ら言うが、面白い。俳句と川柳の境界
なぞどうでもいいように思われてならな
い。

詩・酒・琴の人と言われるように、隨筆
家としても多才で、琴は特に好きで、宮城
道雄に師事し一緒に酒席を囲んだ。「あた
しの目の白いうちは」と道雄は冗談を言っ
たそうだ。

酒の好きなことでも知られ、『東京焼尽』
という隨筆の中で、一升瓶だけをぶら下げ
てアタフタと逃げ回った。昼酒は飲まな
かった。夜本番の酒がまずくなるからとい
うのであった。

猫も好きで、ノラという猫をかわいがっ
ていたが、ある日突然失踪し、探し回るが、
見つからずにそのノラのために追悼文を書
く。人間嫌いかと、思われるぐらいである。

「本日閉門」という札を玄関にぶらさげて
いたというから、まんざらでないかもしれ
ない。

黒沢明の最後の映画はこの百閒の最晩年
を描いた「まあだだよ」であった。

さて、彼の俳句

春霜や箒に似たる俺の主

浮く虻や轡の舌の不浄なり

大仏の日なたを虻の叩きけり

禿山にから風渡る月夜かな

欠伸して鳴る頰骨や秋の風

種豚が猫鳴きするや秋の風

足の毛の足を擽る夜寒かな

めりやすのシャツを着てゐる案山子かな

ついでに漱石の句

うつむいて膝に抱きつく寒さかな

化学とは花火を造る術ならん

枯野原汽車に化けたる狸かな

それがしは案山子にて候雀殿

雀は百閒への揶揄である。

本社二月句会

二月七日(金)午後一時
アウイーナ大坂

底冷えのする七日、二月句会は百十一名(投句十名)の参加で開催。初参加は奈良県の安福和夫氏。

句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人、木村貴代子さんに黙祷を捧げた。

今月のお話は、西出楓楽理事長「川柳でつづる昭和後期」と題し、田口麦彦句集より昭和二十八年から五十三年までの時事吟を抜粋し、それぞれのエピソードなどユーモアを含め紹介された。

タラップを降りる八頭身の美女

これはミスユニバース三位に輝いた、伊藤藤子さん。昭和二十八年。

三億円以来白バイ疑われ

昭和四十三年三億円事件、未解決
日の丸が三本雪飛ぶ男たち

昭和四十七年冬季オリンピック等等。(ま)
月間賞は、中村恵さん(富田林市)

(司会)蕉子・善純(協取)五月・まつお
(受付)舞夢・裕之(清記)勝弘

席題「香り」

鴨谷瑠美子選

移り香が消えぬうつかりして帰宅
京に来て匂袋はこれのお店
加齢臭でも愛する君のいい香り
梅の香に乗って花粉も飛んでくる
盲目の友に開花を教えられ
私の部屋妻はマスクをして掃除
香水もほどほどが良いバスの中
焼き立ての香りが誘うパン屋さん
水仙の香り淡路に春を呼ぶ
一面の水仙足を引きとめる
ややこしい香りに負けるので逃げる
平成の香りがソチのリンク舞う
恋佳鏡フェロモンの香を撒き散らす
梅や桃ピンクの香り風は春
たんす貯金樟脳香る論吉さん
ラッシュアワー美女の餃子が香り立つ
目隠しはだーれあなたのいい香り
ビンツケの香りナニワに春を呼び
他人なら匂いあなたのなら香り
バレンタインチョコの香りのセール中
チョコレート罪な香りがしてならぬ
天神さん梅の香りに絵馬かける
昨日別府今日は有馬と香る風呂
ハゲた人香りがたっぷりつけてくる

(次)五月
弘一 修
玄也
保州
善純
壽美子
隆彦
克己
寿子
見清
真理子
楓楽
寿之
章子
淳司
耕治
篤
真理子
紀子
希久子
蕉子
日の出

雪の朝梅の香りがしたような
香水のいたずら結婚をします
目の前のあなたの姿よう香る
襟足の色香はなんとバックシヤン
里帰り母の香りに満たされる
人生の華残してた香の小瓶
香水きつい超美人でも嫌になる
たっぷりとレモンをしぼる焼魚
先端技術香る昭和の割烹着
八十歳シヤネルの香り知らぬまま
梅の香がそろそろ匂う大阪城
花鉄の季節を追っている香り
佳
何事か妻が香水つけている
残り香に今も縛られ続けたる
カスミ草君にも少しある香り
君の香がしないインフルエンザかも
夜の道きつと近くに沈丁花
人
試験管女が香るかっぽう着
地
メールでは君の香りが届かない
天
やわらかい香りだ君に酔っている
軸
春泥を掬えばほどの香り

完司
森子
柳昌
柳弘
柳昌
はこべ
シマ子
堅坊
誠一
忠昭
一步
信子
まつお
アキ
勝弘
修
はこべ
希久子
和夫
まさじ

兼題 「咳」

伊達 郁夫選

うかつにも美人に咳を貰い受け
断りの電話に下手な咳一つ
咳払いシャイな夫のラブコール
咳ひとつ案じてくれる人がいる
咳二回すつと二人が席をたつ
父の咳母はあうんの膝で立つ
手のひらに咳を落として不安
立ち聞きをしていたらしい咳払い
待たされていますと軽い咳一つ
喫煙者咳をするなら止めなはれ
一日が長くさびしいひとり咳
軽い咳彼が何かを言うはずだ
この辺でよろしいですか咳ひとつ
若いていなあ咳もくしゃみもピンク色
咳ばらい噂の主が側にいる
参拝で米中韓の咳払い
異議ありと言えずに咳を一つする
咳払いしてから通る中二階
インフルから花粉症へと春の風
双六の上りで敵の咳ばらい
受話器にもマスク掛けたいひと咳
咳とめて土筆の坊や探す午後
少したけ嘘が洩れてる軽い咳
咳だつて真似を上手にするオウム
骨壺をゆすると父の咳払い

咳止めの飴で反論溶かしてる
咳払い強いおやじを演じてる
本棚の太宰治が咳をする
咳込んで大気汚染に哭く地球
立春へ望みをつなぐ母の咳
噂する背に空咳のジャブを打つ
いらん事言うなと妻が咳払い
咳払い自慢話が長すぎる
二つ三つ咳し窮地の間をかせぐ
壇上の大物大物らしい咳ひとつ
咳払い言いたい事があるらしい
家族みな失つて聞いた母の咳
住
流行を追い新型の咳をする
子の部屋へ先ず咳をして間を置いて
咳込めばどないしたんと猫が聞く
咳一つ入れて辻褄合わせてる
うたたねの天使が春の咳一つ
人
咳込んだ父の背中が痩せている
地
ありがたまだ生きている咳してる
天
家中の咳を知ってる母の耳
軸
真夜中に胸を突き刺す母の咳

はこべ
裕之
まさじ
富子
理恵
誠一
善純
完司
美智子
淑子
すみ子
唯教
希久子
修
敏治
扶美代
蕉子
としお
としお
淑子
若返る道を開いた割烹着
海を恋う目開いたままの冷凍魚
悩むより開き直つて切り抜ける
伸び盛り口を開けば「腹へった」
玉手箱開く前から総白髪
開けるのに少し勇気のいる扉
努力する友との距離が開いてゆく
哀惜の皺をひらいてゆく回忌
赤ちゃんの握り拳と握手する
自閉の子の心開いたのは子犬
裏木戸を足で開いて尻で閉め
甘くみたか心の中に開いたすき
落ちていく悟りひらいて咲く椿
開発という名で地球切り刻む
薄目開けこわこわ覗き見るホラー
全開の五感で春を驚掴み
前向きに進めばきつと開く道
開店の数ほど閉める店がある
隠れ家のドアは合言葉で開く
胸襟を開いて弱味つかまれる
撩乱の窓は開かぬ一本気
女子力の開花みちびく割烹着
開封後はほつとかないでマイハート
窓全開前頭葉に風を入れ

兼題 「開く」

北村 賢子選

一歩
たもつ
准一
雅明
黒兎
扶美代
美智子
あきこ
靖鬼
淑子
昭
文代
理恵
保州
玄也
恵
朝子
修
美智代
まつお
誠一
美籠
遠野
希久子

立春に開運願ひ恵方巻

運命の扉は意志でこじ開ける

努力した者には開く晴れの門

開幕はまだかと虎は爪を研ぐ

ラッパズボン幅を利かせていた昭和

開けたけどすぐ閉めはった肝手術

常識に逆らつてみた打開策

猫パスが玄関開ける介護の目

背開きにされているのに気づかない

肩幅に開き大地の気を貰う

青い青い風が鬼門をノックする

開くまで待とう反抗期のころ

佳

三枚に開いて男手なずける

三面鏡開くと三つ出る本音

手を開く運命線がまわりだす

鬼が棲む胸を開くと春が来る

離乳食食べさす母の開いた口

人

夕刊を開くと今日が立ち上がる

地

嘘流し切るまで開けておく蛇口

天

火中の栗拾う覚悟のいばら道

軸

開幕へ世界沸き立つソチ五輪

忠 昭

朱 夏

かずお

恭 昌

宏 造

としお

六 点

哲 夫

保 州

真理子

森 子

能 子

富 子

久美子

紀 華

朋 月

茂

義

千代

茂

兼題 「チャンス」 久保田千代選

月明かり今がチャンスと背を押す

四面楚歌チャンスと思う天の邪鬼

スランプの谷間でじつと待つチャンス

食い溜めのチャンス今夜はバイキング

万全を期して金メダルを狙う

向い風掴み沙羅ちゃん大飛翔

新細胞にチャンス貰った割烹着

満月に背中押されたプロボーズ

またチャンスくるよと風がなぐさめる

あきらめずチャンスに挑む力こぶ

土壇場をチャンスに変えた徳俵

はいさつさラストチャンスが遠去かる

まだチャンスあると信じていた不覚

臆病なわたしをチャンスすり抜ける

またとないチャンスに傘が開かない

二度と来ぬチャンスの風に乗り損ね

離縁するチャンス待つてる妻の毘

取り返しできぬチャンスを悔いている

恵方からチャンス来るとは限らない

降つて湧いたチャンスをものにする技量

ビッグチャンス太い財布が落ちている

縁結び最後のチャンスわしづかみ

チャンス到来魔女の帯を買つておく

棚ボタは落下付近に居らばこそ

たもつ

哲 男

准 一

六 点

満 作

淳 司

則 彦

誠 一

恭 昌

ふりこ

寿 之

完 次

玄 也

五 月

光 久

昭

淳 司

扶美代

倅 子

光 久

良 子

ア キ

和 夫

大小は問わぬチャンスは逃さない
チャンスを探すバスワードを探す
寸前で生きるチャンスをいただいた

垂れ下がる誰も気付かぬ蜘蛛の糸

ブライドが逃したチャンスでかかった

当つてくたけろ意外などこにあるチャンス

残り火はまだ消えてない出直せる

絶好のチャンスだったと寒の月

星月夜チャンスは稀に降ってくる

立ち直るチャンスはくれたあの言葉

古稀ですが大器晩成信じてる

ライバルは風邪で寝込んでるらしい

佳

ごめんねのチャンス逃してそれっきり

株下落チャンスを前に金がない

じつくりと焦げ目をつけてくるチャンス

挨拶は恋のチャンスの第一歩

目から鱗いまがチャンスと神の声

人

シャッターチャンス待つ一瞬の風のいろ

地

まだ少し女のチャンス紅をさす

天

転生のチャンスを抱いて花は散る

軸

手応えは確かチャンスへ突っ走る

公 誠

希久子

賢 子

郁 夫

朝 子

理 恵

美津子

堅 坊

蘭 幸

わ こ

勝 弘

完 司

敏 治

義

由 一

敏 治

朱 夏

わ こ

富美子

兼題「鋭い」 木本 朱夏選

鋭角な津波の跡に立ちつくす
割烹着するどい頭隠して
ハンドルをとつさに右へ切りました
鋭さが消えないように歯を磨く
柔らかい口調で急所突いてくる
ややこしいカネへ鋭い庶民の眼
爺ちゃんは油断出さない地獄耳
とんがってとんがった子の丸い膝
鋭さが老いても消えぬ妻の勘
その筋のお人とわかる鋭い目
岡本太郎獲物を狙う獣の目
寒月のおんなで情緒不安定
寒月にどうだとはかり冬木立
窮鼠猫鋭い爪は命がけ
上一文字鋭く睨むかるた取り
いざ本番右脳シャープに研ぎ澄ます
鋭さもほどほど喜寿の水ぬるむ
鋭角に切り込んでくる倍返し
貧しいのは心ですよと鋭い眼
コンパスの鋭さで描く円ひとつ
にせ札を見破ったのは人の指
鋭さに欠けてみんなの人気者
妻にするならば鋭いのは避ける
鋭と鈍支え合ひして五十年
舌鋒の鋭い市長四面楚歌

鋭角に切つて心の殻を出す
一を聞き十まで分かるから凄
一服のお茶で心の棘を抜く
とんがっている柵の自尊心
いじめの礫鋭角で飛んでくる
尖つても空けてるジョークひとつ分
爪研いでといで悪魔の修業中
包丁と勘はときどき磨かねば
割れガラス抱いて青春の彷徨
落語でも聞いて力を抜きなさい
敵にしたら面倒そうな鋭い目
感性は鋭く四幕目を視野に

哲男 能子 寿之 完司 希久光 浩光 美智代 信子 真理子 としお 由一 森子 楓楽 武彦 蘭幸 完司 理恵

ダイレクトメールもうれしい独り
バレンタイン妻から直にチョコ一つ
2020直接聞くぞファンファーレ
ダイレクトメールで義理チョコが届く
直談判したら即決してくれた
傷口へ直接触れにくるいけず
上司からボーンナスもろた良き時代
直談判そこから恋が燃え出した
骨壺を直接抱くと泣けてくる
直接に言うともめそう手紙書く
直接手を下さず税は首絞める
手渡しにしたい言葉を胸に抱く
私の噂私は聞いてない
朝採りがリヤカーで来る道の駅
直観も僕の軌跡の道しるべ
手から手へ東寺の市のあたたかさ
覚えてるか君の直筆ラブレター
剣先を直火で炙る妻の留守
素手で握手以来忘れられない人に
直談判道なき道に灯を点す
フェイストウフェイイスの愛は温かい
決定は拝眉の上といたします
直談判して来たことは伏せておく
手掴みで春を頻張る恵方巻
退職金すべてキャッシュでもろてくる

英旺 哲夫 直樹 いさお 玄也 朝子 則彦 柳弘 朋月 大子 希久子 完次 保州 由一 隆彦 章子 まつお 弘光 美龍 蕉子 奏子 美津子 紀乃 富美子 まつお

兼題「直接」 小島 蘭幸選

雑草の訴状は確と手に受ける

朱夏

プロポーズいまはメールでするらしい

勝弘

素足なら答えが出そう大地踏む

好茂

会ってから噂の尾ひれ取り除く

善純

直接は言えない妻にありがとう

真理子

言にくいことです直に申します

扶美代

神の掌から直接もらう一日分

黒兎

退院に裸足で大地踏みしめる

キヨミ

口移ししないで犬が病気になる

保隆

モノリザに逢つてきましたボンジュール

篤彦

直筆の年賀状もう届かない

隆彦

産直品巻いた地方紙懐かしく

佳

佳

指で触れたくちびるはまだ冬だった

理恵

たましいに直接触れたことはない

義子

本物を見たくてバリの美術館

宣彦

直接に言われたノーは忘れない

則彦

大発明をじかに見ていた割烹着

見清

人

相談がしたいと仏壇へ坐る

耕治

地

手掴みがうまい林檎もおにぎりも

完司

天

手渡しの手ヨコはとづくに溶けている

中村恵

軸

主幹から直接電話来た脱字

句会 燦 燦

と 砥 たかこ
あお 青
1月句会を読む

スマホ見ながら網で餅焼く小正月

ひろ子

いろいろな網が出て楽しませていただいた。この網は真正銘餅焼き網で、スマホと小正月の取り合わせが小粋である。

ロボットの腕に何かがかけている

ダン吉

欠けているのは血の巡り？ そのうち血管のあるロボットが生まれるのではないだろうか。

さかずきを置いて本音を吐き出そう

寿子

ほどほど飲んだ頃に本音は出る。だが、その見極めは難しい。「さかずき」と仮名にすると酔えない気がするのは私だけ？

切りますかやんわり主治医問いかける

日の出

どんなにやんわり言われても怖い一言。嫌だとは言えない情景が目につく。出来れば一生経験せず生き抜きたい。

書初めに禁煙と書く十年目

茂

新曲は10回耳に焼き付ける

弘光

動きそうなの十という数字。だが、どちらも十だから面白い句になっていると思える。

宝くじはずれ安心して眠る

なぎさ

当たった人はさぞや興奮して、眠れない日々だろう。当たっても知れないと思うと怖くて買わないそんな人間もいる(私)。

終焉は秋の木の葉の散るように

菜月

ひと粒の麦になればと書いている

(矢)五月

たとえどんな最後を迎えようとも、今をしつかり生きたい。しつかり生きているからこそ願えることでもある。

拙い文ながら半年間楽しく鑑賞をさせていただきました。いろいろな句に出会えて幸せでした。

冬也

毎月24日締切・35句以内厳守
 掲載は原稿到着順となります。
 楷書で誤字のないようお願いします。
 編集部

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

順調と言った矢先に詫びを入れ
 世渡りの下手くそな人みんな好き
 手順では家族葬にするらしい
 初雪に紅葉悲しい面構え
 夕暮れは物悲しいよ秋の空
 八十路きてこれから先は天まかせ
 あの人が加わる丈で場がなごむ
 昭和には痛みと恋しさが残る
 人前で元氣な振りをしてるだけ

いずも川柳会(島根) 竹治ちかし報

わたくしの余白に雪が降り積る
 偽りを溶かしきりに雪は降る
 まだ勝てぬ雪の白さに我が心
 雪しんしんつのる思いは人知れず
 五センチの雪で麻痺する大都会
 雪降る夜おでんぐつぐつ和が弾む
 幸福の球をトンネルしてしまふ

ひろし 公一 紀の治 幹啓 登美枝 正二 宏之 未延子 多美子
 章峰 久枝 蘭水 英男 夢生 敬子 祐次

トンネル抜けても支えてくれる人がいる
 トンネルを出るまでに拭く泪あと
 トンネルを抜けると空は青かった
 トンネルを抜けるとそこはバラ色に
 のろろがシツカリ家族抱いている
 スローライフ確かに生きてきた時間
 死神よもつとのろろを来ておくれ
 のろろは幸せだけを追いかけける
 のろろも今に激しい自己主張
 のろろまでと言われて亀も意地を出す
 のろろも違反ですよと叱られる
 怪しいことは何にもないと隠しごと
 怪しげな手紙心に鍵をする
 怪しさを見つめて祈る心電図
 どつしりと怪しい姿しない象
 猫の目が怪しく光る御前様
 怪しいな勝手に縄を張って来た
 胃カメラで何十枚も写真撮る
 こそこそが輪に輪を広げ怪しまれ
 幸せと怪しい辞書に書いてある
 ガムテープ張った車が走り去る
 怪しいと思うチラシに乗せられる
 怪しいなー見たい触れたい好奇心
 黒い影怪しい人が横切った
 鼻歌で弁当作る嫁という
 弁当に感謝の気持詰めておく
 娘の弁当ギョウギョウ詰めに母の愛
 少しずつ弁当も減り子の巣立ち

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

土下座され中途半端にする和解
 半端でもギリギリ親に返す恩
 趣味多く半端ばかりで一兎得ず
 不揃いの大根並べお説教
 昭和史が半端になって行くこわさ
 鼻高で目はパッチリと行慢顔
 鼻息の荒い悍馬の轡とる
 鼻声でオレオレ詐欺になりすませ
 くんくんと何処から臭う会議中
 あの鼻に内緒は出来ぬ忘年会
 鼻唄が出る程機嫌いい音痴
 遊ぶことこれは休みじゃありません
 三食を僕が作ると笑顔見せ
 開店休業客は神さま仏さま
 日曜日家族そろって朝寝坊
 楽隠居次の休みは天国だ
 脳みそが休んでしまいボケて来る
 休むってこんな苦行と知らなんだ
 帰省する娘を待つ母の台所
 臆病で茨の中で休んでいる
 単線は休み休みで景色愛で
 流木になって手足を休ませる
 無我夢中が子育てをたぬし道
 転ばずに汚れないよう道を行く
 照る月も虚しい通夜の帰り道
 会えそうな予感ゆつくりまわり道
 抜け道を作ってあげる母の木戸
 終点は同じ墓場だ別れ道
 食道も五臓六腑も無事通過
 止り木があると寄り道しなくなる
 子に譲る道に未完の絵を残す

野蒜 重利 たい代 耕治 美知江 久芽代 重忠 貴恵 清 道子 龍枝 義人 和子 玲子 悦子 照彦 美子 美子 玲子 芳光 三津子 恭子 久江 公恵 くにこ 紀美恵 完司 石花菜 節子

嗚呼悲し呪文忘れてしまった魔女

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一粹報

おんな現役あんなの子なら産んだげる
一番の横着者だ息をせぬ
成仏へ七つの欲が捨てられぬ
裸木の如く無欲にさっぱりと
ジュシーな桃が触つてみると言う
打ち止めと書いて静かにペンを置く
捨てられた悔しさバネに咲いた花
オーナーの乙姫様にほれました
野に果てた亡者やさしく彼岸花
銀行は現役だから銭を貸す
菌ごたえの無い暖簾にも冬の風
明日の為今日の全部を使い切る
決闘の手袋捨てて握手する
横着ななれの果てですキリギリス
すすり泣く亡者の声を聞く樹海
オーナーと借金王は同意義語
オーナーも人に言えない苦勞あり
金亡者世間見た事ありますか
ふる里は良い最敬礼が飛ばす
底辺のつゆやき北風が飛ばす
真夜中に亡者と少し会話する
恋一つきれいいさっぱり捨てて嫁く
横着なやめぐらしの無精髭
横着は夫へ妻の倍返し
横着が朝昼晩を食べている
朝寝する妻を横目に靴をはく
世も末か横着者が多くなる
オーナーになったラケチになりました

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

オーナーのはっきりしない里の山
さっぱりや言っても顔は本音言う
甘い汁吸うことだけを考えた
虚偽表示もう打ち止めと願います
生前の罪地獄絵の亡者達
現役は貫くつもり尾を振って

高知川柳社

小川てるみ報

順風が浄土の使者を乗せてくる
風向きを変える私が蘇る
お茶目な風だ水面揺らしてじやれている
強風が表と裏を返えて去る
弾む日は寒風さえも心地よい
にえきらぬ心に視点変える風

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

妻の耳毒吹きこんだひとが居る
人の群れ独りぼっちが身に凍みる
早々と年越しにきた渡り鳥
それからの話はそうさ他人事
探られる何もしてない皆の衆
わが道を迷わず皆と渡りたい

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

真つ青な空から爆弾が落ちる
物事を極めて今は人たすけ
がらがらと捨てた未練が戸を開ける
のほほんと生きて極めた酒の爛
駅前に並ぶ豪華な貸店舗
極めたり完全養殖クロマゲロ
小数点もらつて僕は生き延びる

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

何一つ極められずに森を出る
幸せの極め付けなら子の笑顔
苦も楽も師走の街へ忘れ去る
がらがらに慣れてしまった縄電車
歳末売出しがらがらボンの音
過去形で運にめぐまれ生かされる
土壇場で運にめぐまれ生かされる
十二月今年も生きた手を合わせ
差し伸べる手なないつも二本ある
ガラガラ昭和になったセルロイド
初産へ付き添う夫のラマーズ法
がらがらの声で口説いた女王蜂
この道を歩むりんごの道歩む

南大阪川柳会

津守 柳伸報

ふる里がふつふつ浮かぶわらべ歌
年末は第九と決めた歌暦
明日は明日我が唇に歌がある
俺だつて風呂呂の中では声楽家
故里に心安らぐ歌がある
あの人の後はマイクが濡れている
汚染した海は歌わぬ波の歌
腰強いうどん妻その味の味がする
旅先で名物うどん見逃さず
寒い夜鍋焼二浪の背を押す
午前二時勉強部屋へ行くうどん
素通りが出来ぬうどんのいい匂い
左遷地のうどんの味が馴れてきた
うどん屋で溶けた二人のわだかまり
河内弁あらあら私お人好し
クラス会ふられた人に声かかる

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

柳子

はじめての和服あらあら左前

メールではあらあらかしこチヨケている

靴下の穴も来ている通夜の席

娘さん化粧も良いが膝締めて

子を産んだ途端に威張るうちの嫁

こたわりを捨てて騒いでいるサンタ

補聴器を外せばこの世騒がしい

忘年会あまり騒ぐとテロになる

終電が騒ぎも乗せて走り行く

飲んで騒げば知床旅情聞く師走

ハイカラな時計に合わすネイルして

人減らしハイカラな女残される

ハイカラな爺さん杖も模様付き

傘寿すぎまだハイヒールよく似合う

豹柄でハイカラモード点滅中

ハイカラな服で昭和に迷い込む

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

空き敷地税対策に種を蒔く

じわじわとアベノミクスが効いてくる

帰らねば心配いれは邪魔な人

政治屋が真綿で首を絞める税

もう古希をまだ古希に変え船出する

川柳塔さかい(大阪)

村上玄也報

見習いの手始め洗う磨くだけ

今更に浪費の癖に恥じている

今は昔恋の初めはカルタ取り

じつくりと聞いたら二人とも悪い

今もなお路面電車の走る街

親だからじつくりと待つ子の長所

なぎさ

勝弘

郁夫

歌留多

栄子

柳弘

忠昭

一步

直子

たもつ

弘泰

百合子

柳右子

ルイ子

柳仲

昌紀

一輪の蜷梅咲いて母を呼ぶ

鮎色に煮た大根を食う独り

定年後振らぬ尻尾がよく太る

初知事選お金かけたが命とり

じつくりとかまえて仕事しています

いつの日かロケットがする墓参り

急がずにロケット線で花咲かす

じつくりと聞けば息子が悩んでる

初めだけ夫唱婦隨に見せた嫁

じつくりと探してこらんちゃんとする

要領のわるい尻尾はよく見える

私を初心に還す初日の出

強火弱火僕をじつくり妻が煮る

前向きを誓い紅引く初鏡

戦場の論理は常に覇者のもの

おめでとう実感のない年初め

うぐいすの初音お前も新米か

寝正月録画で拝む初日の出

尻尾ならおます只今修理中

行列の尻尾について初詣で

ミスしても尻尾だけ切り生き残る

じつくりと聞いたらつまらない悩み

川柳塔なら

坊農 柳弘報

誰からもマークされてる夢を見る

迷走のあげく逆走する政府

要注意したがまんまと騙される

CMでトイレに走るメロドラマ

考えもして男の先走り

夢抱いて走ったあとの靴の底

五月

朋月

健吾

舞夢

のん子

永久

篤子

清子

日の出

唯好

としお

唯教

澄空

時雄

敏治

誠一

光幸

和幸

月子

八千代

玄也

天笑

何もかも許しにつこり幕下ろす

正月は箱根駅伝見て平和

ポストまで走る昨夜の余韻のせ

飲み会は三万円が限度です

我武者羅に走る命の火を燃やし

走らずに自分保つて白寿まで

少年の夢ひた走るアンビシヤス

仮面夫婦同居の幕をおろします

それ迄と妻の監視の酒を飲む

吐き出せぬ内幕知って困る秘書

これ以上塗ると化粧がずつてくる

祈りまだ足りぬか影が突つ走る

忍耐の限度へ道が開け出す

宮仕え走り続けたチビた靴

遭難の活字がテロップを走る

先頭を走る兎はマークされ

全力で走り続けたちびた靴

沸点を越えたら愛は憎になる

作業服マークが光る労働歌

ぎりぎりへ老老介護共倒れ

こめかみの奥で火柱爆ぜている

伴走の妻が彼岸へ先に着く

隠したいマークがあつてハイネック

風止むように母は白寿の幕を引く

終章へ切狂言の幕が開く

友達の間まで走つて来た潔さ

マークには偽装品とは書いてない

風船が割れる悔し抱いたまま

川柳ささやま(兵庫)

北澤

税民報

母さんの舌は立派な計量器

富子

萌子

あかり

(江)勝弘

克己

ふりこ

辰雄

依風

弘坊

堅坊

順啓

仁

征子

恭昌

完次

将文

寿子

真理子

美智子

孝子

成子

隆盛

理恵

國治

朝生

弥生

柳弘

恵美子

久子

多々迷うし、かし妥協す余生です
一流になると東京へ行ったまま
いろいろとありまして、共白髪
書初め禁酒の文字を貰こう

一流の男にもある泣きどころ

いろいろとあった人生餅を焼く
ブランドを買って自慢の顔になる

熱いのが御馳走味噌汁がうまい
三ヶ日ごちそう飽きてうどんすき

ふり返り初心忘れず、氣持ち張る
学園の初心を忘れ今がある

一流の学者にも吹くすきま風
初心者まずは控えてお伺い

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

美智子

照代

幸子

可住

開子

多美子

真由

稠民

哲男

純子

美緒子

照彦

幸恵

美佐枝

芳光

はるお

美ツ千

石花菜

茶子

露となり北斗七星から落ちる

弓が狙うのはあそこらでなく

警笛が聞こえる弓がしなってる

背の凍る無縁社会の人の無視

西和子 秀行 蟹郎

身体中風をあつめて明日目指す
合格を目指すメガネの度が進む
大寒波カメラ虫顔出す暑い部屋

大好きな煮凝り食べてコーゲン

頂点を目指す毒なら呑んでみる

凍てつく日炬燵の中でする背伸び

凍らせて隠し通した赤い舌

冷凍庫農薬入りは入れてない

弓道場北風いつも吹きぬけた

血も凍る怖さ知りつつ朝帰り

北極が泣けば白熊生きられぬ

弓張り月だね母と眺めた幼い夜

志望校目指す少女の灯がもれる

目指してた良き妻の座は時間切れ

目指してたスローライフに馴染めない

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

扶美代

久仁子

フジ

高鷲

ヨシ枝

いさお

庸佑

アヤ子

ちづる

かつ美

美喜

シルク

雄太

幸代

実満

弘子

京

みさ子

富久江

すみれ

かおる

和子

満

孔美子

惣子

美代子

咲和

鈴

章司報

扶美代

久仁子

フジ

高鷲

ヨシ枝

いさお

庸佑

アヤ子

ちづる

かつ美

美喜

シルク

雄太

十二月都会の夜に招かれる
頑なな口をほどいた温い汁
すっぱりと足を洗おうあれにこれ

諦めて空を睨んでいる師走

参ったと決して言わぬ父の閉基

初心者の靴は真つすぐ向いている

一念発起初心にかえる初詣で

大掃除頑固な汚れ手を焼かす

八尾市民川柳会(大阪)土田

欣之報

人間の謙虚さ示す低い腰

妻病んで家も心もがらんどう

国よりもボクの明日が見えません

叶わない夢を背にして花鉢

雪煙捲いて囁く虎落笛

福島に戻るはかない夢だろか

少しだけ開けると胸の踊る本

天辺に照準合わす未来絵図

もう老後互いの手と手を緩めよう

真つ直ぐに立てない射貫かれた心

窓開けて明日の風を待ち侘びる

アメリカも所詮かなわぬ北の国

夢百態その後は蟻に運ばれる

白たえの花びらのごと雪の舞う

相手の二つで神の目をひらく

はたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

いつの日も希望の色はあたたかい

希望持ち二日三日と日記つけ

ちっちゃな手希望いっぱい握ってる

まだ希望捨てずに今日もバックする

喜久子

みつこ

光男

ダン吉

六子

美代子

泰子

章司

欣之報

高鷲

清

賀世子

仁

壽峰

賢男

常男

慶一

耀

加央里

寿之

紀雄

森子

朝子

欣之

黒兎報

久子

信男

純子

正子

— 106 —

巻き尺があきれる程の腹まわり
まだ翔べるそんな気でいるネジを巻く
巻き返し尖閣狙う鷲がいる
巻き寿司がごちそうだった昭和の日
世界観無い総理だとくだを巻く

城北川柳会(大阪) 近藤

踏んばってプラス思考の足の裏
雲に乗り世界の街を見てみたい
百薬の長で意欲を洗つて
新年へ意欲あれこれてんこ盛り
悩む子に母は鬼にも仏にも
成田山今年も行けた初詣
キムチ鍋つくと汗が笑い出す
ときめきは追い越すまでの長い髪
原発はもう限界を越えている
やつと喜寿さあ咲かせるぞ恋の花
一線を越せぬ未練な落ち椿
嫌な顔見せずこつこつ親の世話
あたたい日差しいっぱい抱きしめる
真正直華の咲く日がきつと来る
こつこつも長所と気づきあせらない
ごちそうさん食べる意欲が存える
暗道を時間にかけて越えた自負
幸せにくらしています同居中
こつこつの音を知っています貯金箱
新年を祈る復興頑張ろう
7号のミニのドレスが捨てられず
恋というつけ火をされて走りだす
恥じらいを少し持参で初句会
核のゴミこつこつ溜めてどないする

由紀子
美ツ千
恭子
瑞子
照彦
正報
集一
高志
柳弘
修
弘風
郁夫
洋志
縣侑
直樹
朝子
五月
賢子
志華子
秋香
満作
美智子
リイ子
典子
たもつ
榮子
寿子
あさ子
一歩

川柳大阪

森松まつお報

晩年は惚けたふりして生き延びる
今年こそよつと跳ねたい趣味の道
やさしさを花が教えてくれました
こつこつと耐えた仮設も年明ける
守る人出来て嬉しい意欲出る
老いらくの恋へ意欲のアデランス
こつこつと早やキツツキの冬仕度
尿酸値7を越えてるあぶないぞ
句集出すわんどが川にある限り

義昭
堅坊
野鶴
麗子
千恵子
いさお
倫子
勝弘
正

百歳の皺の笑顔が可愛らしい
かいらしい瞳の孫と添い寝して
敬老会フォークダンスでみな笑顔
リズムよく空から降ってくる音符
新しい春のリズムが動き出す
リズムよく一年締めて明けを待つ
お静かに母のいびきがリズムミカル
リズム感無くてカラオケ盛り上げる
お互いのリズムがあつてはいる平和
通勤のリズムが狂うにわが雪
よく聞けば鳥の鳴き声リズムあり
学よりも尊敬できる人間味
学間もお金も神も論吉さん
社長さん偉い人だよ学歴ノー
学ぶことと学ぶ想定外の事
フクシマから学ぶ想定外の事
人情に学んで温い春を待つ
仕入れた雑学披露するレノン
残照にまだまだ学ぶことがある
キナ臭い時代に戻るのはごめん

朝子
珠生
彦太
わこ
喜楽
柳昌
かよこ
芳香
鉄心
公平
善純
勝弘
和
美世子
紀雄
信醉
まつお
義子
一歩

あかつき川柳会(大阪) 山本

柳昌報

幼児でも見向きもしない糸電話
神代から変わらぬものは恋の路
寅さんを楽しんでいたい時代
子や孫に時代違ふと小言聞く
寒桜白い野山に色を添え
増税前うまい話が有ると言う
TTP二月に妥結するのやら

(奥)五月
温子
堅坊
川童
功司
隆司

いのち参上酔じょう油で食べて下さい
赤ちゃんの生命が温い未来の手
命かけ彬が伝えたかったもの
出来ちゃった相手はDNAで聞いてくれ
ゼロ歳へははじめましてと百の笑み
脇かため主役光らす黒子たち
蔵草も花咲く頃は光り出す
心身を洗つてみよう光るかも
丸虫に興味子どもの瞳が光る
苦勞して光は掴むものですね
一条の光に縋りつく虚心
私につながる深海の光りもの
勝負下着はゴールドと決めてある
これ以上お金溜めると気が狂う
百均で金を天下に回します
一族郎党金のある顔誰もなし
税上がり年金下がる苦い屠蘇
僕のお金汚れてません安心を
NISAには金の生る木があるらしい
哀しみが透き通るまで砂よ泣け
異国への夢を龍馬が結ぶ浜
拉致された浜辺の風はいつ戻る

美花
ダン吉
忠昭
穩夫
たもつ
美智子
克己
廣子
仁
鈍甲
一筒
紀雄
弘子
ばっは
英夫
篤
信子
喜八郎
いさお
隆昭

無慘なりトドがビキニの夏の浜
冬の浜実らぬ恋の吹き溜り
荒寥と胸を突きさす冬の浜
身の丈に合った生きかた浜千鳥
エクアドル隠しカメラが物言うた
継がないタスキの重さいかばかり
後出しがまだ出てきそう都知事選
囲つてもスリルを汚染水
ロケット犬電池を餌に吠えている
快馬なら吹き聞いてくれますか
眩きもすかさず秘密法の網
エスカレーター下りやったら大惨事
靖国で不戦の誓い恐れ入る

長柳会(大阪)

坂上

淳司報

傘寿卒寿白寿を視野に意気盛ん
双子座の尻に敷かれてる魚座
女子会の食べて喋ってバスの旅
化粧品お試し貰い電話攻め
生きてるよ手紙来なくて年賀状
若き日に貰った手紙桐箱に
絵手紙の主に励みの句をもらう
絵手紙ががんばってよと背中押す
盛り上げる機の上の音頭取り
おばやんの合の手やまぬきよし節
ゆるキャラが競う各地のおもてなし
故郷も十日恵比須で祝い鯛
亡父亡母の臭いを消している故郷
クラス会故郷訛りに戻るとき
片思い好きを殺して胸のしみ
望郷の想いふつつ初日の出

一志 敏子 賀世子 和子 直子 桃花 堅坊 生枝 紀乃 和雄 勝弘
淳司 正博 三和子 登美子 もこ 幸子 靖博 一文 武男 修 ともこ 孝代 弘光 久美子 克三 芳野

口に出ぬことば並べたラブレター
書き初めという自分へのファンレター
父母が居てこそ故郷有り親不孝
父母逝つて故郷はもう道の駅
故郷の訛りと地酒とけ合つて

松露川柳会(鳥取)

山本

正光報

二頭馬車毛並揃つて品高く
年金へ飛躍の年を期待する
今年こそゆつくり行こう午の年
午年に明るいニュース待っている
牛と牛体形文字もよく似てる
アスリート午歳へ夢翔ける
うま年へ駿馬の如くダツシユする
神様もお困りだろう絵馬の数
午年へ飛躍を誓う神詣で

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

苦も楽も代々見詰めたこの屋敷
見えそうで見えぬ箱書それでいい
人生をしんしんと降る雪に見る
千鳥足まだまだ酔つてないと言
あつさりと断わる技を教えられ
人間不信雑音になれて強く生き
古くも昭和の箱から抜けきれぬ
だまされてだまして夫婦五十年

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

初春の風新しい色で吹く
新年の顔はそれぞれやる気見せ
新しい朝のルージュは淡く塗る

隆彦 直樹 (徳)正子 和代 篤
公美枝 弘子 智恵子 鈴枝 豊枝 静江 和代 雄々

新しい筆で大きく「午」と書く
新年もやはりひとりの飯を炊く
雪解けの一滴新たな旅に出る
新鮮で豊かな笑顔いい出会
箱根マラソン新年の幕があく
ニューエープ遅れぬようにハイタッチ
太陽へ恥じぬ生き方して長寿
まぶしいよ妻が太陽俺モグラ
サクルの太陽人を寄せつける
亡き父は今も心の太陽だ
太陽のようなあなたがストライキ
走つてもやっぱり届かぬ一人旅
天寿まで生命燃やして走り抜く
靴擦れもあるさしつかり走り切る
ラストチャンス走つてみまます穏やかに
母さんはいざとなつたらレッツラン
たかじんを歌つて大阪の涙
セレナーデなどいかがですか落葉散る
九ちゃんの歌がオスタカ山にある
友の墓前一升瓶と我が校歌
歌が下手でも肥料も無駄になり
廃校になつても校歌忘れない
事始め漂白剤で顔洗う
自分への答えは未だ白いまま
とりあえず妻に白旗挙げておく
私は誰どこから来たの白い顔
真っ白な皿に初日を盛りつける

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

日はのぼる世界平和を願いつつ
苦に耐えて頂点目指す一歩ずつ

たけし 千里 草庵 ちえこ 幸子 昌枝 輝山 久絵 聡美 柳歩 民子 左余 とも子 禮子 知恵子 芳山 桂子 蘭 くらふ ゆき 幸代 青帆 博子 弘充 寿代 浜丘 舞夢 照子

おだてられ登ったはしご外される
背の荷も減ってゆつくりのぼる坂
陽が昇る何故か万歳したくなり
古里に清流のほる鮭の影
憧れの富士へ登山の夢を見る
煩惱を背負って登る米寿山
同窓会皆で記憶をさかのぼる
生き甲斐は人のお役に立てる時
今日の生き甲斐わたくしを待つ明かり
二人ならきつと登れる坂である
生き甲斐も果たし悔いのない米寿
三面鏡今日も笑顔で生きるべし
生きがいとは若さと金と元氣だけ
ゆつくりと小春日和の今を生きて
命詠み魂詠んで生きられる
生き甲斐の仕事で老後ボランティア
生き甲斐はお互い伴侶という絆
折折の四季に生き甲斐感じてる
落椿覚悟のほどは出来ている
今でしょと歳にせかれスマホ買う
今覚めた初夢語りつつ起きる
技芽える東照宮の登り竜
スカイツリーきつと天国への脚立

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

楓 楽 すみ子 昭 善之 知之 浩二 公平 紀子 希久子 捷也 千歩 志華子 日の出 蕉恵 桃花 恭昌 満作 義 げんい 正雄 弘澄 眞澄 陽子 純宏 寒之 陽子 由里 真帆 茂子

政党が芽を出しすぐに枯れていく
辛いとき逆に頑張る気持ち湧く
若ぶつて杖はバッグに折りたたむ
ためらわず突き進む今怖さなし
愛犬の進む老老へわが身置く
花ごよみ夢を咲かせる種をまく
わいわいと輪の中にいて孤独なり
休耕田泡立ち草に貸している
世界地図くすぶる火種抱いている
すんなりと育った子から親離れ
目線下げ丸く世渡り老いて行く
すんなりと解り合いたい嫁姑
秘密秘密と知る権利置きざりに
かさぶたをめくると本音弾けそう
胸にバラ咲かせような嘘をつく
咳ひとつしてはいけない時に出る
ひとり膳また冷え性に泣いている
風評が流れる橋に立っている
生き延びてきた正月のめでたさよ

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

みどり 章子 美恵子 理子 恵美代 みち子 信子 敦子 嘉子 安子 澄子 百合子 華蓮 一眸 和代 遊子 はる公 弘 房子 昌紀 久仁雄 光久 たもつ 加お里 美智代 扶美代 千代 美籠

人間が好きお喋りが好きティータイム
騒がしうてやがて静かに請求書
見えみえの温い芝居をしてくれる
ロマン追う男の眉の清々し
泣いた騒いだ十九年の歲月よ
風騒ぐ春が待ち遠しいらしい
六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 穀報
手を握るだけで不安が消えてゆく
軽々しい振舞げんに成める
成人式旅に出る気の青リಂಗ
いきなりの名指しに言葉うろたえる
八十の道一步一步を踏みしめて
とろとろと時間を煮込む里の鍋
母白寿ととろとろ眠るよに逝く
とろとろのチーズフォンデュとフロボーズ
とろとろの火でいい燃えていてほしい
とろとろと今も燃えてる老いの恋
とろとろと夢織っている老夫婦
職退いて責任のない身の軽さ
傷つけた軽い言葉の深い傷
知るほどに己の何と軽いこと
しゃべん玉軽く飛んでは夢はこぶ
軽くても諭吉は好きだずっと居て
軽率に返事したのが命取り
まどろみの夢に出てくる母の顔
いきなりの結んだ愛が永続き
ジャジャ馬の手綱しつかり持つ夫
いきなりの計報が告げる親不孝
いきなりの客に押入れてんこ盛り
突然の一言だから胸の染む

希久子 義子 智恵子 みつ子 いわゑ 楓 楽 穀報 無限 光久 穀 能子 美穂 和郎 盛夫 道子 洋次郎 弘子 美恵子 武臣 妙朗 康子 弘 繁義 邦子 和宏 文香 博史 千賀子 勤

いきなりに対処出来ない歳になる
いきなりマイク持たされ君が代を
定検も問題なしでうまい酒
カレンダー馬を一年飼ひ馴らす
八十でロックを歌う夢がある
お正月妻が若いと褒めておく
いきなりの友の計報で病知る
決断へばらの蓄もふくらみぬ
腹立た昨日は忘れ明日を向く
赤提灯みな善人の顔になる

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

利子 洋一 忠貞 敏夫 ひろ 武彦 浩司 みつ 楓楽

間違えた道も楽しむわが余生
和解するチャンス互いに探り合う
テノールの読経に安らかな遺影
ごめんねで済まぬ赤ちゃん取り違え
駿馬ひらりアベノミクスに着地する
半々で一人前の夫婦です
したたかに私の弱点ついてくる
まちがいの元を辿れば妻なの
ぬくもりは半畳ほどよいのです
七種をトッピングしてグルメ粥
右手に花左手にもと言う女
チヨイワルでしたたか生きた八十路まで
馬の背を雨が渡つていく時雨
したたかに生きて小さいゴミ袋
まちがいを謝ることの潔さ
一年を見通す眼鏡曇り止め
魔女パワ―後期になると出るのかな
小遣いも三パーセント上げて欲し
したたかに生きる時計のねじを巻く

堅坊 庸佑 歌留多 健二 美津子 幹治 美佐子 武彦 玲子 勲 靖鬼 耕治 武臣 巴子 葉子 則彦 千代

次世代の予定へやは神だのみ
晩婚で子を孫とついまちがわれ
パソコンに一字ミスでも叱られる
絵馬満載神さま腕の見せどころ
冗談を半分混ぜて言う本気
したたかなリベンジに合う向かい風
冬の陽を拾いたいので回り道
まちがえた靴ギクシヤクと終電車
あせりますATMのやりなおし
したたかな足跡光る夕西
予定にはない脱線がしたくなる
日もすがら母はテレビの開き上手
したたかに背筋のばして冬のバラ
予定した人待ってる自動ドア
善人も身の半分につつま邪心

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

求子 玲子 正彦 千鶴子 茂 美智代 見清 満動 ヨシエ 雀舎 哲夫 紀華 美籠 久子

官兵衛の世界にはまる夕餉時
万葉の村に卑弥呼の詩の世界
新成人スイーツあてに缶ビール
世界ではどこかが飢餓で銃の音
寒くても呑み会だけは欠かさない
ネットから覗き見ている別世界
我が余生今一番の華と知る
我が世界やはり論吉が物を言う
自由にと置き傘がある田舎駅
華やかに見せて茶屋で粥啜る
最高のもてなし笑顔なんだろう
華やかなバラも悩みを抱えてる
殺し合いドラマの世界だけでよい
砂上の絵踏まれ消される虚の世界

蛙城 いさお 清代 和美 玄也 幸子 笑司 信二 仁録 ダン吉 珠昭 大輔

もてなしの相槌軽くしておこう
スイーツで盛り上がった下戸仲間
スイーツよりビールが好きと華奢な美女
華やかな過去は封印嫁にいく
核の無い世界を祈る千羽鶴
認知症の母が遊んでくれました
華やかな人生支えたのは黒子
乙姫がもてなす海老は本物だ
もてなしもてなされるも苦手で
スイーツにグリン童話の味がある

京都塔の会 樹本 宏子報

信子 洋子 弘子 英夫 ひろ子 保州 みつ江 宗信 康信 義泰

国益をせめぎ合ってる世界地図
にわとりもクリスマスには覚悟する
万巻の書から学んだ益多い
一歳児も大きい方をすつと取る
喋りすぎこれも防衛といひひらき
問答は無益と言われ湧く闘志
不用意に本音を吐いて睨まれる
内戦の国にも聖しクリスマス
年の瀬をイヴで気が付く一週間
収益を少なくすれば無駄なくす
うかうかと生き退屈な日を過ごす
ええとこでうかうか寝てしまふ映画
老婆とテレビで見るクリスマス
非行防く母の笑顔とハンバーグ
ためになる助言その時わからない
防ぐすべない老いせめて美しく
お正月うかうかすると脂肪増え
ドアチェーンひとりの敵を防ぐ武器
防寒はコタツのなかで雪見酒

みどり 弘子 泰夫 益代 文彦 則彦 求芽 迪子 めぐ 紀乃 満子 弘之 宏子 葉子 英旺 弥生 保子 五月

うかうかの後がもうない徳俵
うかうかと手を出し嵌る落とし穴
実益になるもならぬも我しだい

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

祈られた神もしたかる寝正月
まごまごするなと怒鳴る父白寿
決断をしてから今日も眠れない
どの馬も駆け出していく年賀状
決断を迫る女の葉指
余命まで医者が言うからうろたえる
少々の棘飲み込んで決めに行く
四月から笑ってなんかいられない
必要とされて深まる人の幅
決断が甘くてつり橋渡れない
生かされて生きる喜び初日の出
ちよつとした決断納豆食べてみる
釈迦の手に拘われ昇華する祈り
黄昏は家族と居ても独りでも
どちらにされますか安い方にする
嬉しい時も悲しい時も灯をとす
平凡でいい暮らしを祈る鈴
難民の子等の笑顔が痛々し
願ひ事妻には言えぬこと一つ
リストラのババは決断主夫となる
禁煙は見送ることに決めました
スマホにはまごまごします携帯派
まごまごし認知症だと仕分けされ
火を抱いたときから覚悟決めていた
同じならこの世笑って暮します
成人式旅立つ支度青りんご

欣之 庸佑 けいこ 秋果 歳子 章子 遠野 忠直 勝弘 美龍 奮水 盛夫 哲男 比志 淑子 美津子 光子 一徳 宏造 武臣 茂 利子 千賀子 無限 文香 殺

決断の顔を鏡で確かめる
鎮魂のあかりを灯す和蠟燭
再開発様子一変まごまごと
もう少し燃えて生きたい五輪まで
呵阿大笑したのはいつかわからない
原発は止めろとでかい初日の出
笑い声会場いっぱい初句会
何ごとも決断するが先細り
たいていは祈っただけで満足す

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

新成人今日一日のプログラム
山なりのストライクです始球式
方程式解けぬ焼酎飲みながら
厳肅な式でもスマホいじってる
形よく生きる女の方程式
復興へ願いを胸に成人式
桜花浴び母と校門潜った日
入社式その日はかりはお客さま
洋式でウォッシュレットでほんとに楽
スピーチの短さにありお人柄
優勝旗故郷肩にする重さ
劇団一色載せてた頃の紙芝居
入学式子供と親の晴れ姿
本気で生き金婚式の祝い酒
式の日にはバートの母も薄化粧
表彰式金銀銅のいい笑顔
結婚式で一番先に泣いた父
形式で誘った人がやる気だす
式服にあふれる想い包みこむ
略式を許してくれぬ父が居た
大地踏む成人式の顔の艶

千代 朋月 浩司 玲子 じろう 武彦 弘子 伯備 美代子 六点 一歩 まつお 弥生 紀雄 清之 いさお 喜代子 信二 尚男 アヤ子 雅枝 悦子 瑠美子 大子 キーキー 扶美代 龍一

式すましのれんぐりて祝い酒
戴帽式ナース飛び立つ荒海へ
方程式に情を入れて答出す
父ここて泣くと書いてる式次第
核兵器なんの方程式だろう
結婚式なのにベビーもいる写真

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

あと何度聞けるハッピーバースデー
赤ちゃんにオムツ老人にもオムツ
百歳の弔辞みんな大笑い完
兵隊は戦死市民は大死にか
上品な笑いがメロンから漏れる
冬野菜いっぱい食って蝶になる
もう少しいじめますよと冬將軍
ありがたや玄関先にまた野菜
かぐや姫めでたい竹を光らせる
一本の太根の意地雪畑
飯盒を子等に教えた小野田さん
間違ひも互いに笑顔交わしたい
雪だるまペンをかいてる日向はこ
溜め息がしつかり見える寒い朝
やきもちも少し入ったおめでどう
横着をするとミイラになる独り
大根の煮物が口に合ってた
気がつかぬ振りをするの思ひやり
落語聞き無心に笑いを晴らす
めでたいと言われ迷惑してる鯛

川柳さんだ(兵庫)

田中

章子報

武義 一文 勝彦 英夫 ダン吉 シマ子 紀の治 芳光 照彦 芳山 石花 幹啓 鬼一 麦青 雄大 けいこ 松恵 風露 由紀子 みゆき 重忠 鈴野 久子 恒子 完司 順子 好文

馬が引く七福神の福袋

ダイヤ婚更に未知へと馬駆ける
おしゃべりと無口な二人馬が合い

種馬となつて雲海駆けめぐる

好きだったポニーテールも今は夢

再びのスタート強い心意気

歌を始めおしり効かせて叱られる

元旦の親戚廻りは子連れれて

うろたえたスタート今は順調だ

わくわくの顔を見たさのお年玉

うぶ声を押込んで待ったあの記憶

新聞の切り抜き見せにわくわくと

まだ続けますかそろそろお開きに

賭け事は続けるのが華である

金婚の二人芝居が続いてる

うちの犬知らんふりすりや吠えまくる

あなたには届かぬボール投げつづ

よく続くあんな夫婦と言われつつ

激震を忘れていない枕です

帰ったら早速直らないテレビ

わたくしを立て直らせた悔の数

義理あつてまだ近げません阿弥陀さま

ゆさぶりをかけてみる気か肥後の殿

一列に並ぶ目刺しの行儀よさ

最近金さあれば良いような

初恋の思い出煮込むおでん酒

血糖値しっかり睨むパンの耳

閉じ籠もる自分の殻はあつたかい

いじめでは手加減知らぬ子等ばかり

薬より歩くと医者が処方箋

お正月三ヶ日だけ子が揃い

このボクを癒してくれるのはコタツ

一な子

つな子

宣子

喜久子

廣子

ヨシエ

雄太

雄太

歳子

健二

幸香

富夫

淑子

忠康

ちあき

直美

和雄

菜々子

光月

美久

美子

恭子

修平

雅

雅

雅

紀乃

雅

雅

雅

雅

雅

雅

雅

医者嫌い酒もタバコもやめません

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

ロボットがリストラの後引き受ける

就活にライバルもいた首の傷

ロボットに未来を託す人不足

閉塞感を未来思考で吹き飛ばす

真新しい誓いを絵馬に初詣

白内障手術でこの世新鮮に

新芽みな歓喜の顔を天に向け

新しいからとふわふわ飛びつかぬ

リストラが鉄を持てた農日記

断捨離で夫入れ替え新所帯

上向いて歩く未来に射す光

必勝の汗未来への夢開く

再就職ブラック企業とも知らず

リストラで屋台のラッパ吹いてます

プラス思考は見るもの全て新しい

一日のピースをつなげている未来

メニエール病iPSを待っている

新月に告白過去は伏せたまま

年寄りには年寄りなりの夢がある

這い這いの指差している大宇宙

仏飯は里の新米天に盛り

私の未来はその日その日です

リストラのもやしが風邪を引いている

無病息災今またさらけを酌む

八十路坂日日新しい夢を見る

未来より今が大事と鉄を持つ

リストラの後馴れぬ手つきでフライパン

予想外に諭吉の入ったポチ袋

とりあえず明日の予定をふくらます

哲男

恵子報

銀杏

郁夫

博泉

鈍甲

忠央

洋

修

祥昭

高鷺

朝子

賢子

仁清

三郎

弘一

亜成

ルイ子

仁子

さち子

麗

美智子

かすみ

柳弘

堅弘

秀雄

あさ子

公子

恵子

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

ギラギラと少年の目が恋を追う

本が好きマクラのそばは本の山

この道を行けば幸せ拾うかも

今日のしめ忘れてました薬のむ

夫婦二人拾った大にいやさる

捨てなさいどうせ拾った恋なんか

お年玉孫の笑顔に無理をする

自己紹介祖父伝来の自慢する

娘孫のために作っているおせち

人生の途中で拾う恋もある

塞翁が馬で今年も生きて行く

冬の恋バラは蕾のままで朽ち

遅刻したちやっかり後ろに紛れ込む

掛け違い鏡が見てる妻の留守

KOシン他人事だからたのしめる

終電車拾った傘が手になじむ

寒空に爛酒恋し寒の暮れ

遣影用五年前から撮ってある

日本から大根脚が消えて春

銀河の旅青い悲しみ拾い上げ

僕だつて女房元気で留守がいい

ちやっかりと儲け口ではあきまへん

あの席でちやっかり眠りさつと降り

子はハワイ親はテレビのお正月

チョココパフェ恋の終りを言い出せず

恋をして祝言決めたXマス

初明りひとりの刻を煌めいて

内気な奴でもてあまして恋心

わたくしに似た空き缶を拾いあげ

マドンナの店に群がる恋敵

靖鬼報

野鳥

亀子

蕨子

洋子

初音

寛十郎

泰子

幸香

雪菜

柳明

和子

美也

富夫

よし

里江

健二

純

キヨミ

靖鬼

哲夫

祐康

五月

勝巳

正和

耕治

奮水

ヨシエ

比呂

菜々

朋月

初恋の想い辿れば木の校舎
恋してるちよつと何かを期待して
吹けば消えるほどの幸せ慈しむ
逆境も取得にしかと返り咲く
反省を拾うと夜が白け出す

川柳塔さかい天邸(前々月分)村上

玄也報

仮面脱ぎ連休の間のち干す
まだ乗れるうちは父ちゃん運転手
勢いに乗った男の鼻の穴
兎や角を無視していつもわたし流
還暦に礼服を着て遺影撮る
逝く時はひっそりみな知らん間に
動けないひっそりなんて真つ平よ
ひっそりと好きなシャンソン歌つて
お化粧の乗りが気になるデートの日
かたつむり靈感あつて移動する
乗り継いで乗りついたきた人生図
体験の自慢に乗っているサブリ
付添いはノロマに思う救急車
無視してたイワンが今や大社長
しかとする子にも淋しい鬼が棲み
爛も好し冷酒また好し囲炉裏端
哀しいなレディー忘れたいつからか
相談に乗ってことん頼られる
嫌なことみんな無視して飲んでます
鉦ちゃんと叩いて晩年を過ごす
無視されてやがては噴火するマゲマ
腕白も診察代はしおらしい
挑戦に乗って闘争心燃やす
腰痛の傘寿へ誰も席空けぬ

哲男 見清 かずお 美龍 晴美 雅明 さくら 清 世紀子 永久 日の出 舞夢 篤子 像山 扶美代 かりん 健吾 時雄 敏治 誠一 和幸 みつこ 玄也 朋月 光 澄空 唯教 清晋

あの人がひっそりと逝く家族葬
勝ち組の列に並んで生き上手
マイカーは單車ゆっくりお買い物
無視できぬ位置に踏絵は置いてある
九州めぐり乗ってみたいよなつ星
ひっそりと消える手品を編み出そう
気の乗らぬ話に冷えたまじいお茶
あわてもの電車に乗って思ひ出す
パソコンもスマホも最早のりおくれ

川柳塔さかい(天邸(前月分)村上 玄也報

正直に言えば気になるあのジャッジ
死刑判決裁判長は苦悩する
ようもまあ別れもせんと半世紀
はや師走ポインセチアに気付かされ
離婚したことはないけどあこがれる
くり返し離婚が出来る甲斐性者
青春はいいな何時でもゴースサイン
離婚する夢をみてたらご飯です
バツイチが一番持てるクラス会
政界と党一方向的なゴースサイン
お歳だと軽く済ませる検査表
いい話リッチ気分にしてくれる
盛大に祝いましようよ五男五女
バツイチのあの明るさは何だろう
晶眞の目ジャッジに起こるブーイング
あれそれで判断できるのも夫婦
一合の酒でリッチな気分する
うちリッチ松茸飯にキャビアのせ
辛口の友情だった助け舟
誠意ある粋なはいご立派だ
生きていくハリまだ期待されている

としお 好子 月子 五月 八千代 半銭 俣子 天笑 誠一 としお 敏治 日の出 時雄 唯教 像山 清 世紀子 清晋 扶美代 みつこ 好子 健吾 光 朋月 永久 ばっは のん子 篤子

事務所便り

2月号で合同句集の投句用紙と振込み
用紙をお届け致しました。締切日は4月
10日です。
今年「春の誌上大会」はお休みです。
従って皆様方もどうも合同句集の方に、
ご参加下さいませようお願い申し上げます。
同人、誌友以外の方も、この機会を
どうぞご利用下さい。
ノートやメモ書きの句が、立派に装丁
された句集として日の目を見るのは、ま
た格別の喜びがあります。会員の粋を超
えた、結社の粋を超えた、充実した「記
念句集」が出来上がりますよう、ご協力
をお願い申し上げます。(山岡富美子)

判断を間違え命助かった
判断はスパコンよりも直観だ
大空を仰ぎリッチな気分です
酒の出る前に答は聞いておく
判断に苦しむ罪な御節介
はんぱんの判断ずつと甘いまま
ポケットにはない財布は知つてい
る
おせち料理金箔入りの豪華版
裁判員は辛い判断迫られる
朝露を踏んで紅葉の散歩道
美人だが喉の辺りを見ても
素人の判断情が先走る
清潔が一番店もご馳走も

舞夢 かりん 五月 俣子 半銭 雅明 玄也 八千代 光 和幸 澄空 冬虹 天笑

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	15日(土) 17時締切 飾・うすうす・絵馬	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳 ねやがわ	16日(日) 14時締切 刑事・負担・並ぶ・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	16日(日) 14時締切 記事・ポイント・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日) 13時30分開場 びっくり・比べる・杭	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	17日(月) 13時40分締切 握手・覚える・それとも 自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	18日(火) 13時30分締切 予定・ダイヤル・騙す つくづく・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔 すみよし	22日(土) 14時15分締切 運・エース・うっとり	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸 川柳会	22日(土) 12時30分開場 大・伸びる・ストレス	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市役所西隣 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市民 川柳会	23日(日) 14時締切 運・耐える・ふわふわ スイッチ	陵南の森 公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	23日(日) 13時30分開場 ライセンス・無料・どうせなら	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	24日(月) 18時開場 引く・汚い・くしゃくしゃ 今風	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	28日(金) 10時開場 高い・転機・舞う・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
京都 塔の会	31日(月) 14時締切 オーラ・骨・帰る	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	31日(月) 19時30分締切 恩・軽食・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	1 日(土) 14時締切 北風・配る・ぎりぎり・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	1 日(土) 14時締切 塀・投資・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉 吉 川 柳 会	1 日(土) 14時締切 知る・鈴・ちやほや	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま っ え 吟 社	1 日(土) 13時45分締切 ガラス・カード・気休め どっさり	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川 柳 塔 な ら	6 日(水) 14時締切 着る・坂・催促	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川 柳 塔 さ か い	7 日(金) 13時開場 ばりばり・鏡 折り句=とちり	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	8 日(土) 14時締切 うんざり・謎・奇妙	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	8 日(土) 14時締切 チャンス・黙る・ほろほろ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	9 日(日) 14時締切 空白・脳・飛ぶ・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	9 日(日) 14時10分締切 兼 題=賛成・オブジェ・ばやく 課題吟=菓子	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 秦原道夫
西宮北口 川 柳 会	10 日(月) 14時締切 願望・誘う・しょぼしょぼ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0084 西宮市樋の池10-18-104 福島弘子
ほ たる 川 柳 同 好 会	11 日(火) 13時30分締切 芽・湧く・なんと	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 あまがさき	11 日(火) 14時締切 焼く・弱み・たまたま・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
あかつき 川 柳 会	14 日(金) 14時締切 解ける・女・風船	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
岸 和 田 川 柳 会	15 日(土) 14時締切 虹・燃える・明るい スキップ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代

柳界展望

催。同人の天位。

目覚めれば昨日と同じ

水の音 藤井 寿代

☆高田美代子さん(参予・

藤井寺市)は川柳を通じて

教育文化に貢献した功

績により、藤井寺市から

市民表彰を受けた。

☆両川無限氏(同人・鳥

取市)は、朝日新聞鳥取

版川柳欄選者を、倉益一

瑤さんより引継いで2月

から担当する。

☆三宅保州氏(理事・海

南市)は、東京メトロが

発行している「メトロ

ウォーカー」誌の「メト

ロ川柳」の公募欄川柳の

選者を担当。

☆小栗清吾氏の新刊『男

と女の江戸川柳』平凡社

新書・定価本体 八四〇

円(税別)

☆竹治ちかし氏(理事・

出雲市)の投稿「川柳は

立派な文芸なのです」が

1月7日、山陰中央新報

に掲載された。

☆木本朱夏さん(副理事

長・和歌山市)は1月30

日、大阪府高齢者大学校・

エッセイ文学科に於て川

柳講座を担当。

☆本誌表紙を飾って下さ

る前田尋画伯は1月27日

から2月1日まで、マサ

ゴ画廊にて「川柳塔表紙

画きり絵展」を開催。好

評を博した。

▽出 版△

◇2013年城北川柳会

合同句集『わんど』A5

判131頁。

▼計 報▲

■木村貴代子さん(同人・

神戸市)は1月27日逝去。

新 同 人 紹 介

原 洋 志

— 郁夫・義昭・かずお推薦

行年79。告別式には楓楽 長野市 桜井 閑山

理事長、みつ子相談役他、 紹介者 小島 蘭幸

同人が参列した。

▽新誌友紹介△

大阪市 山崎 珠生

紹介者 大内 朝子

長井 善純

西川ひろし

四条畷市 紹介者 鈴木いさお

江島谷勝弘

高木 信男

森松まつお

長井 善純

福岡市 前田須美代

紹介者 小島 蘭幸

鳥取市 田中 天翔

紹介者 倉益 一瑤

▽2月号 P 69 上段 9 行

目、腐養土になる土にな

る。現職のカラ捨てて↓腐

養土になる現職のカラ捨

てて。P 102 中段 14 行目、

忠明→忠昭。

常任理事会 2月7日(金)

①20回川柳塔まつり②第

2回川柳塔社各地句会代

表・役員拡大会議③平成

27年度常任理事会・本社

句会日程④定例確認事項

⑤各部報告事項⑥その他

次回 3月6日(木) AM 10 時

川柳宮城野800号記念 全国誌上川柳大会

課題 「進」
選者 大西 泰世・小島 蘭幸
齊藤由紀子・新家 完司
千島 鉄男・徳永 政二
古谷 恭一・雫石 隆子
投句方法 便箋等の用紙1枚に2句詠
投句料 1口(2句詠)につき1,000円
1人で複数口の応募も可とします。
締め切り 3月25日(当日消印可)
賞 1位から5位まで表彰と盾。
優勝者には副賞として個人句
集発行権(宮城野選集100冊分)
無料で提供します。
投句先 〒983-0824
仙台市宮城野区鶴ヶ谷8-3-10
浜田 則子宛て
主催 川柳宮城野社
〒980-0011
仙台市青葉区上杉2-4-8
朝日プラザ313 TEL.022-227-0575

創立85周年記念 2014 ふあうすと川柳大会

日時 4月6日(日) 午前10時開場
場所 兵庫県民会館9Fホール
TEL.078-321-2131
神戸市中央区下山手通4-16-3
JR元町・阪神元町駅より北へ徒歩7分
地下鉄県庁前東①・②出口よりスグ
宿題 (各題2句、締め切り12時)
「文」 永藤 我柳 選
「愛」 角本 華峰 選
「うさぎ」 新家 完司 選
「ステップ」 森中恵美子 選
「飛ぶ」 大野 風柳 選
「樹」 平山 繁夫 選
「自由吟」 赤井 花城 謝選
会費 2,000円(記念品・発表誌呈)
懇親会 大会終了後、同会館10F「福の間」にて
当日受付 会費5,000円(先着80名まで)
主催 ふあうすと川柳社

第18回 川柳展望全国大会

日時 4月27日(日) 10時30分開場
場所 ホテル アウィーナ大阪
大阪市天王寺区石ヶ辻町 19-12
TEL.(06)6772-1441
参加費 1500円
講演 「展望川柳のユーモアの文体」
久保田半蔵門氏
題と選者
席題 「打 つ」 太秦 三猿
「仲」 石橋 芳山
宿題 「木・樹」 山田こいし
「足・脚」 高田 桂
「同 じ」 吉崎 柳歩
「暗 い」 高瀬 霜石
自由吟 草地 豊子
自由吟 鈴木 公弘
自由吟 新家 完司
自由吟 森中恵美子
自由吟 天根 夢草
各題2句・出句締切 12時00分
自由吟は各選者に違う句を出してください
事務局 〒567-0009 茨木市山手台4-6-3-101
TEL(072)649-5226 FAX(072)649-2334
主催 川柳展望社

創立57周年

第25回 時の川柳交歓川柳大会

日時 5月11日(日) 10時30分開場
会場 兵庫県民会館9階ホール
神戸市中央区下山手通4-16-3
TEL.078-321-2131
JR元町駅・阪神電車元町駅より北へ徒歩10分
市営地下鉄県庁前下車東出口より東へ徒歩5分
会費 2,000円(記念品・発表誌呈)
兼題 各題2句 締め切り12時
「表」 山本希久子 選
「菓 子」 阪本 高士 選
「強 い」 新家 完司 選
「熱 心」 恒弘 衛山 選
「不 思 議」 田中 新一 選
「誠(まこと)」 赤井 花城 選
「雑 詠」 平山 繁夫 謝選
特別課題 1句
「ほんやり」 本田 智彦 選
懇親宴 5,000円 同館10階 当日受付
主催 時の川柳社

第20回 川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔90周年記念川柳大会

と き 平成26年10月4日(土)

開場：午前11時、出句締切：正午、開会：午後1時

と ころ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 (近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《 同 人 総 会 ・ 議 事 》午前10時より

平成25年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成26年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

祝 辞 (一社)全日本川柳協会 理事長 大 野 風 柳 氏

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「文化人とは誰を言うのか」『上方芸能』発行人 木津川 計 氏

兼 題 「団 体」 川 柳 塔 社 川 上 大 輪 選

「降 る」 川柳文学コロキウム 赤 松 ますみ 選

「かたち」 びわこ番傘川柳会 徳 永 政 二 選

「ゆっくり」 川 柳 塔 社 西 出 楓 楽 選

「ソ フ ト」 番 傘 川 柳 本 社 田 中 新 一 選

事前投句 「輝 く」(9月1日必着) 川 柳 塔 社 小 島 蘭 幸 選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午 (午後5時頃終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会 費 3,000円 (当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎ 呈 小島蘭幸川柳句集・記念品

《 懇 親 宴 》

と き 平成26年10月4日(土) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウィーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円 (会席料理) 先着申込み 130名様

☆宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円 (朝食付き)

* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(月)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

第38回 全日本川柳2014年富山大会

日時 平成26年6月29日(日) 午前9時開場
会場 富山国際会議場 メインホール
〒930-0008 富山市大手町1-2

交通機関 JR富山駅から、徒歩…城址大通りを南へ約15分
市内電車(セントラム)…約7分「国際会議場前」下車
後援(予定) 文化庁・富山県・富山市・富山県教育委員会ほか
宿題 第一部 4月15日締切(当日消印有効)

事前投句 一般(高校生も含む)部門
「コビー」あきた じゅん 選 「くるり」弘兼 秀子 選
「どきどき」田中寿々夢 選 「巡る」梅崎 流青 選
事前投句 ジュニア(小・中学生)部門
「黒」福村今日志 選 「風 船」牧野 芳光 選
「自由を作る」川合 笑迷 選

専用用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句を記入、各題
二句無記名。封筒の裏面に住所、氏名明記。
投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛に
郵送または郵便振替口座へ送金のこと(当日消印有効)。
小中高生は投句料無料。

投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905
一般社団法人 全日本川柳協会 宛
TEL 06(6352)2210 FAX 06(6352)2433

宿題 第二部(当日投句・11時締切)
「風 船」米島 暁子 選 「軽 い」恒弘 衛山 選
「黒」高瀬 霜石 選

第二次選者 竹本 颯太郎 各題二句、当日配布の句箋に記入。
田中八洲志 久保田半蔵門 大木 俊秀
参加費他 四、〇〇〇円(参加費二、〇〇〇円・昼食他二、〇〇〇円)

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞
(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダル

全日本川柳富山大会実行委員長 砂田 勝行

〈表彰式典・前夜祭ご案内〉

◎表彰式典Ⅱ平成26年6月28日(土) 午後5時半
(川柳文学賞・功労者・大会10回連続出席者)

◎前夜祭Ⅱ表彰式典後、同一会場
会場 富山第一ホテル(JR富山駅南口から徒歩10分)
〒930-0008 富山市桜木町10-10

TEL 076(442) 4411

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
大会・前夜祭の問い合わせ先
〒930-0916 富山市向新庄1276-5
中本はじめ方

全日本川柳2014年富山大会実行委員会事務局 宛
TEL・FAX 076(425) 1477

大会・前夜祭参加費の送金先 4月15日(必着)
郵便振替口座番号 00760101108610
全日本川柳富山大会実行委員会 宛

〈宿泊・観光ご案内〉

宿泊 (一泊朝食付き・お一人様・税込み)
富山地鉄ホテル・アパヴィラホテル富山駅前
ホテルトリートイン富山駅前・ホテルプラザ富山
アパホテル富山駅前・富山第一ホテル

宿泊料金 税込み 6,000円〜11,600円
観光 A世界遺産「五箇山合掌集落」コース
6月2日(土) 午後1時〜午後4時40分 4,500円
集合場所 富山駅北口 午後1時
募集人員 最少催行人員 20名様

B立山アルペンルート「室堂」と「鱒のすし」コース
6月30日(月) 午前9時〜午後4時30分 9,000円
集合場所 富山駅北口 午前9時
募集人員 最少催行人員 20名様

宿泊・観光の申し込み・問い合わせ先 (株)エヌトラベル
担当Ⅱ中井 清志
TEL 076(433) 0048

編集後記

★水平線 今にどんでん
返しある (薫風)

★『現代川柳の群像』は
上下併せて七五〇頁とい
う大著。二〇〇一年に高
知の「川柳馬車くるーぶ」
から発行された。編集は
今は亡き北村泰章さん。
昭和2桁生れの新進気鋭
の川柳作家をとりあげ、
作品鑑賞・評論を掲載し
ており、収録された作家
は五二名。

★天根夢草・岡田俊介・
佐藤岳俊・大西泰世・野
沢省悟・細川不凍・梅崎
流青・・時代を担う俊
英の中に小島蘭幸・新家
完司のお名前が。蘭幸論
は薫風先生が、完司論は
天根夢草氏が執筆。蘭幸
さんは広島から、完司さ
んは鳥取から毎月大阪の
本社句会に参加される。

お二人は見事に薫風先生
のご期待に応えられた。
★川柳「いずも」におも

しろい記事をみつけた。
鳥根県が二年連続「美肌
日本一」に選ばれたとい
う。いずも編集人の竹
治ちかしさん曰く。「鳥
根の男性は美肌の女性に
囲まれて幸せだなア」鳥
根の方に美肌の秘訣をお
聞きたいものだ。

★「うるおう高保湿」の
キャッチコピーに釣られ
て、「日本酒の化粧水」
を買ったのですよ。発売
は菊正宗酒造。スキんケ
アローションハイモスト
の謳い文句も利きそうだ
し、五〇〇mlの容量は、ざ
ばざば使えそうだし…。
★ところが顔にたっぷり
叩きこむたびに、日本酒
の匂いがする。飲兵衛な
らばたまらない匂いであ
ろうが、お酒は付き合ひ
にはほんの微量という私。

ひとこと

指示語について

私は川柳の先生に「あの頃、あ
のとき、あの人、あの話、あの歳、
そのとき、その言葉、この窓」な
どの指示語を使った句は弱いと教
えられてきました。それは、指
示語の内容がはつきりと見えない
し、わかりにくいと言うことです。
塔誌にも、指示語を使った句が
かなり載っています。指示語を使

った言葉は、何を指しているのか
わかりにくいのがほとんどです。
詠み手がわかっている、読み手
はわからないのが指示語のようだ
と思います。
塔誌や句報で目にする句は入選
句です。選者はどこまで指示語を
理解して選をされるのかが一番気
になるところです。みなさんは、
この指示語についてどのように思
われますか。
(藤井 宏造)

化粧水を使うたびに酔っ
払いそう。しかし日本酒
で化粧水という発想は凄
い。

★青砥たかこさんの「句
会燦燦」鑑賞は今号で終
わります。歯切れのよい
鑑賞で誌面を飾って頂き
ました。次号から「川柳
瓦版」の編集人・井上一
筒さんに代わります。ご
期待ください。
(朱)
◇川柳塔創刊九十周年記
念合同句集がこの夏発刊
される。
◇この間、回を追う毎に
参加者は増加、前回平成
十六年刊行の第五集は、

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)

地名

市都
道府
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「心」(3月15日締切)

5月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

5月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 川上大輪選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄「心」 (2句) 竹治ちかし共選
大内朝子選

一路集 (3句) 「サボート」 楠見章敏選
「そこそこ」 多和敬子選
「コレクション」 (3句) 山口光久担当

初歩教室

6月号

檸檬抄「美人」
一路集「三角」「プレイ」「怪しい」
初歩教室「あっさり」

第32年度 夜市川柳募集

第10回「空 気」古今堂蕉子選
ハガキに3句 3月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料84円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一四年(平成二十六年)三月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アト
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一〇一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 (〇六) 七九一三九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

本社3月句会

とき 3月6日(木) 13時開場・13時40分締切
— 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし「バワフル川柳」

兼題「仲問」「沈む」「めらめら」「怖い」「見学」

会費 1000円 投句料 500円 (切手可)

小島蘭幸選 河内月子選 池森子選 両川無限選 矢倉五月選 坊農柳弘選 新家完司選

本社4月句会

7日(月) 午後1時から
兼題「溝」「化ける」「ぎゅっ」「白」「合図」

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いします。



杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア (ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>